

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告 2

しも とう ばる みや ぞの
下唐原宮園遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告 2

下唐原宮園遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査



下唐原宮園遺跡B地区全景

序

福岡県教育委員会では建設省大分工事事務所の委託を受け、平成4年度から山国川河川改修に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成5年度に発掘調査を実施した、築上郡大平村大字下唐原所在の下唐原宮園遺跡の調査記録であります。当遺跡の所在する豊前地域は瀬戸内海の西端部に位置し、海上交易の盛んな場所として知られておりましたが、今回の調査でも弥生時代の他地域との交流を示す貴重な成果を得ることができました。

本書が、文化財愛護思想の普及、活用の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたって、御協力いただいた多くの方々に対しまして、深甚の謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例 言

- 1 この報告書は、平成5年度に福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所から委託を受けて実施した、一級河川山国川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第2集である。
- 2 本書に掲載した遺構図は、高橋章・吉田東明・高畑由美子・村上知文が作成した。
- 3 本書に掲載した遺構写真は高橋・吉田が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト・オオツカに委託した。
- 4 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復原作業を行い、実測図は吉田のほか平田春美・岡由美子・久富美智子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・古田千穂が作成した。
- 5 挿図の浄書は豊福弥生・原カヨ子が実施した。
- 6 本書に使用した方位はすべて磁北である。
- 7 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化課太宰府事務所において保管している。
- 8 本書の執筆ならびに編集は吉田が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
1.	調査の経過	1
2.	調査の組織	1
第2章	位置と環境	
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	5
第3章	調査の内容	
1.	A地区の遺構と遺物	7
2.	B地区の遺構と遺物	23
3.	C地区の遺構と遺物	99
4.	E地区の遺構と遺物	100
5.	F地区の遺構と遺物	102
6.	縄文時代の土器	111
第4章	おわりに	
1.	遺跡について	113
2.	弥生土器について	114

図 版 目 次

- 巻頭図版 下唐原宮園遺跡B地区全景
- 図版 1 1 A地区全景 (東から)
2 A地区東半部 (西から)
3 A地区東半部 (東から)
- 図版 2 1 1・2号住居 (南から)
2 1号住居 (東から)
3 1号住居遺物出土状態 (東から)
- 図版 3 1 1号住居遺物出土状態 (南から)
2 1号住居遺物出土状態 (西から)
3 1号住居遺物出土状態 (西から)
- 図版 4 1 1号竪穴 (南から)
2 1号竪穴遺物出土状態 (西から)
3 1号竪穴遺物出土状態 (西から)
- 図版 5 1 1号土坑 (西から)
2 2号土坑 (西から)
3 3号土坑 (西から)
- 図版 6 1・2号住居、1号竪穴出土土器
- 図版 7 2・3号土坑、A地区包含層出土土器
- 図版 8 A地区包含層出土土器、磁器、土製品、石器、金属製品
- 図版 9 1 B地区から山国川を望む (南から)
2 B地区全景 (東から)
- 図版 10 1 B地区西半部
2 B地区4・5号住居付近
- 図版 11 1 3号住居 (東から)
2 4号住居周辺 (東から)
3 4号住居 (東から)
- 図版 12 1 5号住居周辺 (東から)
2 5号住居 (西から)
3 5号住居・45号土坑 (西から)
- 図版 13 1 2号竪穴 (北から)
2 2号竪穴遺物出土状態 (北から)
3 3号竪穴 (北から)
- 図版 14 1 5・6号土坑 (西から)
2 7・8号土坑 (西から)
- 図版 15 1 9号土坑 (西から)
2 12号土坑 (東から)

- 3 13号土坑 (北から)
- 図版16 1 14号土坑 (西から)
2 15号土坑 (西から)
3 16号土坑 (北から)
- 図版17 1 25号土坑 (東から)
2 28号土坑 (西から)
3 29号土坑 (南から)
- 図版18 1 33号土坑 (北から)
2 35号土坑 (北から)
3 38号土坑 (東から)
- 図版19 1 42・43号土坑 (東から)
2 45号土坑 (北から)
3 45～47号土坑 (北から)
- 図版20 1 48号土坑 (南から)
2 49号土坑 (南から)
3 49号土坑遺物出土状態 (南から)
- 図版21 1 51号土坑 (西から)
2 51号土坑遺物出土状態 (南から)
3 52号土坑 (南から)
- 図版22 3～5号住居、2号竪穴出土土器
- 図版23 2・3号竪穴、4～9号土坑出土土器
- 図版24 10～29号土坑出土土器
- 図版25 30～43号土坑出土土器
- 図版26 45～49号土坑出土土器
- 図版27 51・52号土坑、B地区ビット・包含層出土土器
- 図版28 B地区出土石器①
- 図版29 B地区出土石器②
- 図版30 B地区出土石器③
- 図版31 B地区出土石器④
- 図版32 B地区出土土製品・石製品・古銭・鉄製品
- 図版33 1 C地区全景 (西から)
2 C地区出土土器
3 E地区全景 (北から)
4 E地区出土土製品・石器
- 図版34 1 F地区全景 (西から)
2 F地区調査風景 (東から)
- 図版35 1 53号土坑 (西から)
2 53号土坑 (北から)
3 54号土坑 (東から)

図版36 F地区出土土器

図版37 下唐原宮園遺跡出土縄文土器①

図版38 下唐原宮園遺跡出土縄文土器②

挿 図 目 次

第1図	大平村位置図	3
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50000)	4
第3図	調査区位置図 (1/1000)	6
第4図	A地区遺構配置図 (1/200)	7
第5図	1号住居実測図 (1/60)	8
第6図	1号住居出土土器実測図 (1/4)	9
第7図	2号住居実測図 (1/60)	10
第8図	2号住居出土土器実測図 (1/4)	10
第9図	1号竪穴実測図 (1/60)	11
第10図	1号竪穴出土土器実測図 (1/4)	12
第11図	1~3号土坑実測図 (1/30)	14
第12図	1・2号土坑出土土器実測図 (1/4)	14
第13図	3号土坑出土土器実測図 (1/4)	16
第14図	A地区包含層出土土器実測図① (1/4)	18
第15図	A地区包含層出土土器実測図② (1/4)	19
第16図	A地区包含層出土土器・磁器実測図 (1/3、1/4)	20
第17図	A地区出土土製品・石器・金属製品実測図 (2/3、1/2)	21
第18図	B地区遺構配置図 (1/200)	22
第19図	3号住居実測図 (1/60)	23
第20図	3号住居出土土器実測図 (1/4)	24
第21図	4号住居実測図 (1/60)	25
第22図	4号住居出土土器実測図 (1/4)	26
第23図	5号住居実測図 (1/60)	29
第24図	5号住居出土土器実測図 (1/4)	30
第25図	2号竪穴実測図 (1/60・1/30)	32
第26図	2号竪穴出土土器実測図① (1/4)	33
第27図	2号竪穴出土土器実測図② (1/4)	34
第28図	2号竪穴出土土器実測図③ (1/4)	35
第29図	3・4号竪穴実測図 (1/60)	37
第30図	3・4号竪穴出土土器実測図 (1/3、1/4)	38
第31図	4~9号土坑実測図 (1/40)	40
第32図	4~6号土坑出土土器実測図 (1/4)	42

第33图	7号土坑出土石器实测图(1/4)	43
第34图	8号土坑出土石器实测图(1/4)	45
第35图	9号土坑出土石器实测图(1/4)	47
第36图	10~20号土坑实测图(1/40)	49
第37图	10·12·14·15号土坑出土石器实测图(1/4)	51
第38图	17·18号土坑出土石器实测图(1/4)	53
第39图	19号土坑出土石器实测图(1/4)	56
第40图	22~29号土坑实测图(1/40)	58
第41图	21·22·25·27·28号土坑出土石器实测图(1/4)	59
第42图	29号土坑出土石器实测图(1/4)	61
第43图	30·31·33·35号土坑实测图(1/40)	63
第44图	30·31号土坑出土石器实测图(1/4)	64
第45图	33·35·36·38号土坑出土石器实测图(1/4)	66
第46图	36~39号土坑实测图(1/40)	67
第47图	40·41号土坑实测图(1/40)	70
第48图	40·41号土坑出土石器实测图(1/4)	71
第49图	42~45号土坑实测图(1/40)	73
第50图	43号土坑出土石器实测图(1/40)	74
第51图	45~47号土坑出土石器实测图(1/4)	75
第52图	46~48号土坑实测图(1/40)	77
第53图	48号土坑出土石器实测图(1/4)	78
第54图	49~52号土坑实测图(1/30)	80
第55图	49·50号土坑出土石器实测图(1/4)	81
第56图	51号土坑出土石器实测图(1/4)	83
第57图	52号土坑出土石器实测图(1/4)	84
第58图	B地区ピット出土石器实测图(1/4)	86
第59图	B地区包含層出土石器实测图①(1/4)	87
第60图	B地区包含層出土石器实测图②(1/4)	88
第61图	B地区包含層出土石器实测图③(1/4)	90
第62图	B地区出土石器实测图①(2/3)	92
第63图	B地区出土石器实测图②(2/3)	93
第64图	B地区出土石器实测图③(1/2)	94
第65图	B地区出土石器实测图④(2/3、1/2)	95
第66图	B地区出土石器实测图⑤(1/2)	97
第67图	B地区出土土製品·石製品·古銭实测图(1/1、2/3、1/3)	98
第68图	B地区出土鉄器实测图(1/2)	99
第69图	C地区遺構配置图(1/100)	99
第70图	C地区出土石器实测图(1/4)	100
第71图	E地区出土石器实测图(1/4)	100

第72図	E地区遺構配置図 (1/200)	101
第73図	E地区出土土製品・石器実測図 (2/3、1/2)	102
第74図	F地区遺構配置図 (1/200)	102
第75図	53~56号土坑実測図 (1/40)	103
第76図	53号土坑出土土器実測図① (1/4)	104
第77図	53号土坑出土土器実測図② (1/4)	105
第78図	54・55号土坑出土土器実測図 (1/4)	107
第79図	F地区ピット出土土器実測図 (1/4)	109
第80図	F地区出土石器実測図 (2/3、1/2)	109
第81図	下唐原宮園遺跡出土縄文土器実測図① (1/3)	110
第82図	下唐原宮園遺跡出土縄文土器実測図② (1/3)	111
第83図	下唐原宮園遺跡出土縄文土器実測図③ (1/3)	112

表 目 次

第1表 新旧番号対応表

第2表 石製品・土製品・鉄器観察表

第1章 はじめに

1 調査の経過

山国川河川改修工事に係る文化財の取り扱いについては、平成3年度に建設省九州地方建設局大分工事事務所から協議があり、平成3年4月24日に現地踏査による分布調査が実施された。この結果、ほぼ全区間に埋蔵文化財包蔵地のあることが予測された。

恒久橋架設工事に関しては、平成4・5年度に計画されており、これを受けて平成4年11月16日～11月21日に試掘調査を実施した。この結果、計7本の試掘トレンチ全てにおいて、遺構・遺物が確認され、工事前に全面的な発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずる旨を工事事務所に報告した。

本調査は工事事務所と協議の上、平成5年7月16日より調査を開始した。遺跡名は調査当時「下唐原地区遺跡」と仮称した。調査はボックス設置区域を優先して行うこととし、調査区をA～F地区に区画して、順次調査を行った。

調査期間中、同時平行で発掘調査を行っていた百留居屋敷遺跡との兼ね合いもあり、また7・8月は記録的な長雨だったこともあり、思い通りに調査を進行する事が出来なかった。また遺跡の所在する場所は山国川の自然堤防上に当たり、黄褐色微砂層で形成される土層に遺構が掘削されるため、検出には困難を究めた。特にA・B両地区は遺構の重複が著しく、手にした移植ごてを地面に突き刺し、頭を抱える日々が続いた。

調査は平成5年10月22日に無事終了した。調査後の整理・報告書作成は平成9年度に実施した。遺跡名については報告書作成時に他遺跡との関連も考慮し、「下唐原宮園遺跡」と改称して報告している。尚、発掘調査報告書作成後、出土遺物・記録類は、文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において保管する。

2 調査の組織

平成5年度の調査関係者および平成9年度の整理関係者は下記の通りである。

建設省大分工事事務所

	平成5年度	平成9年度
所長	辻 英夫	中村 稔
副所長	野上 昭治	小野 道春
調査第一課長	吉岡 寿治	内田 久男
同計画係長	三浦 一浩	廣松 洋一
係員	加藤 光男	井上 宗雄・山口 健治
中津出張所長	橋村 和敏	中原 鶴見

同事務係長	山本 和男	田代 節子
同技術係長	大野 治一	小野 富生

福岡県教育委員会

総括	教育長	光安 常喜	光安 常喜
	教育次長	樋口 修資	松枝 功
	指導第二部長	丸林 茂夫	竹若 幸二
	文化課長	森山 良一	石松 好雄
	参事兼文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄
	文化課長補佐	清水 圭輔	城戸 秀明
	参事補佐兼室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘
	文化課調査班総括	橋口 達也	橋口 達也
庶務	同 管理係長	毛屋 信	黒田 一治
	同 事務主査	富田 浩一	久保 正志
	同 主任主事	久保 正志	田中 利幸
調査	同 参事補佐	高橋 章 (調査担当)	木下 修
			新原 正典
			中間 研志
	同 技師	吉田 東明 (調査担当)	吉田 東明 (報告書作成担当)
	同 整理指導員		岩瀬 正信 (遺物整理担当)
			平田 春美 (遺物実測担当)
			豊福 弥生 (製図担当)
		北岡 伸一 (写真担当)	

発掘調査には、作業員として次の方々の参加があった。

百留 千代子	笹原 昭子	中野 笑子	山本 睦子
村口 フサ子	西尾 ミツ子	坪根 春子	次郎丸ヨシ子
坪根 百代	重吉 秀子	久保 一子	喻西 操
重吉 恵子	北明 年枝	恵良 美恵子	村上 知文
金山 幸子	金山 定子	榎垣 弥生	高畑 由美子
道免 アサノ	道免 文子	田井 トキエ	野間口 国見
野間口 久子	渡辺 靖	松本 アイ子	東 和子
東 ミサ子	田井中ヒデ子	竹田 シゲ子	

第2章 位置と環境

1 地理的環境

下唐原宮園 (SHIMOTOUBARU-MIYAZONO) 遺跡は、福岡県築上郡大平村大字下唐原字宮園644・645・647・657・658・659・660・662・663・667・668番地に所在する。

当遺跡の所在する大平村は福岡県の東端にあり、東は一級河川山国川を境にして大分県中津市・三光村・本耶馬溪町に、南は大平山・瓦岳・雁股山を結ぶ英彦山山系を分水嶺として耶馬溪町に、西は同山系から掌状に伸びる一稜線をもって豊前市に隣し、北に接する新吉富村、吉富町を隔てて周防灘を望む、面積48.68km²の風光明媚な農村である。

本村の大部分は山地からなっているが、その大半が安山岩類に属する

角礫岩・安山岩からなっており、一部花崗岩の一種である花崗閃緑岩がある。いずれも激しい地殻変動を伴った、火山活動による火成岩である。その先端の部分に、洪積層が連なっている。およそ100万年くらい前から、海・川の堆積物、あるいは火山灰等が堆積された台地状の平地である。

山国側流域には細長く沖積層が形成されている。川が運んだ礫や砂、粘土等を堆積した土壌で、水利に恵まれ、土地も肥えており、早くから土地利用がなされたところである。

また大平村は耶馬日田英彦山国定公園の一部でもある。南の大分県境にある、雁股山・瓦岳・大平山等は英彦山から耶馬溪に連なる溶岩台地状の火山地帯の一部で、それが長い間の浸食により、豊前市の求菩提山にみられるピュート(円錐台状形)や、大分県の八面山にみられるメーサ(卓状形)の山となり、また、耶馬溪や大平村有野の弘法窟にみられるような、いわゆる奇巖怪石の風景をつくりあげている。

それら南側の山地から、いくつかの放射状の河谷がぎざまれ、それに沿って集落が形成されている。また、百留・土佐井付近より北へ向かって扇状地状の洪積層・沖積層の台地・平地が連なり集落が形成されている。当遺跡もこの扇状地上に位置している。(註1)



第1図 大平村位置図



1. 昭和町遺跡 2. 吉木遺跡 3. 吉木井町遺跡 4. 三宅門敷生田遺跡 5. 小石原泉遺跡 6. 泉石遺跡 7. 鈴鹿山古墳 8. 楢生山古墳
 9. 今吉遺跡 10. 広瀬寺古墳 11. 天仲寺古墳 12. 欠頭田遺跡 13. 大塚古墳 14. 巨石塚古墳 15. 吉岡遺跡 16. 鶴梨山古墳群
 17. 大ノ瀬下大坪遺跡 18. 轉方古墳群 19. 夙高畑田遺跡 20. 黒口遺跡群 21. 山田1号墳 22. 山田瓦葺跡 23. 支枝丸遺跡
 24. ハタガタ遺跡 25. 鎌定宮遺跡 26. 池ノ口遺跡 27. 三ツ跡遺跡 28. 鹿木崎寺 29. 聖木高木遺跡 30. 牛原天王遺跡 31. 中桑野遺跡
 32. 宇野垂水遺跡 33. 宇野代遺跡 34. 宇野台古墳群 35. 桑野古墳群 36. 上桑野遺跡 37. 桑野遺跡 38. 大塚本遺跡 39. 鼓濱寺古墳
 40. 川下遺跡 41. 下藤原石塚遺跡 42. 小松遺跡 43. 金塚原前方後円墳 44. 上の熊遺跡 45. 金熊塚遺跡 46. 穴ヶ嶽山古墳
 47. 穴ヶ嶽山遺跡 48. 穴ヶ嶽山南古墳群 49. 上ノ新古墳群 50. 小山田古墳群 51. 野原熊遺跡 52. 里山古墳群 53. 和ヶ原遺跡
 54. 上原原遺跡 55. 土佐井ノソア遺跡 56. 土佐井遺跡 57. 今蔵遺跡 58. 百留磯穴跡 59. 城隈穴跡 60. 高畑遺跡 61. 高畑遺跡
 62. 浄代小学校校庭遺跡 63. 金手遺跡 64. 上万田遺跡 65. 都原庵寺 66. 長善原遺跡 67. 幣塚跡古墳群 68. 上ノ原古墳群
 69. 船助野地遺跡 70. 佐知久尻遺跡 71. 佐知遺跡 72. 鎌山遺跡群 73. 黒水遺跡 74. 大坪遺跡 75. 穂多田遺跡 76. 森山遺跡
 A. 下原富原遺跡 B. 上原原本郷遺跡 C. 上原了清遺跡 D. 百留原原遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50000)

2. 歴史的環境

山国川流域の弥生時代に関しては、大規模開発の波が当地域にまで及んでおらず、発掘調査例がほとんど無かった事とも相俟って、長い間その実態は不明に近く、散布地からの採集資料で他地域との比較検討が行われていた。1974～1976年に行われた新吉富村垂水廃寺^(註2)の調査の際に、竪穴住居・貯蔵穴等から前期～中期の遺物が出土し、また1977年の新吉富村中桑野遺跡^(註3)の調査では、竪穴住居・土坑等から前期～中期の遺物が出土している。上記2遺跡が当地域の弥生時代遺跡発掘調査の初例である。

近年、農村活性化事業の一環として、当地域でも交通体系・生活環境の整備による大規模開発の波が押し寄せてきた。一般国道10号豊前バイパス・中津バイパス建設、山国川河川改修、土地区画整理事業、大型工業団地建設等の各種開発である。これらにより、様々な考古学的情報が次第に増加しつつある。

近年発掘調査が行われた当地域の弥生時代遺跡には、次の様なものがある。

中桑野遺跡に隣接する新吉富村牛頭天王遺跡^(註4)では、中期の大型掘立柱建物3棟を含む掘立柱建物群および土坑、環濠等が発見され注目を集めた。他に集落遺跡として、中期後半～後期前半の竪穴住居が検出された新吉富村尻高畑田遺跡^(註5)、後期～終末期の竪穴住居39棟が検出された同村池ノ口遺跡^(註6)、中期前半の土坑が検出された同村垂水高木遺跡^(註7)、中期の竪穴住居・土坑等が発見された同村桑野遺跡^(註8)、土佐井ミソソダ遺跡^(註9)、後期の竪穴住居等が検出された同村上唐原遺跡^(註10)・郷ヶ原遺跡^(註11)が挙げられる。山国川右岸でも、中・後期の竪穴住居を検出した三光村佐知遺跡^(註12)、前期末～後期初頭の集落遺跡である中津市森山遺跡^(註13)などがある。

墓地遺跡としては、中期の方形墳丘墓と土坑墓が発見された大平村大塚本遺跡^(註14)、86基の石蓋土坑墓が発見され、船載内行花文鏡片・素環頭刀子等の鉄製品が出土した同村穴ヶ葉山遺跡^(註15)、同じく石蓋土坑墓・土坑墓等を検出し、細型銅剣片を出土した同村金居塚遺跡^(註16)等がある。古墳時代へと繋がる当地域首長層の形成・発展過程を考える上で、貴重な資料である。

註1 地理的環境については、大平村誌編集委員会「大平村誌」1986 によるところが多い。

註2 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」新吉富村文化財調査報告書 第2集 1976

註3 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」新吉富村文化財調査報告書 第3集 1978

註4 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」新吉富村文化財調査報告書第8集 1994

註5 新吉富村教育委員会「尻高畑田遺跡」新吉富村文化財調査報告書第7集 1992

註6 福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集 1996

註7 註4と同

註8 福岡県教育委員会「桑野遺跡・上の旗遺跡・小松原遺跡」豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集下巻 1997

註9 大平村教育委員会「土佐井ミソソダ遺跡」大平村文化財調査報告書第7集 1991

註10 福岡県教育委員会「上唐原遺跡1」豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集 1995

註11 平成元年度、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査を実施。

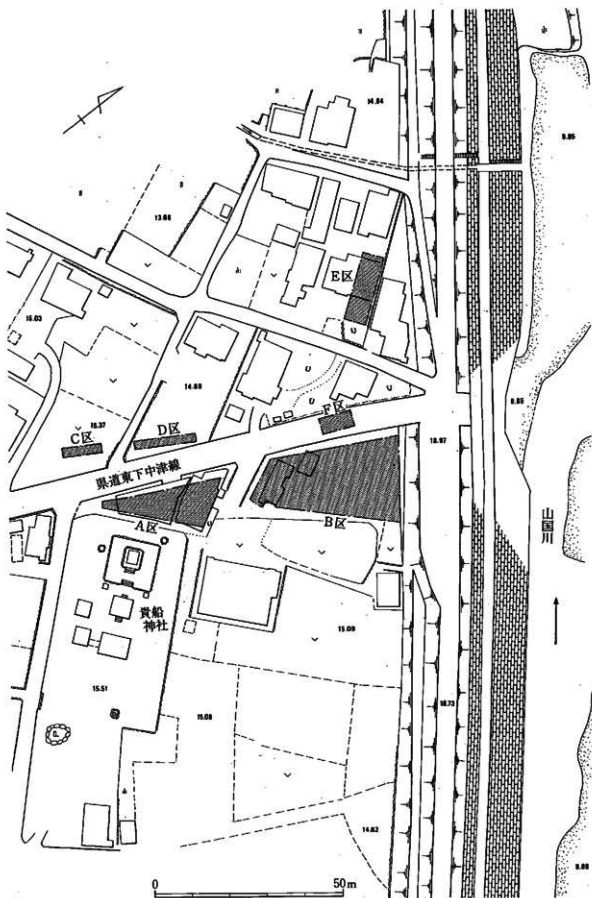
註12 大分県教育委員会「佐知遺跡」大分県文化財調査報告書第81輯 1989

註13 大分県教育委員会「森山遺跡」中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1995

註14 平成2～3年度、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査を実施。

註15 大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」大平村文化財調査報告書第8集 1993

註16 福岡県教育委員会「金居塚遺跡1」豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 1996



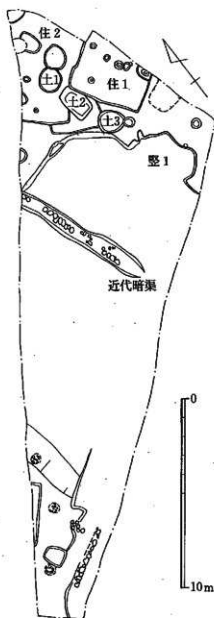
第3図 調査区位置図 (1/1000)

第3章 調査の内容

下唐原宮園遺跡の調査区内には、現在も使用されている生活道路・井戸などがあり、これらを確保しておく必要があった。したがって、これらを除いた区域を調査区域とした。

便宜上、6カ所に区切られた調査区域をそれぞれA～F地区と設定し、発掘調査を実施した。なお、D地区については、再度試掘調査を行った結果、遺構・遺物ともに検出されなかったため、調査対象区域からは除外した。以下では、各々の地区について説明を行う。

1 A地区の遺構と遺物



第4図 A地区遺構配置図 (1/200)

下唐原宮園遺跡の南西側に位置する。橋脚架設に伴う渠道拡幅部分を調査対象地とした。調査面積は約170㎡。標高は西側で14.6m前後、東側で15.1m前後で、東から西へと若干傾斜している。調査区中央付近から西側にかけては、近現代家屋の基礎・暗渠等が残る。この付近では遺構は確認されず、東側においてのみ確認されている。

検出した主な遺構は、竪穴住居・竪穴・土坑・ピット等である。

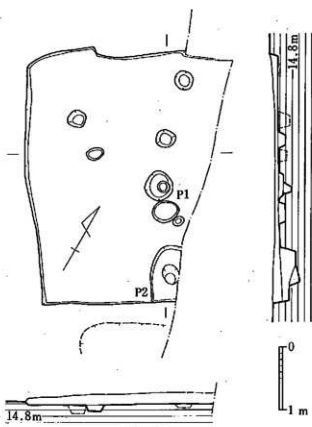
1号住居 (図版2・3、第5図)

調査区の東端部で検出した。2号住居・2号土坑と重複しており、この中では最も新しい。東側が調査区外へと伸展するが、平面プランは正方形あるいは長方形になるであろう。西壁長は3.8mを測る。壁はやや緩やかな立ち上がりとなる。確認面から床面までの深さは、北側で10cm、東側で20cm、南側で15cm、西側で15cmを測る。貼床、床面硬化は確認していない。

柱穴は確実に主柱穴と判断しうるものはなく、P1およびP2をその可能性があるものとしてあげておく。床面直上からは土器が数カ所にまとまって出土している。住居廃棄後に投棄されたものであろう。

出土土器 (図版6、第6図)

壺(1～4) 1～3は壺の肩部片。1は2条沈線の上部に貝殻による無軸羽状文、2は2条沈線の上



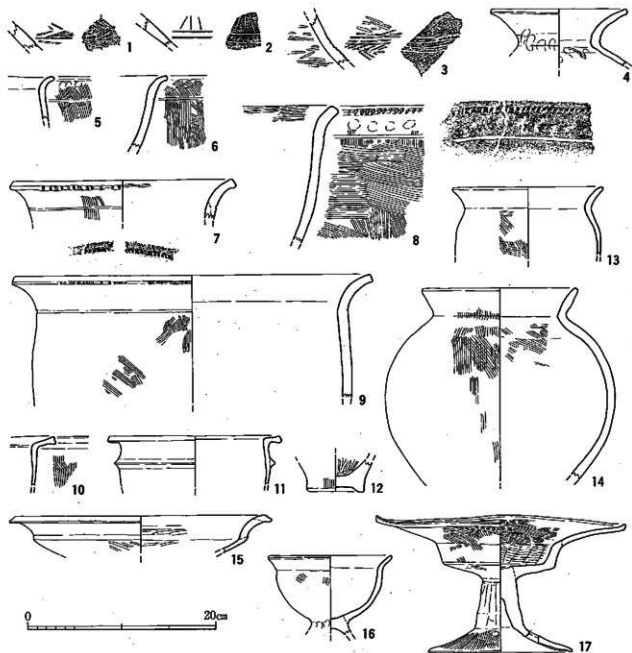
第5図 1号住居実測図 (1/60)

に貝殻による山形文、3は4条沈線の下部にヘラによる無軸羽状文を施す。4は強くしまった頸部から、大きく外反しながら外側に長く伸びる壺の口縁部。口径14.4cm。内面ハケのちナデ、外面横ナデ。屈曲部の内外に指圧痕が残る。

甕 (5-14) 5・6は口縁部下に1条の沈線を施す如意形口縁のもの。7-9は口縁下部下端に刻目を施し、口縁部下に1条の沈線を施す如意形口縁のものである。7はやや大きく開く口縁部で、端部を横ナデして面をつくり、その下端にまばらな刻目を施す。口径24.0cm。8は口縁部内面および外面の沈線以下は横ハケ調整を行う。9はわずかに内湾する胴部から、長く外反する口縁部へと続く。口縁端部を横ナデして面をつくり、その下端に小さく密な刻目を施す。口径38.2cm。10は内面に弱い稜をもち「く」字形に屈曲する口縁部片で、端部を強く横ナデしており、わずかに跳ね上げ気味にする。11は直立する胴部から弱い稜をもって水平に短く伸びる「く」字形口縁で、端部はわずかに跳ね上げ気味となる。口縁部下に三角突帯を1条巡らす。口径18.4cm。12はやや上げ底となる底部片で、内面はヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。底径6.0cm。13は内湾する胴部から外反する口縁部へと続く。口縁部内外面および胴部内面は横ナデ、それ以外はハケ調整を行う。口径15.9cm。14は球形の胴部から、内面に鋭い稜を持って屈曲し、開く口縁部へと至る。口縁部は横ナデ、胴部内外面はハケ調整を行う。

高坏 (15-17) 15は坏部上半が強く反転し、外方へとやや長く伸びる。内面および外面坏部下半はヘラミガキ、口縁端部および外面坏部上半は横ナデ。口径28cm。16は深い坏部から短く外反した口縁部へと続く。口縁部および坏部内面はナデ、外面はハケ後横ナデ。17は瀬戸内方面の要素が色濃く認められるもので、強く屈曲する坏部下半から、反転して長く外側へと伸びる坏部上半へと続く。端部は強くナデて上方へと広げている。脚裾部は大きく外方へと広がり、円孔を3方向に配置する。内外面ともにハケ調整を行う。

遺物にはかなりの混入が認められるが、14-17が当住居に伴う遺物である。弥生時代後期終末に比定される。



第6図 1号住居出土土器実測図 (1/4)

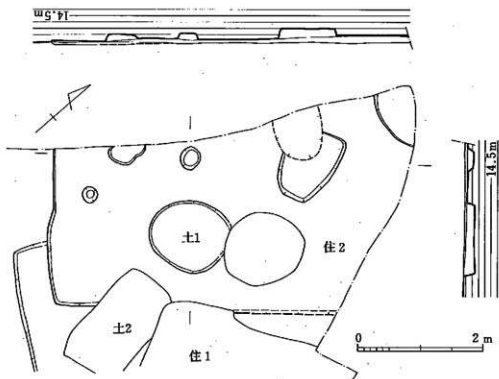
2号住居 (図版2-1、第7図)

調査区の北東端部で検出した。1号住居・1号土坑・2号土坑と重複しており、この中でもっとも古い。大半が調査区外へと伸展するが、平面プランは正方形あるいは長方形になるであろう。壁は調査区内で検出した限りではやや緩やかな立ち上がりとなる。確認面から床面までの深さは、北側で10cm、東側で10cm、南側で5cmを測る。貼床、床面硬化は確認していない。

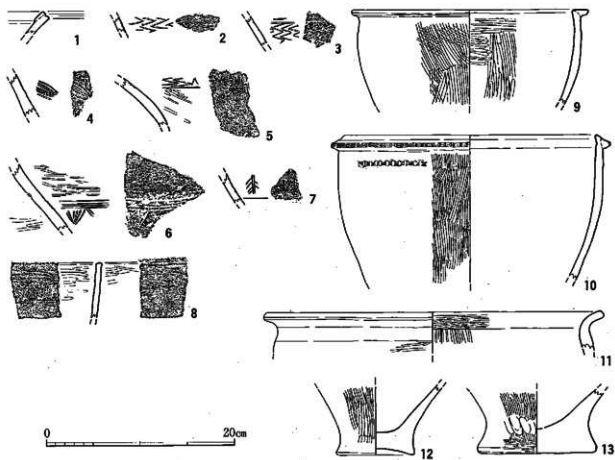
柱穴は、確実に支柱穴と判断しうるものは無かった。住居でない可能性もある。

出土土器 (図版6、第8図)

壺(1~7) 1は大きく広がる口縁となるもので、内面に粘土を貼付して肥厚させ、外端部



第7图 2号住居实测图 (1/60)

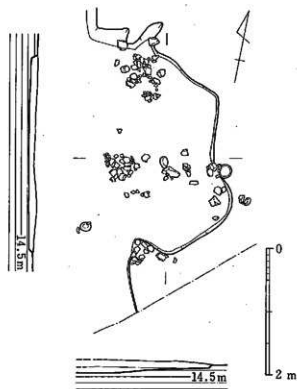


第8图 2号住居出土土器实测图 (1/4)

には沈線を一条施す。3～7は胴部片である。2・3はヘラによる無軸羽状文、4は貝殻による無軸木葉文、5は1条の貝殻沈線の上に貝殻による無軸羽状文および山形文を配置する。文様帯上に朱が認められる。6はわずかな段があり、4条のヘラ描き沈線の下部にヘラによる下向きの複合山形文を描く。7は2軸のヘラ描き羽状文を縦に配置する。

甕(8～13) 8は直口縁となるもので、端部を面取り成形する。口縁部内外面は横ヘラミガキ調整を行う。9は直立する口縁端部外面に短い突帯を水平に貼付するもので、胴部外面は縦ハケ、口縁部および胴部内面はヘラミガキ調整を行う。口径25.0cm。10は直立する口縁端部外面からわずかに下がった位置に断面三角形突帯を貼付するもので、突帯上に刻目を施す。口縁端部と突帯を同時に横ナデしており、境目が不明瞭となる。胴部外面は縦ハケ、口縁部および胴部内面はナデ。口径26.6cm。11は如意形に強く外反するもので、内面ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラミガキ調整を行う。口径36cm。12はやや上げ底で、わずかに端部が開く。内面および底面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径8.2cm。13は端部が広がる厚い底部で、内面はナデ、外面は縦ハケ後にヘラミガキを行う。底部と胴部の境に指圧痕が残る。底径12.5cm。

壺肩部の複雑な文様帯、あまり高くならない甕底部等から、当遺構出土遺物は弥生時代前期末に比定出来る。



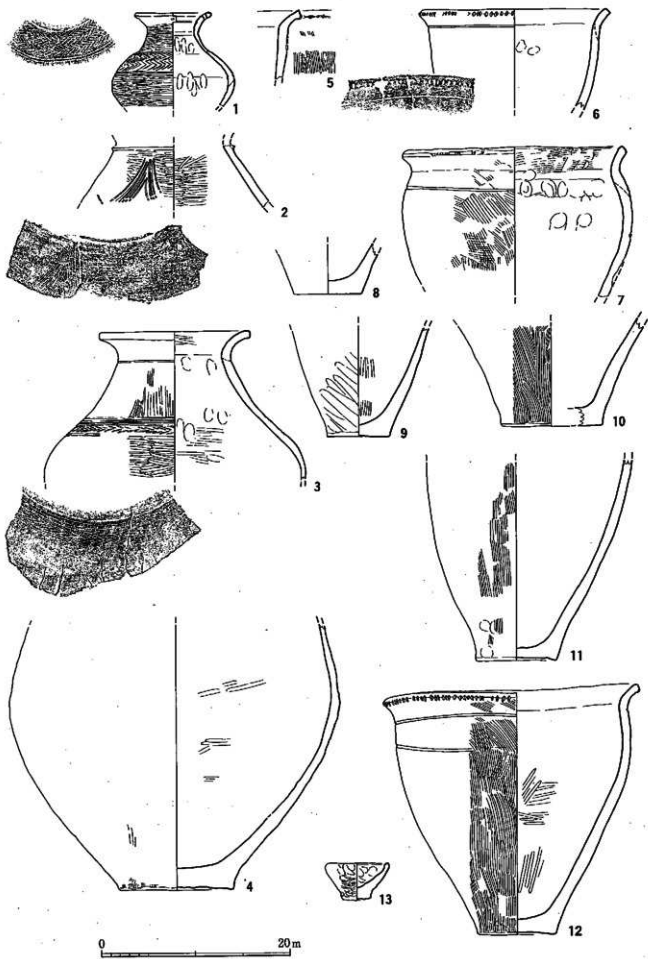
第9図 1号竪穴実測図(1/60)

1号竪穴(図版4、第9図)

調査区東側で検出した。平面プランは不整楕円形で、西側壁は消失している。長軸で3.0mを測る。深さは西側で最も深く20cm、北側は10cm、東側は5cm、南側は5cmを測り、底面は東から西へ向かって若干傾斜する。底面直上からは土器が数カ所にまとまって出土している。いずれも投棄されたものであろう。

出土遺物(図版6、第10図)

壺(1～4) 1はやや扁平な球形胴から内傾する頸部へと続き、口縁部は肥厚せず開く。肩部にヘラによる無軸羽状文の文様帯を配置し、その上部に1条、下部に2条のヘラ描き沈線を巡らす。また頸部と口縁部の境界および口縁部内面にも1条の沈線を巡らし



第10图 1号竖穴出土土器实测图 (1/4)

ている。口縁部の4カ所に円孔を穿孔する。調整にはヘラミガキを行い、内面の接合部には指ナデが残る。口径8.2cm、胴径13.0cm。2は頸部片で、口縁部との境に断面三角形の突帯を貼付する。ヘラによる重弧文を配置する。3は直線的に内傾する頸部から、外反しながら開く口縁部へと続く。頸部と口縁部の境には、形骸化した不明瞭な段を作る。肩部にはヘラによる無軸羽状文を巡らせ、その上部に4条、下部に2条の沈線を巡らす。内外面ともにヘラミガキ調整を行う。口径16cm。4はやや長胴となる大型の壺で、底径12.3cm、胴径35.2cm。

甕 (5~12) 5~7は如意形口縁の甕である。5は口縁部下端に小さな刻目を施す。内面はナデ、外面は縦ハケ。6はやや広がる胴部から、わずかに開く口縁部へと続く。端部下端に刻目を施し、その下に1条の沈線を巡らす。内外面ともにナデ調整を行う。口径20.0cm。7は丸く肩の張った胴部から、短く外反する口縁部へと続く。口縁部下端に小さな刻目を施し、また、口縁部下に1条の沈線を巡らす。口縁部内面は、横ハケ後にナデを行うが、ハケが明瞭に残る。胴部内面はナデ調整で、胴部と口縁部との境目に指圧痕が認められる。口縁部外面はハケ後ナデ、胴部外面は不定方向のハケ調整を行っている。口径23.5cm。8~11は底部片である。いずれも薄い底部から、あまり開かず直線的に胴部へと続く。8は内面ナデ調整で、外面は2次加熱で器表が剝離しており調整不明。底径7.2cm。9は内面ヘラミガキ、外面はヘラナデ調整を行う。底径6.7cm。10は内面ナデ、外面はハケ調整を行い、底径10.6cm。11はわずかに上げ底の底部となる。内面ナデ、外面ハケ調整を行う。底径8.3cm。12は直線的に伸びる胴部から、やや内傾して直立気味に立ち上がる胴部上半へと続き、如意形口縁へとつながる甕である。口縁部下端に刻目をいれ、口縁部下に間隔の離れた2条の太い沈線を巡らす。下方の沈線は施文後にハケ調整を行っており、沈線が一部消失する。内面底部付近は縦ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径27.1cm、底径8.4cm、器高25.7cm。

椀 (13) 13はミニチュア椀で、外面下半は横ヘラミガキ、それ以外は指ナデ調整を行う。口径6.8cm、底径3.1cm、器高3.8cm。

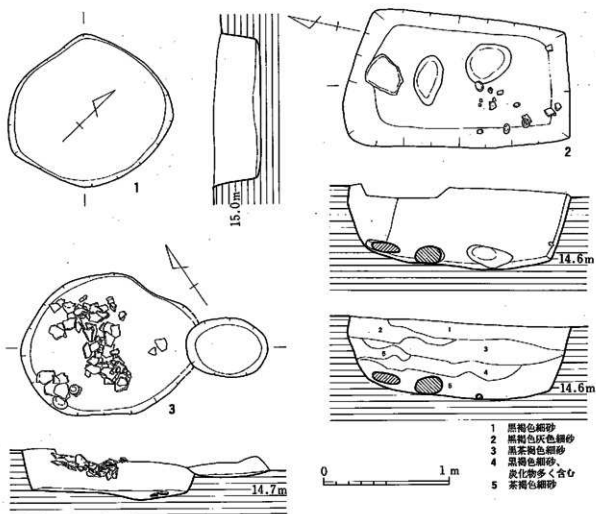
壺の段の形骸化、精巧な無軸羽状文、甕の口縁部下端の刻目、薄い底部等から、当遺構出土遺物は弥生時代前期後半に比定出来る。

1号土坑 (図版5-1、第11図)

調査区東北側で検出した。2号住居と重複しており、1号土坑のほうが新しい。平面プランは円形で、直径1.1mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平で、確認面からの深さは35cmを測る。

出土土器 (第12図)

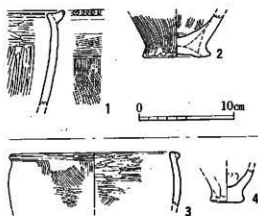
甕 (1・2) 1はやや内湾する直口縁の外端部に接して、断面三角形の大きな刻目突帯を貼付する甕である。内面口縁部付近は横ヘラミガキ、胴部は縦ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部上半は横ハケ、胴部下半は縦ハケ調整を行う。2は裾部が外側に開く底部で、裾部に明瞭な



第11図 1～3土坑実測図 (1/30)

指圧痕が認められる。内面は縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。

1の大きな突帯は中期的だが、口縁部の刻目、2の底部は前期的である。弥生時代前期末に比定出来る。



第12図 1・2号土坑出土土器実測図 (1/4)

2号土坑 (図版5-2、第11図)

調査区東側で検出した。1・2号住居と重複しており、2号住居より新しく、1号住居より古い。平面プランは長方形で、長軸1.7m、短軸1.1mを測る。壁は南側は急角度に、北側はそれよりもやや緩やかな立ち上がりとなる。底面は中央に向かって緩やかに下降している。確認面からの深さは、北側が100cm、中央が120cm、南側が110cmを測る。覆土は黒褐色細砂を中心とした堆積だが、底面から約20cmの所では

炭を多く含んだ層が水平に堆積している。底面直上からは、扁平な礫3個が据え置かれた状態で検出された。

出土土器 (図版7、第12図)

甕(3・4) 3はやや内湾する口縁部の外端部に接して、低い突帯を貼付するものである。内面は横ヘラミガキ、外面突帯付近は横ナデ、胴部上半は縦ハケ、胴部下半は横ヘラミガキ調整を行う。口径18.0cm。4はミニチュアの甕か。内外面指ナデ調整を行う。

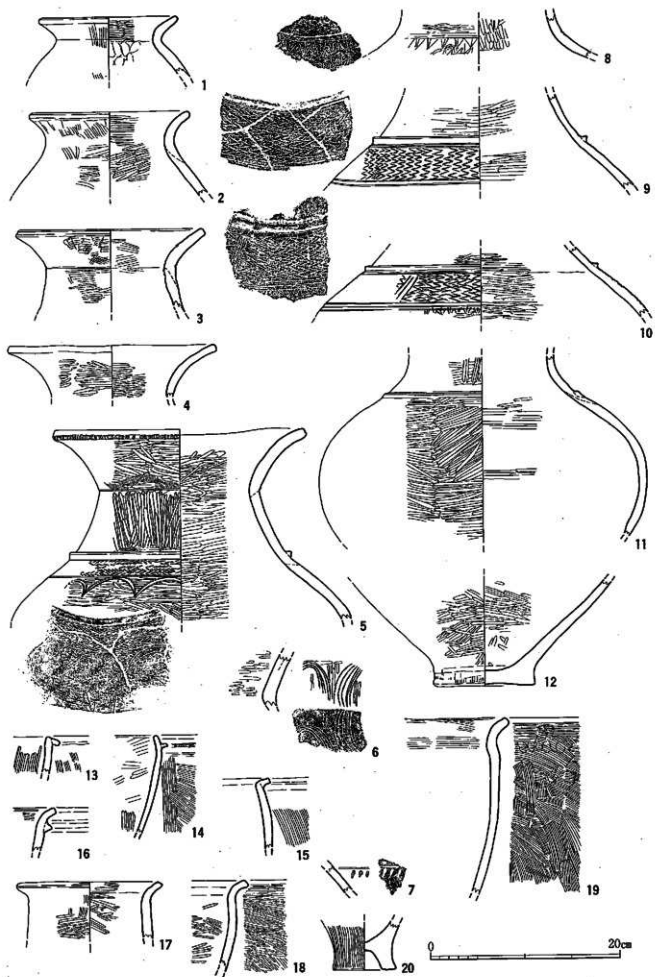
当遺構出土遺物は弥生時代前期末～中期初頭に比定出来る。

3号土坑 (図版5-3、第11図)

調査区東側で検出した。平面プランは不整楕円形で、長軸1.5m、短軸1.2mを測る。壁は急角度での立ち上がりとなる。底面は東側に向かって若干傾斜しており、遺構確認面からの深さは西側で65cm、中央で60cm、東側で50cmを測る。遺構確認面から深さ約20cmの所まで、土器がまともて出土したが、出土状態から見て、土坑が埋没する過程で一括投棄したものである。

出土土器 (図版7、第13図)

壺(1～12) 1は内傾する肩部から、内面に稜を持たずに屈曲して、短く開く口縁部へと至るもので、端部は丸くおさめる。口縁部内面は横ヘラミガキ、屈曲部は指ナデ、外面は部分的にハケが認められるが、風化が著しく調整不明。口径14.6cm。2は内傾する長い肩部から、強く外反してやや長く伸びる口縁部へと至るもので、端部は丸くおさめる。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面はハケ後横ナデ、肩部外面は横ヘラミガキ調整を行う。3は内傾して長く伸びる頸部から、外反して大きく開く口縁部へと至るもので、端部は面取り成形を行う。頸口縁境には1条のヘラ描き沈線を巡らす。調整は、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は横ハケ、頸部内面は器表が剝離しており不明、外面は横ヘラミガキを行う。口径19.4cm。4は外反しながら大きく開く口縁で、内外面横ヘラミガキ調整を行う。口径21.6cm。5は内傾する胴部から、緩やかに頸部へと移行し、外反して大きく広がる口縁部へと至るもので、頸口縁境には不明瞭な段をもつ。口縁部下端に刻目を施し、肩頸境外面に断面三角形の突帯を貼付する。肩部にはヘラ描き無軸羽状文・横沈線・重弧文から成る文様帯を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ後にヘラミガキ調整を行う。口径26.0cm。6は外反する頸部外面に貝殻沈線による文様を描くもので、重弧文か。7は肩部に横沈線・列点文を巡らすもの。列点はヘラ状工具の先端で刻目状に施す。8は肩部に貝殻による平行沈線・山形文から成る文様帯を巡らす。9は肩頸境外面に断面三角形突帯を貼付し、その下にヘラ描き平行横沈線・貝殻描き無軸羽状文から成る文様帯を巡らす。10は肩頸境外面に断面三角形突帯を貼付し、その下にヘラ描き平行横沈線・貝殻描き無軸羽状文・山形文から成る文様帯を巡らせ、平行縦沈線で仕切る。11は球形に近い胴部をもつもので、肩頸境外面に断面三角形の低い突帯を貼付する。内外面横ヘラミガキ調整を行う。12は平坦な底部から、大きく開く胴部へと緩やかに移行するもので、内外面横ヘラミガキ調整を行う。底部にはヘラミガキ前の縦ハケが



第13图 3号土坑出土土器实测图 (1/4)

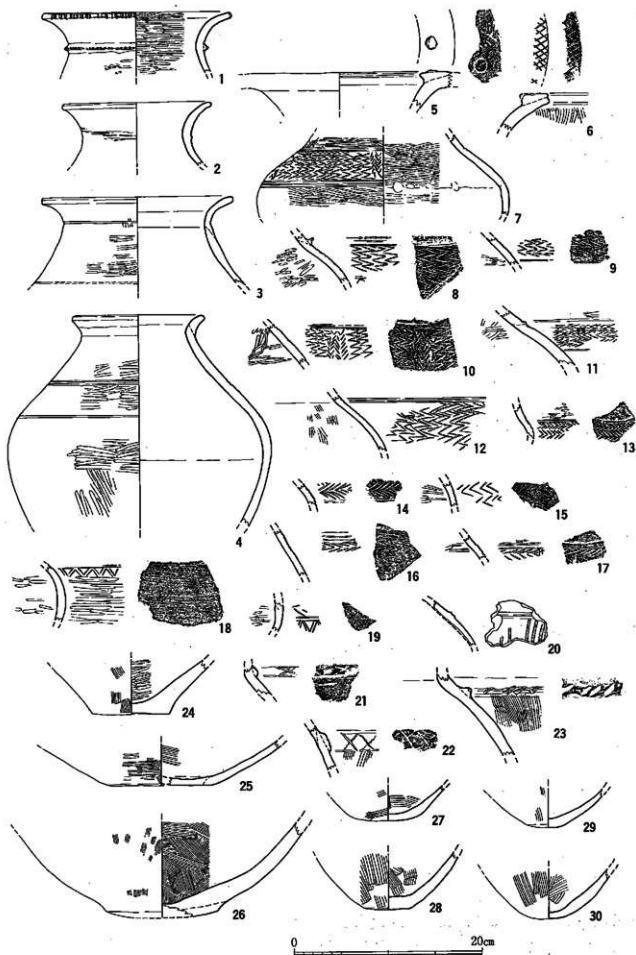
残る。底径10.6cm。

甕 (13~20) 13は直立する口縁部外端部に、形の崩れた断面三角形突帯を貼付するもので、口縁部は横ナデ、胴部内面は縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。14は内湾気味に立ち上がる直口縁の口縁端部からやや下がった位置に、断面三角形に近い細い刻目突帯を貼付するもので、内面口縁部付近は横ヘラミガキ、胴部は縦ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ヘラミガキ調整を行う。15はやや内傾する口縁部の端部外面に接して、断面「コ」字形に近い細い突帯を貼付するもので、内面は磨滅しており調整不明、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。16は緩く外反する口縁で、端部からやや下がった位置に断面三角突帯を貼付する。口縁部内面は横ハケ調整を行う。17は直立する胴部から、緩く外反する口縁部へと続くもので、内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ後横ヘラミガキ調整を行う。18は直立する胴部上半から、やや強く外反する口縁部へと続くもので、端部下端をわずかにつまみ出す。口縁部内面は横ナデ、胴部内面は粗い横ヘラミガキ、外面は横・斜ハケ後横ヘラミガキ調整を行う。19は直立する胴部上半から、短く外反する口縁部へと続くもので、胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ハケ、胴部外面は縦・斜ハケ調整を行う。口縁部外面に、外反させた際の指痕が明瞭に残る。20は底部を高台状に高くするもので、裾部はわずかに広がる。底径6.6cm。

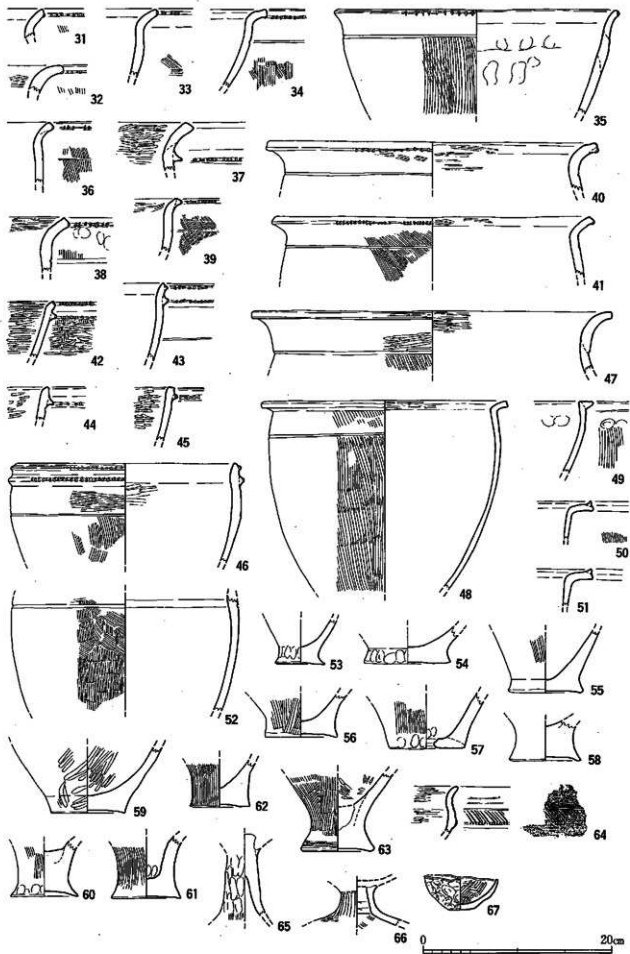
当遺構出土遺物は弥生時代前期末に比定出来る。

包含層出土土器 (図版7・8、第14・15図)

壺 (1~30) 1は口縁部が大きく開き、端部に刻目を施す。頸口縁境に刻目突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、頸部外面横ヘラミガキ調整を行う。口径19.4cm。2は口縁部が大きく開くもので、頸部外面に工具痕が残る。風化が著しく調整不明。口径15.4cm。3は内傾する頸部から、やや大きく開く口縁部へと続くもので、口縁頸境および頸胴境に1条の沈線を巡らす。頸部外面に横ヘラミガキ調整が認められるが、それ以外は器表が剝離しており調整不明。口径20.0cm。4は球形に近い胴部から、直線的に内傾する頸部へとなだらかに移行し、短く外反する口縁部へと至る。肩胴境に1条、肩頸境に2条の沈線を巡らす。口径13.8cm。5は鋤先形口縁の上面に円形浮文を貼付する。内法口径17.0cm。6は口縁部内面に粘土を貼付して肥厚させ、その上面にヘラ描き斜格子文を施す。7~19は肩部に文様帯をもつものである。7は平行横沈線の間にヘラ描き無軸羽状文を配置し、縦方向の羽状文で仕切る。内外面横ヘラミガキ調整を行う。8は肩頸境に断面三角形の刻目突帯を貼付し、その下方に貝殻描き無軸羽状文を巡らせ、その下に2条沈線・山形文を配置する。刻目は小さくまばらである。9~17はヘラ描き平行横沈線・ヘラ描き無軸羽状文で文様帯を構成する。18は2条沈線の下方に複線山形文を巡らす。19は2条沈線の上に貝殻描き無軸羽状文、下方に複線山形文を配置するもので、18と同一固体か。20は断面「M」字形に近い突帯の下方に、朱彩文を施す。21・22は断面台形の突帯上に、「X」字形の文様を刻むもの。23は肩部に貼付された断面三角形の突帯上にハケ状工具による斜刻目を施



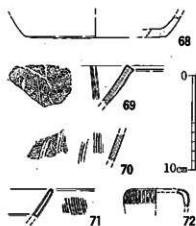
第14图 A地区包含层出土土器实测图① (1/4)



第15图 A地区包含层出土土器实测图② (1/4)

す。24は薄く平坦な底部から、ほとんど湾曲せず直線的に胴部へと続く。底径8.2cm。25は平坦な薄い底部から、大きく開く胴部へと稜を持たずに続くもので、底径10.6cm。26は凸レンズ状の不安定な底部から、大きく開く胴部へとつながるもので、内外面ハケ調整を行う。底径12.0cm。27は丸くやや不安定な底部、28~30は尖底気味の不安定な底部で、いずれも内外面ハケ調整を行う。

甕 (31~63) 31~33は下端に刻目を施す如意形口縁のもの。34~36は下端に刻目を施し、口縁部下に1条の沈線を巡らすもので、35は口径30.4cm。37は端部が磨滅しており刻目の有無は不明。口縁部下端をつまみ出し、屈曲部に断面三角形の刻目突帯を貼付する。38~41は口縁部下端をつまみ出し、その部分に刻目を施すもので、口縁部下に1条の沈線を巡らす。40は口径35.0cm、41は口径34.0cm。42・43は直立気味に立ち上がる口縁部の端部外側に刻目を施し、また端部のやや下方に刻目突帯を貼付するもの。43は胴部上半に1条の沈線を巡らす。44・45は直口縁の口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付するもの。46は直口縁の口縁端部からやや下がった位置に2条の刻目突帯を貼付するもので、さらに胴部上半に1条の沈線を巡らす。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部上半外面は横ハケ、胴部下半は縦ハケ調整を行う。口径24.4cm。47は強く外反する如意形口縁のもので、外面に段をもつ。口縁部内外面横ヘラミガキ、胴部外面縦ヘラミガキ調整を行う。口径38.0cm。48はわずかに内傾する胴部上半から、内面に稜をもって屈曲し、短く開く口縁部へと続くもので、胴部上半に1条の沈線を巡らす。口径26.0cm。49は口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼付するもの。50・51は水平近く開く口縁部の端部を跳ね上げるもの。52は胴部上半が直立するもので、上半に1条の沈線を巡らす。53は裾が大きく開く小型の底部で、強くすぼまり胴部へと続く。54はやや裾が開く底部から、大きく開く胴部へと至る。55はやや裾が開くもので、直線的に伸びる胴部へと続く。56はやや裾が開き、上げ底となる。57は平坦で薄い底部から、直線的に胴部へと続く。58は裾が開き、やや上げ底となる厚い底部。59はわずかに上げ底となる底部で、裾は開かず緩やかに胴部下半へと移行する。内外面ヘラミガキ調整を行う。60・61はやや裾が開く高い底部。62は裾の開かない柱状の高い底部。63は裾が大きく開く高い底部。内面ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。底部内面は粘土充填部分が剝離している。



第16図 A地区包含層出土土器・磁器実測図
(1~3:1/4, 4・5:1/3)

鉢 (64) 体部が逆「く」字形に屈曲し、口縁部は外反する。屈曲部に小さな刻目を施し、その上に横沈線・平行斜線を巡らす。内外面横ヘラミガキ調整を行う。縄文的要素の強いものである。

高坏 (65・66) 65は長く伸びる脚柱部で、外面には指痕が明瞭に残る。66は短い脚柱部から大きく開く裾部へと続くもので、柱部内面ヘラケズリ、外面ヘラミガキ調整を行う。

碗 (67) 手づくね風の小型の碗である。内面ヘラミガキ、外面指オサエ調整を行う。

土師質土鍋 (68) 平坦な底部から、やや内湾しながら立ち上がる体部へと続く。器表が風化しており調整不明。底径15.0cm。

瓦質すり鉢 (69・70) 69は直口縁のもので、端部を平坦にする。内外面ナデ調整を行う。70は内面ナデ、外面ヘラケズリ調整を行う。

青磁碗 (71) 71は阿安窯系青磁碗で、内面に1条の沈線を巡らせ、外面には櫛目を施す。

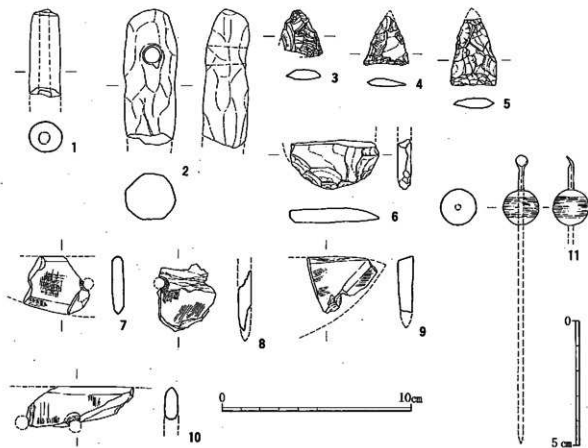
青白磁合子 (72) 72は青白磁の合子蓋で、口径5.0cm程度になると思われる。

A地区出土土製品・石製品 (図版8、第17図)

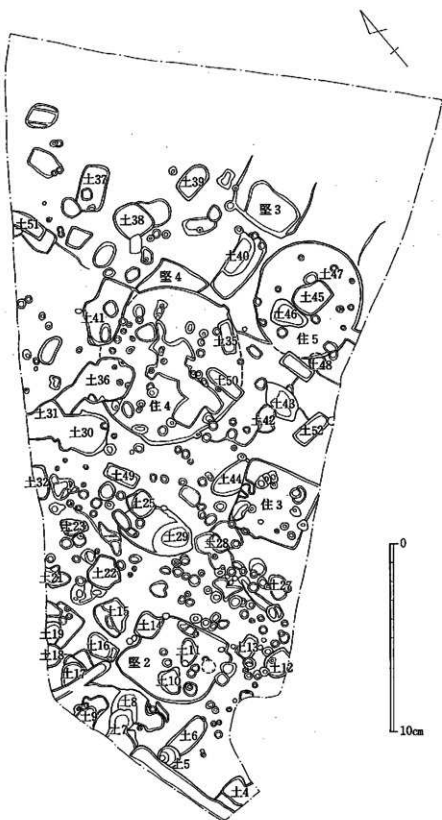
土錘 (1・2) 1は筒状の土錘で、1/3程度欠失する。成形には丁寧なナデ調整を行う。包含層出土。2は棒状の土錘で、1/3程度欠失する。成形には指ナデを行う。円孔は片側から穿孔しており、孔径0.6~0.7cm。包含層出土。

石鏃 (3~5) 3は姫島産黒曜石製で、粗い剝離調整しか行っていない。製作途中で欠損したのか。2号土坑出土。4はサヌカイト製で、粗い剝離調整を行う。包含層出土。5はサヌカイト製で、先端を欠損するが、比較的大型に属するものである。2号住居出土。

打製石斧 (6) 片岩質の打製石斧で、基部を欠損する。刃部が若干磨滅しており、また全体



第17図 A地区出土土製品・石器・金属製品実測図 (1-5・11:2/3、6-10:1/2)



第18图 B地区遗物配置图 (1/200)

的に風化が進む。包含層出土。

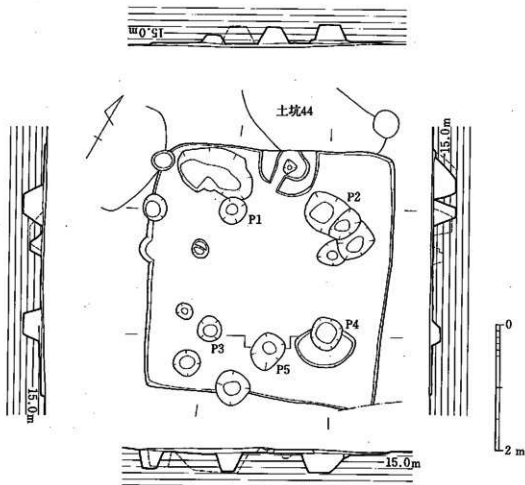
磨製石包丁（7～10）7は粘板岩製で、大半を欠失する。刃部は片刃でありあまり鋭くなく、背部は丸い。1号住居出土。8は片岩質のもので、大半を欠失する。ピット出土。9は凝灰岩製のもので、大半を欠失する。包含層出土。10は頁岩質のもので、大半を欠失する。背部は丸く研磨される。包含層出土。

簪（11）11は鋼製の軸部に木製の玉飾りを付けたもので、軸部の大半を欠失する。軸部は板状の鋼板を丸めて棒状にする。軸基部は扁平に延ばし、わずかに内湾させており、耳カキとして使用出来るようにしている。玉飾りの表面は、本来何らかの装飾を施していた可能性もあるが、

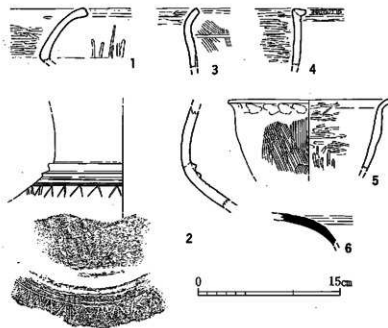
2 B地区の遺構と遺物

表面の塗料が完全に剥落しており、不明である。包含層上面出土。

下唐原宮園遺跡の東側に位置する。橋脚架設に伴う県道拡幅部および村道接続部を調査対象地とした。調査面積は約650㎡。標高は全体的に15.0m前後とほぼ水平だが、東端部は河川の氾濫により削平を受ける。



第19図 3号住居実測図 (1/60)



第20図 3号住居出土土器実測図 (1/4)

3号住居 (図版11-1、第19図)

調査区中央南側で検出した。当遺跡で唯一古墳時代の遺構である。44号土坑と重複するが、当住居の方が新しい。平面プランは隅丸方形で、壁長は西壁で3.9m、北壁で3.7mを測る。北壁のほぼ中央にカマドを付設する。壁はやや緩やかな立ち上がりとなる。確認面から床面までの深さは、最深部でも10cmにすぎない。床面はほぼ水平で、床面硬化、貼床等は確認出来なかった。

主柱穴はP1～P4を検出している。いずれも床面からの深さは約20cmである。これら以外にこの堅穴住居に付属する柱穴としてP5がある。

カマドは造り付け型のカマドで、カマド内の壁から約30cmの位置に支脚抜き取り穴を検出した。また、カマド左脇に貯蔵施設と思われる土坑を1基検出した。長軸1.3m、短軸0.7mの不整楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ水平で、床面からの深さは30cmを測る。

出土土器 (図版22、第20図)

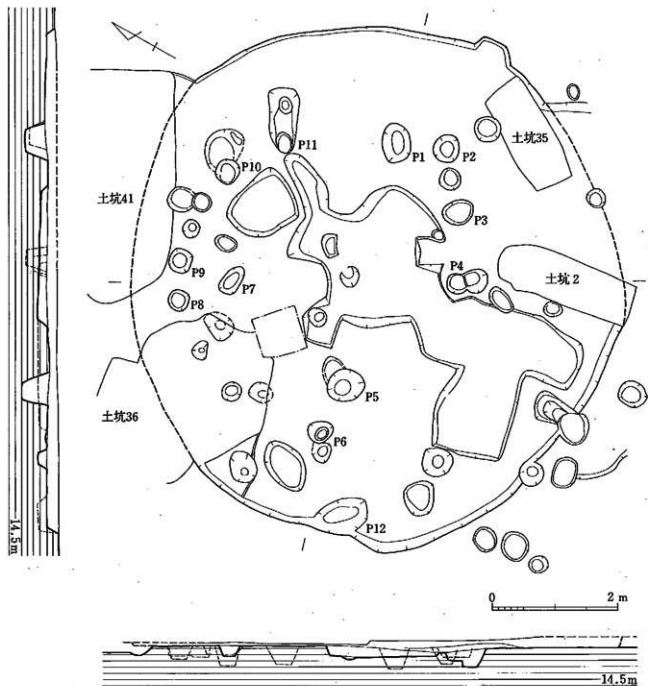
壺 (1・2) 1は外反しながら大きく外側に開く素口縁の壺の口縁部である。外面にヘラによる暗文がかすかに認められる。2は頸部がやや開き気味に長くのびる壺で、屈曲部に断面三角突帯を2条巡らす。肩部は3条の沈線の下部に山形文を配置する。

甕 (3・4) 3は如意形口縁の甕で、口縁部下に1条の沈線を巡らす。外面はハケ、内面は横ヘラミガキ調整を行う。4は直立する口縁部端外側に「コ」字形突帯を貼付するもので、刻目をいれる。口縁部直下に1条の沈線を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面は2次加熱を受けて器表が剥離する。

鉢 (5) 5は如意形口縁の鉢で、内面下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ。口径17.0cm。

遺構は調査区東端を除いては、高密度で分布する。山国川の氾濫により堆積した黄褐色微砂に遺構が埋り込まれているため、遺構覆土と地山との境が不明瞭で、確認作業は非常に困難な状況にあった。従って重複する遺構の新旧関係を完全に把握し得なかった遺構もある。

検出した主な遺構は、堅穴住居・堅穴・土坑・ピット等である。

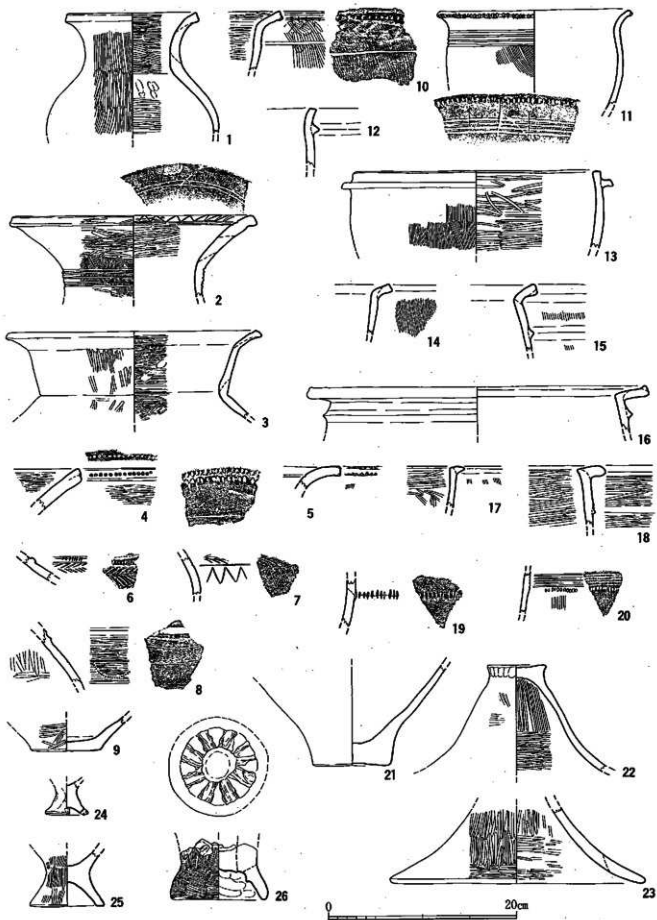


第21図 4号住居実測図 (1/60)

須恵器環(6) 6は須恵器の坏蓋である。天井部外面はヘラケズリ、口縁部および内面はナデ。

1～5は明らかに混入したものである。当住居の時期を示すものは6のみであり、住居形態からしても6世紀後半を前後する時期であろう。

4号住居 (図版11-2・3、第21図)



第22图 4号住居出土土器实测图 (1/4)

調査区中央東寄りで検出した。4号竪穴、35・36・41・50号土坑と重複し、これらの中では最も新しい。北側および東側壁の一部が削平されているが、平面プランは直径7.8~8.4mの不整形円形になる。壁はやや緩やかな立ち上がりとなる。確認面から床面までの深さは最深部でも10cmにすぎない。貼床、床面硬化は確認していない。

主柱穴はP1・P3・P5・P7・P10・P11を検出した。床面からの深さは20cm~30cmを測る。計8本の主柱穴を想定して精査を行ったが、上記以外の主柱穴は確認出来なかった。また、P2・P4・P6・P8・P9・P12は補助柱穴の可能性を指摘しておく。

中央から南側にかけて不整形の土坑を検出した。炉を想定して精査したが、その性格を断定するまでには至らなかった。床面からの深さは北側で20cm、南側で10cmを測る。

出土土器（図版22、第22図）

壺（1~9） 1はあまり張らない肩部から短く直立する頸部へと続き、やや長く外反する口縁部へと至る。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、頸部以下は縦ヘラミガキ調整を行う。屈曲部内面に指痕が残る。口径13.6cm。2は直立する頸部から大きく広がる口縁部へと続くもので、口縁部内面に2条の貝殻描き沈線・山形文から成る文様帯を巡らせ、また頸部に5条のヘラ描き沈線を巡らす。内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ後横ヘラミガキ調整を行う。口径25.0cm。3は内傾する肩部から屈曲して外傾する頸部へと続き、さらに開く口縁部へと至るものである。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、頸部外面は縦ヘラミガキ調整を行う。口径26.0cm。4は大きく開く口縁の端部に竹管文を巡らせるもので、内外面ヘラミガキ調整を行う。5は外反して水平に近く伸びる口縁部上下端に刻目を施し、また内面にヘラ描き沈線を巡らすものである。6は肩頸境に刻目突帯を巡らせ、その下に無軸羽状文を配置するもので、突帯は貼り付けたものか、引き出したものかは判断できなかった。7は1条の沈線の上部に貝殻描き無軸羽状文、下部に山形文を配置したもので、羽状文の沈線内部にわずかに朱が認められる。8は肩頸境に不明瞭な2条突帯を巡らせ、その下方にヘラ描き沈線・貝殻側刺突による円弧文を配置する。9は薄く平坦な底部から、稜をもたずなだらかに胴部へと移行するもので、内面は器表が剝離しており調整不明、外面は横ヘラミガキ調整を行う。底径7.4cm。

甕（10~21） 10は強く外反する如意形口縁のもので、口縁部下端に刻目、その下に1条の太い沈線を巡らす。内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。11はやや肩の張った胴部から、内傾気味に立ち上がる胴部上半へと続き、緩やかに湾曲して口縁部へ至るもので、口縁部下端に刻目、口縁部下に4条の沈線を巡らす。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径19.8cm。12は直立する口縁部の端部からやや下がった位置に断面三角形突帯を貼付するもので、かなり器表の風化が進んでおり、調整不明。13はやや内傾する直口縁の甕で、口縁部端部からやや下がった位置に断面「コ」字形に近い突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径26.0cm。14は短く緩く屈曲する口縁で、胴部内面および口縁部内外面横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。15は内傾する胴部上

半から、内面に不明瞭な稜を持って屈曲し、口縁部は短く大きく開くもので、胴部上半に断面三角形の突帯を貼付する。16は内傾する胴部上反から強く屈曲して水平近く開く口縁部へと続くもので、上端に粘土を貼付して跳ね上げ口縁となす。屈曲部より少し下がった位置に断面三角形の突帯を貼付する。内外面横ナデ調整を行う。17は直立する口縁部外端に断面三角形の小さな突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。18はわずかに内傾する口縁端部外面に丸く大きな突帯を貼付し、また口縁端部よりやや下がった位置に断面三角形の小さな突帯を貼付する。口縁部内外面横ヘラミガキ調整を行う。19は胴部外面上半をわずかに段状にし、縦長の刻目を巡らす。20は胴部外面上半に5条の沈線を巡らせ、その下に列点文を1列巡らすもの。21はわずかに上げ底となるやや厚い底部から直線的に立ち上がり、緩やかに外反して直線的に開く胴部へと続くもので、全体的に器表が剥離しており、調整不明。底径8.1cm。

蓋 (22・23) 22は天井部の薄いつまみ部から、直線的に広がり、下方でさらに大きく開くもので、器高が高い。内面上半は縦ヘラミガキ、下半は横ヘラミガキ、外面はかなり風化が進むが、一部に横ヘラミガキが認められる。つまみ部外面には指痕が明瞭に残る。つまみ部径6.4cm。23は裾が大きく開き、器高の高いもので、内面上半は縦ヘラミガキ、下半は横ヘラミガキ、外面裾部付近は横ヘラミガキ、裾部上方は縦ヘラミガキ調整を行う。裾部径27.0cm。

台付鉢 (24~26) 24は小型の高坏または台付鉢の脚部となろう。裾部に円孔を穿孔するが、裾部はほとんど欠失するため何カ所に配置するのかわかり不明。裾径4.5cm。25は台付鉢または甕の脚部。直線的に大きく開き、長く伸びる。接地面は平坦に仕上げる。内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。裾径7.8cm。26は他に類例を知らないが、一応台付鉢の脚部としておく。やや開く短かい裾部から直立する底部へと続き、底部上方には8方向の長方形透かし孔らしき痕跡が認められる。裾部内面は指横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ調整を行う。裾径9.6cm。

遺物には西部瀬戸内の色彩が濃いものが少ない。4・5・11・19・20・25等はその好例であろう。出土遺物にはやや時期差があるが、遺構の時期は弥生時代前期末~中期初頭であろう。

5号住居 (図版12、第23図)

調査区東寄りで検出した。46~48号土坑と重複しており、これらの中では最も新しい。西側壁の一部を削平されるが、平面プランは直径6.0mの円形となる。壁はやや緩やかな角度で立ち上がる。床面は北側が南側よりも若干低くなっている。確認面から床面までの深さは、北側で15cm、東側で20cm、南側で20cm、西側で10cmを測る。貼床、床面硬化は確認していない。

支柱穴はP1~P6の計6本を検出しているが、規則的な配置にならない。床面からの深さは15cm~30cmとややばらつきがある。P7~P11は補助柱穴を想定している。

なお住居床面中央で土坑を1基検出した。当住居に伴う施設と考えると精査したが、この土坑の性格を断定するまでには至らなかったため、別個の遺構として扱う。

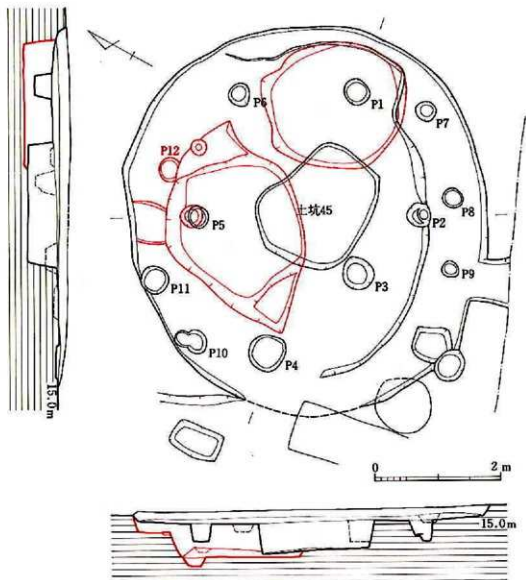
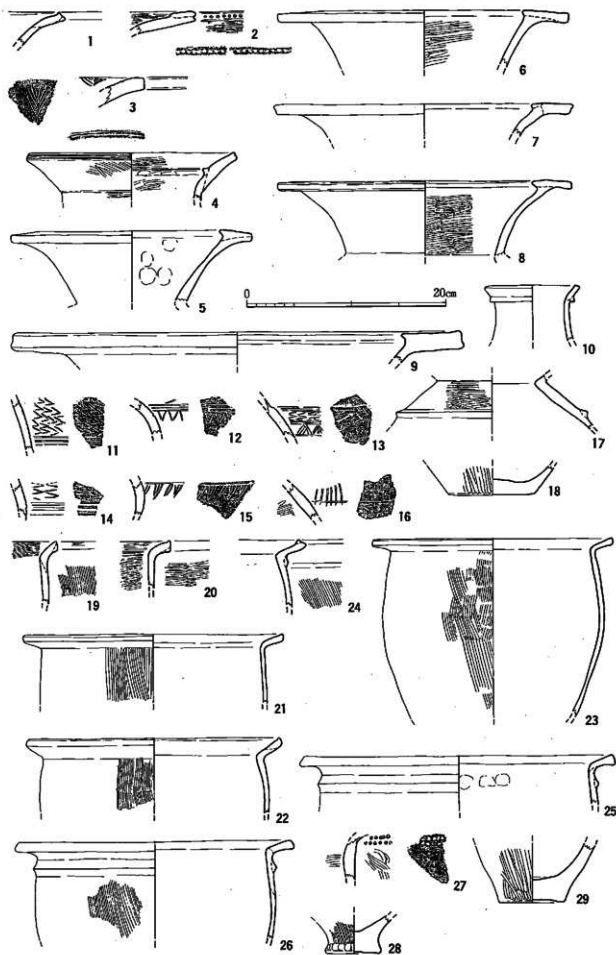


圖23 5号住居実測図 (1/60)

出土土器 (図版22、第24図)

壺(1~18) 1は大きく開き、端部上端を跳ね上げ状に仕上げる。2は大きく水平に近く開き、内面に粘土帯を薄く貼り付けて肥厚させる。端部に竹管文を巡らす。3は口縁部内面に貝殻による山形文を巡らす。4は直線的に大きく開く口縁部で、口縁部と頸部の境に不明瞭な段を作る。内面に断面三角形の突帯を貼付し、口縁端部に2条沈線を巡らす。内外面横へラミガキ調整を行う。口径22.6cm。5~9は鋤先形口縁のものである。5は大きく開く口縁の端部上面に粘土帯を貼付したもので、内面をややつまみ出し、また外傾する。口径18.8cm。内外面ナデ調整を行う。6は鋤部が長く、やや外傾する。内面横へラミガキ、外面横ナデ。口径21.0cm。7は内面をややつまみ出し、鋤部が長く水平に伸びる。内外面ナデ調整を行う。口径22.6cm。8の鋤部は内外に短く水平に伸びる。頸部内面は横へラミガキ、それ以外は横ナデ調整を行う。口径22.6cm。9は



第24图 5号住层出土土器实图(1/4)

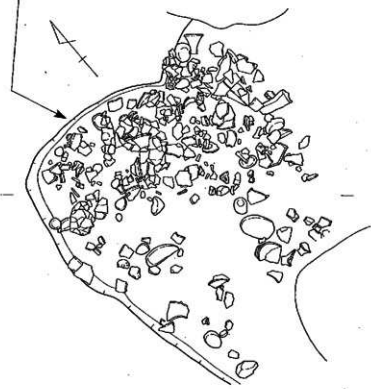
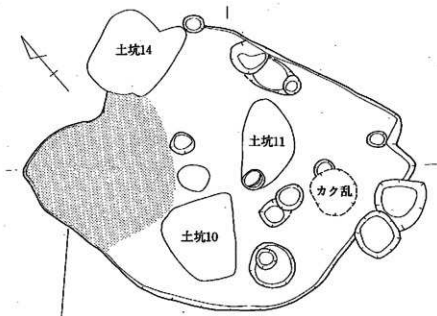
非常に厚く、水平に長く伸びる鋳部で、内面をわずかにつまみ出す。10は口縁部がやや外反する直口縁のもので、口縁端部からやや下がったところに断面三角形の突帯を貼付する。11~17は壺の胴部片である。11は3条の沈線の上部に、貝殻による雑な無軸羽状文を配置する。12は3条の沈線の下部にヘラ描き山形文を巡らす。沈線上部の文様は不明。13はヘラによる沈線と、貝殻による無軸羽状文・複線山形文で文様帯を構成する。14は3条の沈線の上部に貝殻による無軸羽状文を配置する。15は沈線下に湾曲した山形文を下向きに配置する。16は1条の沈線の上に並行縦沈線を数条いれるが、どのような文様となるのかは不明。17は肩部に断面三角形の突帯を貼付するもので、肩頸境の内面には稜を持つ。18は壺の底部で、平坦な底部から直線的に胴部へと続く。内面ナデ、外面縦ヘラミガキ調整を行う。底径9.2cm。

壺(19~29) 19は緩く外反する如意形口縁で、端部を面取り成形する。調整は、胴部内面はナデ、口縁部内面および端部外面は横ハケ、端部外面以下は横ナデ、胴部外面は縦ハケを行う。20は強く外反する如意形口縁で、口縁部外面は横ナデ、それ以外は横ヘラミガキ調整を行う。21は直立する胴部から、強く湾曲して直線的に伸びる口縁部へと至る。器内が非常に薄く、胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径27.6cm。22はやや内湾する胴部から、内面に稜をもって屈曲し、直線的に開く口縁部へと至る。口縁端部はわずかに跳ね上げ気味となる。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径27.2cm。23はやや内湾する胴部上半から、内面に弱い稜をもって屈曲し、直線的に開く口縁部へと続くものである。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。24は内湾する胴部から、内面に稜をもって屈曲し、外へ伸びるもので、端部は明瞭な跳ね上げ口縁となる。また屈曲部外面に断面三角形突帯を貼付する。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ。25は口縁端部を強くナデしており、上下にわずかに広がる。屈曲部下に低い突帯を貼付する。口径32.4cm。26はわずかに内湾する胴部から、屈曲して大きく広がる口縁部へと続く。内面に弱い稜をもつ。屈曲部より少し下方に低い突帯を貼付する。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径28.6cm。27は口縁部が欠失しているが、口縁部下に竹管文を2条巡らす。内外面ヘラミガキ調整を行う。28は裾部が広がる底部で、裾部に指痕が明瞭に残る。底径5.8cm。29はわずかに上げ底の底部から、直線的に胴部へとつながるもので、内面はナデ、外面は縦ヘラミガキ調整を行う。

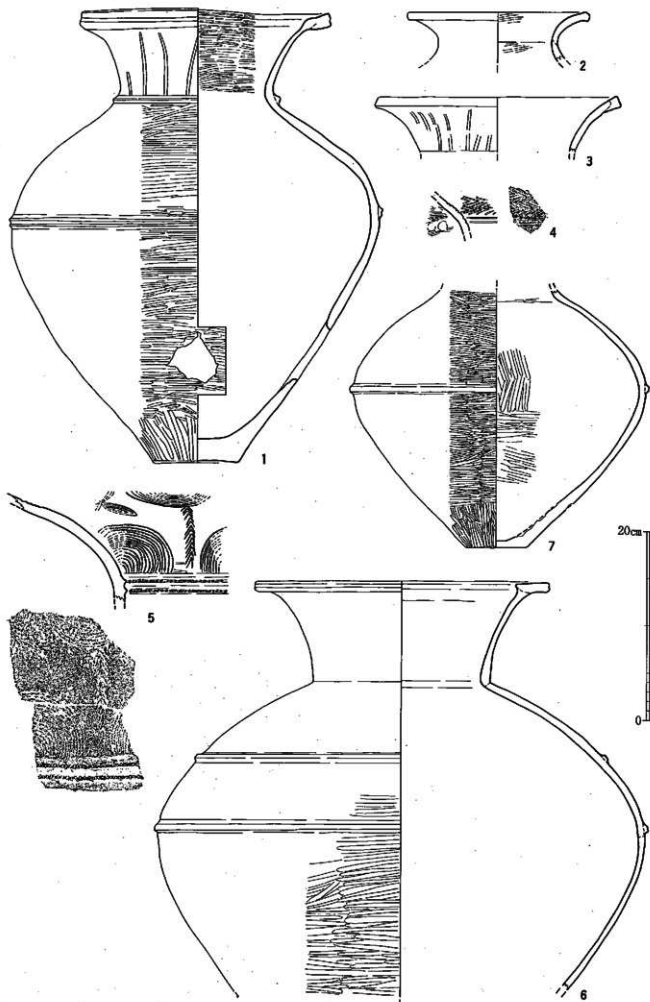
当住居はやや時期差のある遺物が出土している。文様帯を持つ壺などは弥生時代前期末前後のものであるし、また明瞭な跳ね上げ口縁の24等は弥生時代中期後半~末にかけてのもので、これらは共伴するものではなく、明らかに混入したものである。従って、量的に豊富な弥生時代中期中葉を当住居の時期と考えている。

2号竪穴(図版13-1・2、第25図)

調査区西寄りで検出した。10・11・14号土坑と重複しており、10・14号土坑より古く、11号土



第25図 2号壑穴実測図 (1/60・1/30)



第26图 2号竖穴出土土器实测图①(1/4)

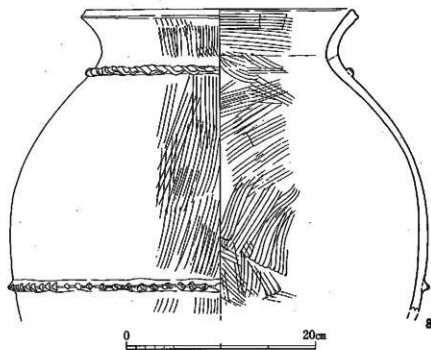
坑より古い。平面プランは長軸6.2m、短軸4.5mの不整楕円形である。壁は緩やかな立ち上がりとなる。底面は中央付近がやや高く、周辺に向かって緩やかに下降する。確認面から底面までの深さは、北側で7cm、東側で12cm、南側で8cm、西側で5cmを測る。

底面からはいくつかのピットを検出しているが、当竪穴に伴うものかは判断出来なかった。床面からのピットの深さは5~30cmを測る。

当竪穴の西隅からは、底面から約10cm程浮いた状態で多量の土器が出土している。すべてが破碎した状態であり、当竪穴埋没中に投棄されたものであろう。

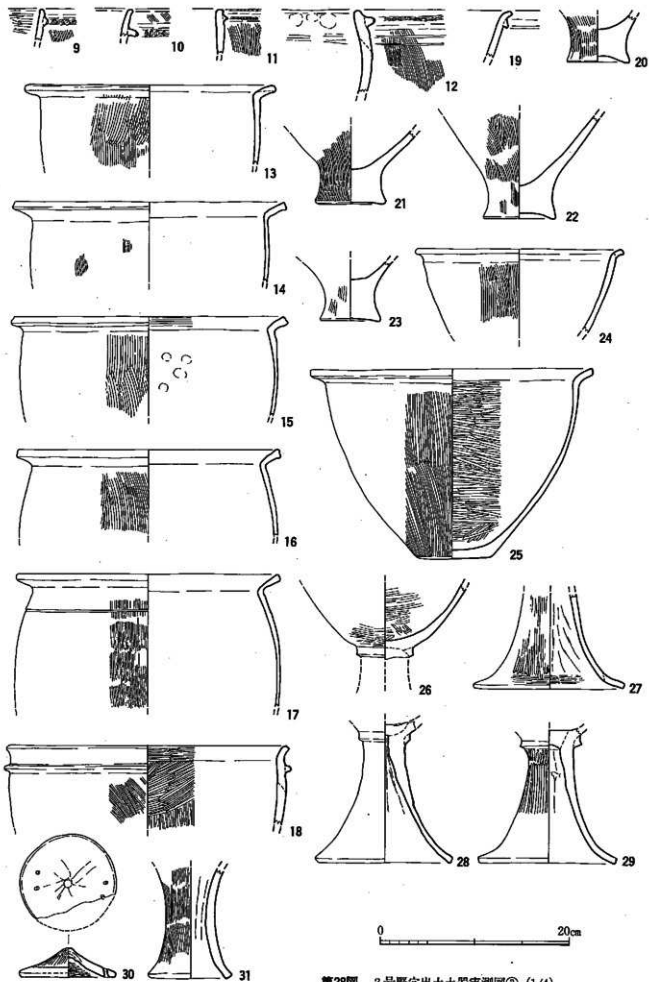
出土土器 (図は22・23、第26~28図)

壺(1~8) 1は最大径が胴部中位よりやや上にあり、頸部が外反するもので、口縁部内面に粘土を貼付して肥厚させる。肥厚部は短く、内傾する。底部はくびれずに胴部下半へと移行する。胴部最大径にあたる位置に断面「M」字形に近い突帯を、また肩頸境に断面三角形突帯を貼付する。頸部外面には縦方向の暗文をまばらに施す。胴部下半の穿孔は焼成後のものである。胴部内面はナデ、頸部内面は横ヘラミガキ、口縁部は横ナデ、頸部外面はナデ、胴部外面は横ヘラミガキ、底部外面は縦ヘラミガキ調整を行う。口径26.4cm、底径8.8cm、器高48cm。2は内傾する頸部から、大きく外反する口縁部へと至る。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、外面は器表が斜離しており調整不明。口径18.6cm。3は大きく外反する素口縁のもので、外面には縦暗文を施す。口径25.0cm。4は肩部に文様帯をもつもので、2条のヘラ描き沈線の上に貝殻描き無軸羽状文を配置する。5は胴部最大径に当たる位置に断面三角形の刻目突帯を2条貼付し、その上方に、貝殻描き重弧文・無軸羽状文・木葉文からなる文様帯を展開させるものである。6は最大径が胴部



中位よりやや上にあり、強く縮まった頸部から、鋤先形口縁へと至る。口縁部はあまり長く伸びず、ほぼ水平に取り付けられる。胴部最大径に当たる位置および肩部に、断面台形に近い突帯を貼付する。内面はナデ、口縁部は横ナデ、胴部下半は横ヘラミガキ調整を行う。頸部外面から肩部にかけては風化が著しく調整不明。内法口径23.9cm。7は小さな底部から直線的に開く胴部下半へと続き、強

第27図 2号竪穴出土土器実測図② (1/4)



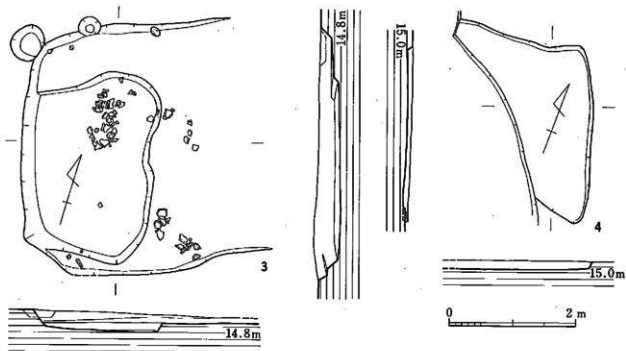
第28图 2号竖穴出土土器实测图③ (1/4)

く内湾する肩部へと至るもので、胴部最大径は中位よりやや上にある。その胴部最大径に当たる位置に断面台形の突帯を貼付する。内面胴部下半は横ヘラミガキ、上半は縦ヘラミガキ、外面胴部は横ヘラミガキ、底部は縦ヘラミガキ調整を行う。胴径31.2cm。8は明らかに当遺構には伴わないもので、混入品である。球形の胴部から、緩やかに外反して短く開く口縁部へと至る大型のもので、胴部中位および屈曲部やや下方に刻目をもつ突帯を貼付する。内外面ハケ調整を行う。

甕 (9~23) 9は直口縁のもので、端部よりやや下がった位置に刻目突帯を貼付する。刻目はハケ状工具で大きめに施される。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。10は口縁部がやや外傾し、突帯は長く垂下した形となる。内面はナデ、口縁部外面は斜ハケ後横ナデを行う。11は直立する口縁部の外端部に小さな刻目を施し、またやや下方に刻目突帯を貼付する。内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。12は内傾する直口縁のもので、端部よりやや下方に刻目突帯を貼付し、その下に2条の沈線を巡らす。刻目は小さく、まばらに施される。胴部内面は横ヘラミガキ、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。13は直立する胴部上半から大きく開く口縁部へと至るもので、胴部内面はナデ、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径26.6cm。14は13とはほぼ同形だが器肉が薄い。口径28.9cm。15はやや内傾する胴部上半から、内面に稜をもって屈曲し、短く開く口縁部へと至るもので、胴部内面ナデ、口縁部内面横ハケ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径29.4cm。16・17はほぼ同形で、内傾する胴部上半から、内面に不明瞭な稜をもって屈曲し、短く上方へと伸びる口縁部へと至るものである。16は口径27.2cm。17は口縁部下方に沈線を巡らせるもので、口径27.4cm。18は直立する胴部から、短く緩く外反する口縁部へと至るもので、口縁部下に1条の断面台形突帯を貼付する。胴部内面は縦・斜ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は斜ハケ調整を行う。口径29.6cm。19は外傾する胴部から短くわずかに外反する口縁部へと至るもので、口縁部下に断面三角形の突帯を貼付する。20はやや上げ底となる厚い底部で、底径6.4cm。21は裾が開きわずかに上げ底となる高い底部で、底部からややすばまりながら上方へ伸び、大きく開く胴部下半へと緩やかに続く。底径7.4cm。22・23は21とはほぼ同形で、22は底径7.6cm、23は底径6.4cm。

鉢 (24・25) 24はわずかに内湾しながら上外方へと伸び、短く外反する口縁部へと至るもので、内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径21.6cm。25は平坦で薄い底部から、直線的に胴部下半へと続き、緩やかに湾曲して直立気味に立ち上がり、内面に不明瞭な稜をもって緩く屈曲する口縁部へと至る。胴部内面は横ヘラミガキ、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径29.8cm、底径8.2cm、器高20.0cm。

高坏 (26~29) 26は丸みを帯びて立ち上がる坏部で、坏脚境に断面三角形の突帯を巡らす。内外面横ヘラミガキ調整を行う。27は裾部が大きく開くもので、柱部内面ナデ、裾部内面横ハケ、裾部外面横ヘラミガキ、柱部外面縦ヘラミガキ調整を行う。裾径15.8cm。28・29はほぼ同形で、細くやや長い柱部から緩やかに広がる裾部へと続く。坏脚境には断面三角形の突帯を巡らす。28



第29図 3・4号竪穴実測図 (1/60)

は全面風化が著しく調整不明。底径14.6cm。29は内面ナデ、裾部横ナデ、柱部外面縦ヘラミガキ調整を行う。裾径14.7cm。

蓋 (30) 笠形の壺蓋で、2個で1対となる円形孔を2カ所に穿孔する。内外面ヘラミガキ調整を行う。裾径11.0cm、器高3.1cm。

器台 (31) 上下がほぼ同様に開くと思われるもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。裾径8.8cm。

8は明らかに混入したもので、これ以外の遺物は、やや前出的な4・5など混入の可能性のあるものもあるが、他は弥生時代中期前半に比定できる。

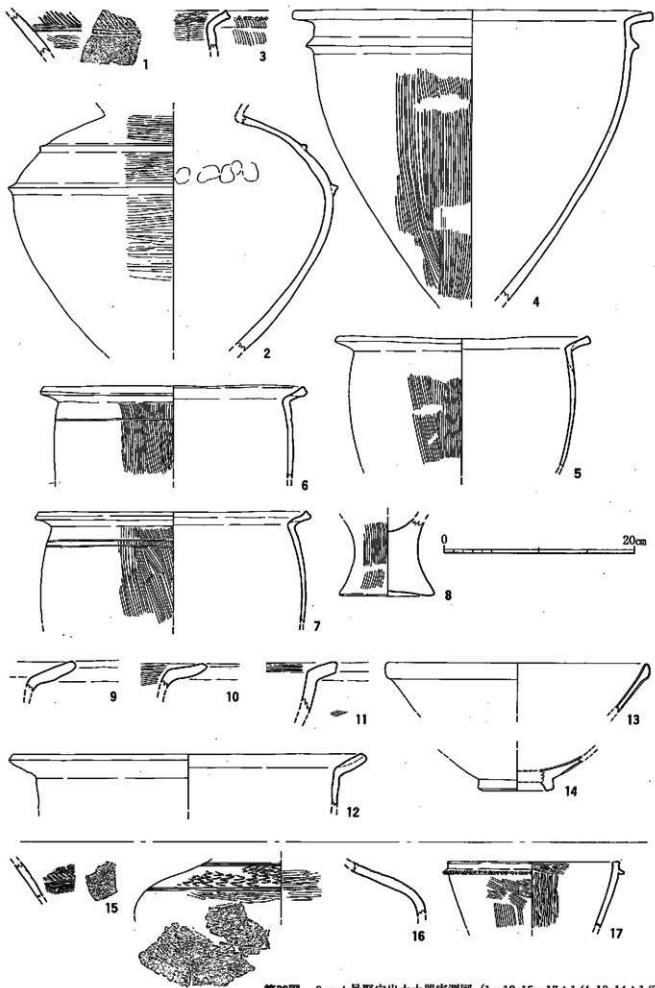
3号竪穴 (図版13、第29図)

調査区東端で検出した。東側を削平され消失するが、平面プランは長方形となるであろう。西側壁は3.0mを測り、緩やかな立ち上がりとなる。床面は東側はほぼ水平で、確認面からの深さは10cm。西側では長軸3.1m、短軸1.9mの不整形長方形の土坑状の窪みを検出した。底面からの深さは北側で10cm、南側で18cmを測る。

出土土器 (図版23、第30図)

壺 (1・2) 1は壺の肩部片で、3条の沈線の上に並行斜線文を配置する。2は壺の胴部片で、最大径が胴部中心よりやや上位にあり、頸部へ向かって強くすぼまる。最大径に当たる部分およびその上部に断面三角形突帯を貼付する。

甕 (3～8) 3は強く外反した如意形口縁の甕口縁部片で、端部上方を強くナデで跳ね上げ



第30图 3·4号竖穴出土土器实例图 (1~12·15~17: 1/4, 13·14: 1/3)

口縁気味にし、端部下方には刻目を入れる。内面は横ハケ、外面は縦ハケ調整を行う。4は底部から口縁部へと大きく開く甕で、胴部上半は直立し、口縁部は内面に稜をもって外方へ屈曲する。口縁部に近い位置に断面三角形突帯を1条貼付する。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。5～7は胴部上半がやや内傾気味に立ち上がるもので、口縁部は強く屈曲し、内面に稜をもつ。6は1条、7は2条のヘラ描き沈線を巡らす。また6・7の口縁端部は跳ね上げ気味にする。いずれも内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。5は口径26.8cm、6は口径28.0cm、7は29.0cm。8は裾部がやや外方へ広がる厚底の甕底部片である。底径10.0cm。

土師質土鍋(9～12) いずれも口縁部を強く外側へと折り曲げる。10・11は内面横ハケ、9・12は内面横ナデ調整を行う。12は口径37.7cm。

白磁碗(13・14) 13は小さな玉縁状口縁をなし、釉は薄い緑白色に発色する。口径21cm。14の外面高台部付近は露胎となる。釉は黄色がかった薄い緑白色に発色する。高台部径6.0cm。

1～8と9～14は明らかに時期の異なるもので、当遺構は2つの重複した遺構を気付かずに検出したものである。1～8は弥生時代中期後半に、9～14は古代末～中世前半に比定できる。

4号竪穴(第29図)

調査区西寄りで検出した。4号住居と重複しており、当竪穴の方が古い。平面プランは不整長方形となるだろう。東側壁は2.8mを測り、やや緩やかな立ち上がりとなる。底面は北から南へと若干傾斜し、遺構確認面からの深さは北側で8cm、東側で5cm、西側で10cmを測る。

出土土器(第30図)

壺(15・16) 15・16は肩部に文様帯のある壺である。15は1条沈線の上にヘラ描きの無軸羽状文を配置する。沈線下部は重弧文か。16は多条沈線間にヘラ描き無軸羽状文を巡らす。文様帯上部沈線の条数は不明。下部は2条である。

甕(17) 直線的に開く直口縁の口縁端部からやや下がった位置に、断面三角形の細い刻目突帯を貼付する。調整は、胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、突帯部下は横ハケ、胴部は縦ハケを行っている。口径19.0cm。

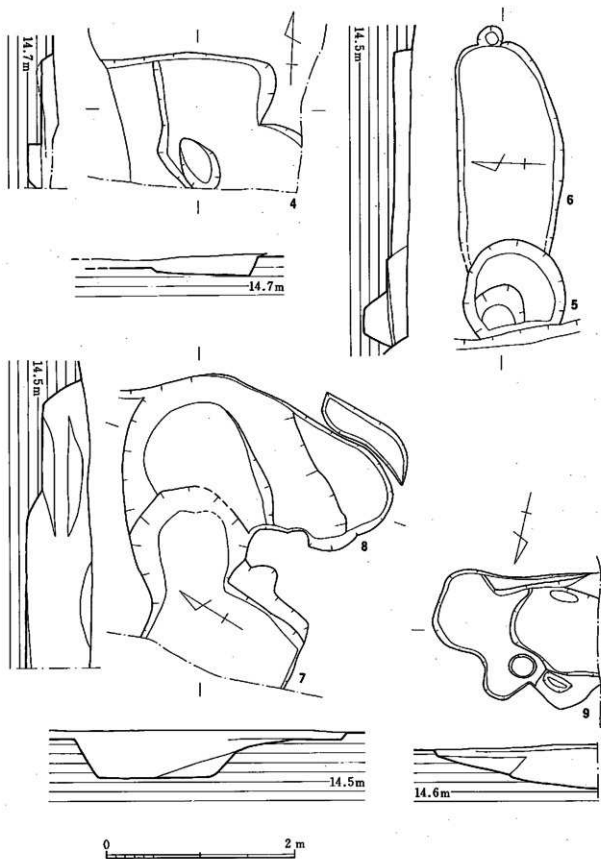
当遺構は出土遺物が少ないが、弥生時代前期末のものである。

4号土坑(第31図)

調査区南西端で検出した。調査区外へと伸展しており、平面プランは不明。西側がテラス状に高くなり、また南側壁際ではピットを検出している。底面は中央から東側に向かってわずかに傾斜している。壁は北側はほぼ垂直に、東側はやや緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは、西側のテラス部で10cm、南側のピット内で30cm、東側の最深部で20cmを測る。

出土土器(図版23、第32図)

壺(1・2) 1は壺の肩部片で、断面台形突帯を貼り付ける。内外面ヘラミガキ調整を行う。



第31图 4~9号土坑实测图 (1/40)

2は肩部に文様帯をもつもので、ヘラ描き沈線間に貝殻による無軸羽状文を配置する。

甕(3-12) 3は内湾しながら直立気味に立ち上がる胴部上半から、屈曲して開く口縁部へと至る。屈曲部内面に稜をもち、口縁端部はわずかに跳ね上げ気味に仕上げる。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径27.6cm。4は直立気味に立ち上がる胴部上半から、屈曲して大きく開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面に稜をもち、端部は面取り成形をする。器肉は非常に薄い。胴部内外面ナデ、口縁部横ナデ調整を行う。口径29.8cm。5・6はほぼ同じ器形である。やや内傾する胴部上半から、屈曲して開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面に弱い稜をもち、また屈曲部外面よりやや下方に断面三角形突帯を貼付する。器肉は非常に薄い。5は口径32.0cm。6は口縁端部をわずかに跳ね上げ気味にしており、口径32.4cm。7は内傾する胴部上半から、屈曲して外反する口縁部へと至るもので、屈曲部内面は弱い稜をもち、端部は面取り成形を行う。8はわずかに内傾する胴部上半から、屈曲して大きく開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面は弱い稜をもつ。器肉は非常に薄い。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。9-11はほぼ同じ器形の甕底部である。平坦またはやや上げ底の厚い底部で、裾が開き、やや高いものである。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径8.0-8.6cm。

高坏(13) 13は内傾する短い鋤先形口縁をもつ。坏部内外面はヘラミガキ、口縁部は横ナデ調整を行う。口径14.0cm。

直立する甕の胴部上半や口縁部内面の不明瞭な稜、やや開いた裾部や高い底部などから、当土坑は弥生時代中期初頭～前半に比定できる。

5号土坑(図版14-1、第31図)

調査区西寄りで検出した。6号土坑と重複しており、当土坑の方が古い。平面プランは、長軸2.5m、短軸1.1mを測り、長方形に近い楕円形になるだろう。東側壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平である。確認面からの深さは約10cm。

出土土器(図版23、第32図)

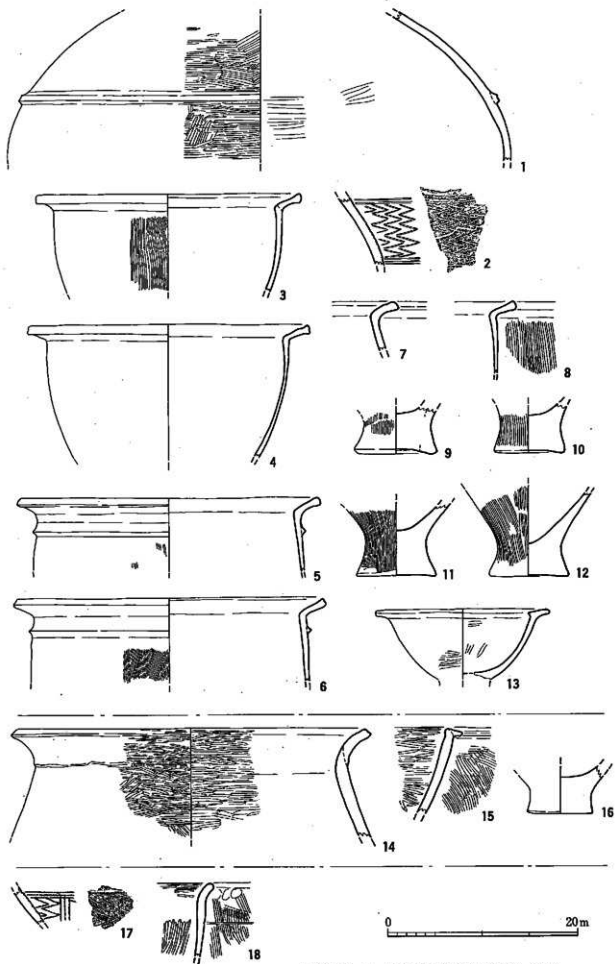
甕(14) 14は内傾する頸部から、外反する口縁部へと至るもので、接合部外面に段をもつ。内外面横ヘラミガキ調整を行う。口径37.0cm。

甕(15・16) 15はやや開く口縁の端部外面に断面三角形に近い小さな突帯を貼付するもので、内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部は斜ハケ調整を行う。16は底面が平坦な厚い底部で、底径7.0cm。

形骸化した段をもつ14、高い底部の16から、当土坑は弥生時代前期末に比定出来る。

6号土坑(図版14-1、第31図)

調査区西寄りで検出した。平面プランは径1.0mの円形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ水平である。西側壁際からはピットを検出している。確認面から底面までの深さは20cm、



第32图 4~6号土坑出土土器实例四 (1/4)

ピットまでは50cmを測る。

出土土器 (図版23、第32図)

壺 (17) 17は文様帯をもつ壺の頸部片で、3条の貝殻描き平行横沈線の下部に、貝殻による無軸羽状文および3条の平行縦沈線から成る仕切線を配置する。

甕 (18) 18は緩く外反する如意形口縁の甕の口縁部で、口縁部下方に沈線を1条巡らす。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ後、胴部に縦ヘラミガキ調整を行う。口縁端部外面下方に、外反した際の指痕が明瞭に残る。

遺物が少ないが、当土坑は弥生時代前期末に比定出来る。

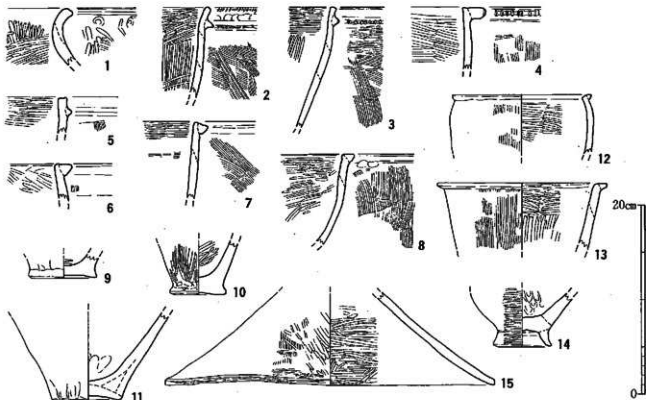
7号土坑 (図版14-2、第31図)

調査区西端で検出した。8号土坑と重複しているが、新旧関係を正確には把握できなかった。西側は調査区外へと伸展する。平面プランは不整形。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ水平で、確認面からの深さは50cmを測る。

出土土器 (図版23、第33図)

壺 (1) 1は内傾する頸部から、大きく短く外反して口縁部へと至るもので、口縁部は横ナデ、頸部内外面ヘラミガキ調整を行う。

甕 (2) 2はやや外傾する直口縁のもので、口縁外端部に刻目を施し、そのやや下方に刻目突帯を貼付する。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、



第33図 7号土坑出土土器実測図 (1/4)

胴部外面は斜ハケ調整を行う。4は口縁外端部に大きな断面「コ」字形に近い刻目突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。5は直口縁のもので、端部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。6～8は口縁端部に断面三角形の突帯を貼付するもので、6・8は内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。7は内面横ハケ後ナデ、口縁部外面横ナデ、胴部外面斜ハケ調整を行う。9・10は裾が開く薄い底部のもので、10は内外面ヘラミガキ調整を行う。11はやや上げ底の薄い底部で、直線的に胴部へと移行する。底径7.4cm。

鉢(12～14) 12はやや内傾する口縁部の外端部に小さな突帯を貼付するもので、形状は甕に似る。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径14.6cm。13は直線的に開く胴部から、短く屈曲する口縁部へと至るもので、胴部内面縦ヘラミガキ、口縁部内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径15.4cm。14は底部に高台を貼付するもので、高台は裾が広がるやや高いものである。内面指ナデ、外面細かい横ヘラミガキ調整を行う。高台径6.2cm。

蓋(15) 直線的に大きく開く甕用の蓋で、内面および口縁部外面横ヘラミガキ、外面縦ハケ後斜ヘラミガキ調整を行う。裾径34.8cm。

当土坑から出土した遺物は弥生時代前期後半～末に比定出来る。

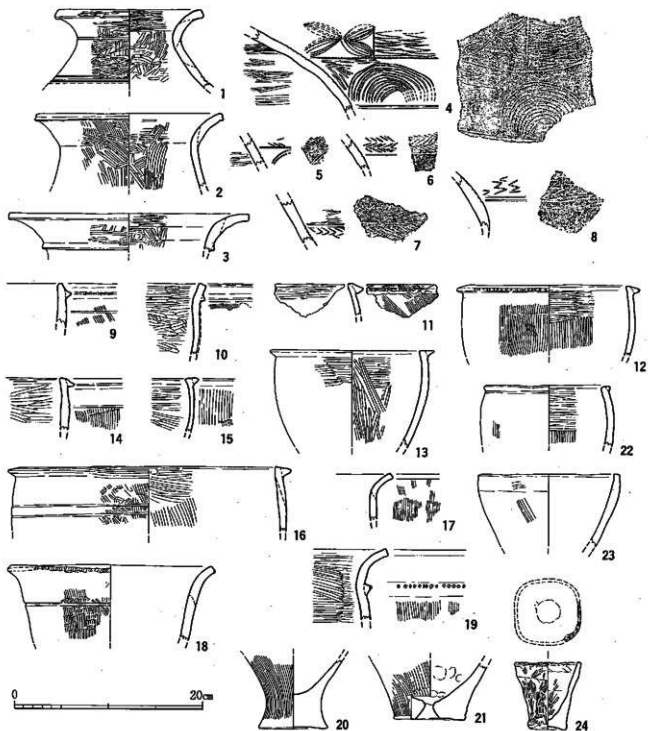
8号土坑(図版14-2、第31図)

調査区西端で検出した。7号土坑により西側が一部不明だが、平面プランは長軸2.9m、短軸1.4mのほぼ楕円形になろう。壁は北側は緩やかに、それ以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ水平で、確認面からの深さは50cmを測る。

出土土器(図版23、第34図)

壺(1～8) 1は内傾する頸部から外反する口縁部へと至るもので、口縁頸境に1条の沈線を巡らす。また肩頸境に数条の沈線を巡らす。内外面ヘラミガキ調整を行う。口径15.7cm。2はしまりのない頸部から外反する口縁部へと続くもので、内面はヘラミガキ、外面は縦ハケ後ヘラミガキを行う。口径19.8cm。3は大きく開く口縁部で、口縁頸境に断面三角形突帯を貼付する。4～8は肩部に文様帯を巡らすものである。4は貝殻描き有軸木葉文・無軸羽状文・重弧文・沈線から成る文様帯を巡らす。5は1条のヘラ描き沈線の上に無軸羽状文、下方に重弧文を配置する。6は1条のヘラ描き沈線の上にヘラ描き無軸羽状文を配置する。7は2条のヘラ描き沈線の下方にヘラ描き無軸羽状文を巡らす。8は2条のヘラ描き沈線の上に貝殻描き無軸羽状文を配置する。

甕(9～21) 9は内傾する直口縁の口縁端部よりやや下がった位置に1条の小さな刻目突帯を貼付するもので、突帯よりやや下がった所に1条の沈線を巡らす。内面は風化しており調整不明、外面はわずかに縦ハケが認められる。10は口縁部がわずかに外反するもので、口縁端部より



第34図 8号土坑出土土器実測図 (1/4)

やや下がった位置に断面三角形突帯を貼付する。調整は内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデを行う。胴部は器表が剝離しており調整不明。11は内傾する口縁端部外面に断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、胴部外面は斜ハケ調整を行う。12は直立する口縁部の端部外面に接して断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、刻目は小さくまばらに施される。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径16.4cm。13は内湾する胴部からやや内傾する口縁部へと至るもので、口縁端部

外面に接して断面三角形の刻目突帯を貼付する。刻目は非常に小さい。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ヘラミガキ調整を行う。胴部外面は器表が磨滅しており調整不明。14は直立する口縁部の端部外面に接して、やや外傾する断面三角形突帯を貼付するもので、突帯よりやや下方に1条の沈線を巡らす。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。15はやや内傾する口縁部の端部外面に接して、断面三角形突帯を貼付する。また端部内面をわずかに引き出す。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。16はやや内傾する口縁部の端部外面に断面三角形突帯を貼付するもので、胴部上半に2条の沈線を巡らす。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ後縦ヘラミガキ調整を行う。口径26.6cm。17は如意形口縁のもので、内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。18は外傾する胴部から、やや外反する口縁部へと続くもので、口縁部下端に刻目を施す。また口縁部下方に1条の太い沈線を巡らす。胴部内面はナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。器内はやや厚い。口径23.2cm。19は口縁部が長く外反するもので、端部は面取り成形する。口縁部からやや下がった位置に、刻目の小さな断面三角形の刻目突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。20は裾の開いた高い底部で、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。裾端部は鋭い。底径7.2cm。21は平坦な底部から直線的に胴部へと続くもので、底部に円孔を穿孔する。底径7.6cm。

鉢 (22~24) 22は内傾する口縁の端部に接して断面三角形の小さな突帯を貼付するもので、胴部下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ後ナデ調整を行う。口径11.2cm。23は開きながら立ち上がる直口縁のもので、全体的に器表の剝離が著しく、外面にハケがわずかに認められる以外は調整は不明。口径13.8cm。24はミニチュア鉢で、図面では口縁部方形に復元しているが、ただ単に歪んでいるだけかも知れない。やや上げ底の底部から、直線的に開く。口縁部上端に刻目を施す。器高7.1cm。

20は後出的で、混入品の可能性が高い。これ以外の遺物から見て、当土坑の時期は弥生時代前期末に比定出来る。

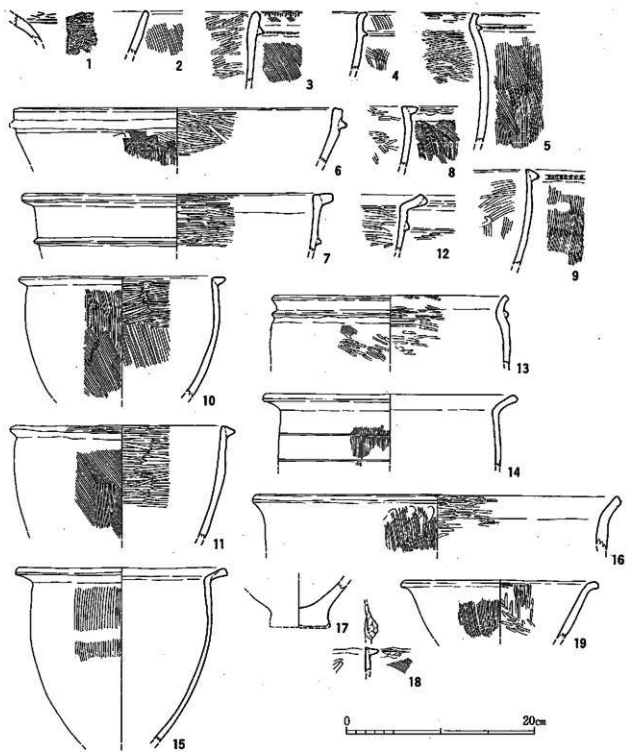
9号土坑 (図版15-1、第31図)

調査区西端で検出した。西側が調査区外へと伸展する。平面プランは短軸1.4mの楕円形に近い不整形。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西側に向かって傾斜している。北側で浅いピットを検出している。確認面からの深さは東側で5cm、ピット内で25cm、西側が最も深く、45cmを測る。

出土土器 (図版23、第35図)

壺 (1) 1は肩部に文様帯をもつもので、2条の沈線の上方に貝殻描き無軸羽状文を配置する。

甕 (2~17) 2は外傾して直線的に伸びる直口縁のもので、胴部内面はナデ、口縁部内外面

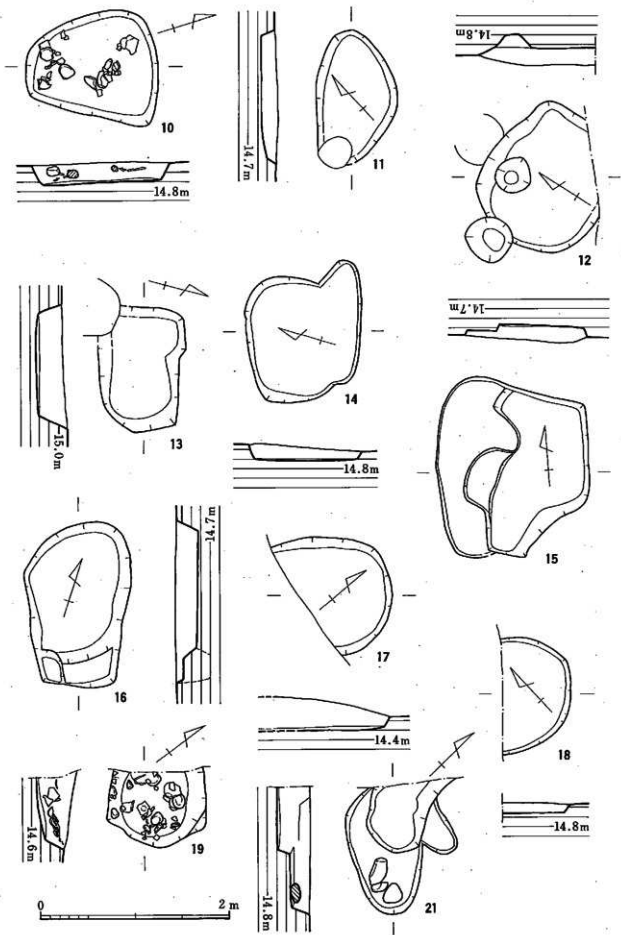


第35图 9号土坑出土土器夹测图(1/4)

横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。3は直立する口縁部で、丸く仕上げた口縁端部の外側に刻目を施す。口縁端部よりやや下がった位置に、刻目の小さな断面三角形の刻目突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、胴部外面は斜ハケ調整を行う。4は直立する口縁部の端部外面を突帯状に引き出すもので、また端部よりやや下がった位置に断面三角形の小さな突帯を貼付する。内面ナデ、外面ハケ調整を行う。5は内湾する胴部から、短く外反する口縁部へと続くもので、口縁端部外側に小さな刻目を施し、また屈曲部外側に小さな刻目突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。6はやや内湾して立ち上がる直口縁のもので、端部よりやや下がった位置に断面三角形の小さな突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径35.0cm。7は直立する口縁部の端部外側に、断面「コ」字形に近い突帯を貼付するもので、胴部上半に断面三角形の小さな突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ調整を行い、外面は磨滅しており調整不明。口径28.8cm。8は内湾気味に立ち上がる口縁部の端部外側に断面三角形の突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、外面斜ハケ調整を行う。9は内湾しながら直立する口縁部の端部外側に、断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、内面胴部下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。10は内湾する胴部から直立する口縁部へと続き、口縁端部外側に断面三角形の突帯を貼付するもので、胴部内面下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ヘラミガキ調整を行う。口径19.0cm。11は10とほぼ同じ器形で、内面および口縁部上端は横ヘラミガキ、突帯部下方は横ナデ、胴部外面は斜ハケ調整を行う。口径21.2cm。12は短く大きく開いて伸びるもので、端部を跳ね上げ気味にする。屈曲部からやや下がった位置に断面三角形の小さな突帯を貼付する。胴部内面は横ヘラミガキ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面横ヘラミガキ調整を行う。13は内傾する胴部から短く外反する口縁部へと続くもので、屈曲部外面に断面三角形の突帯を貼付する。口縁部内外面横ナデ、胴部内面横ヘラミガキ、胴部外面縦ハケ後横ヘラミガキ調整を行う。口径24.2cm。14は直立する胴部から、屈曲して直線的に伸びる口縁部へと続くもので、屈曲部内面の稜は不明瞭である。胴部外面上半に2条の沈線を巡らす。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径27.0cm。15は直立する胴部上半から大きく開く口縁部へと続くもので、屈曲部内面の稜は不明瞭である。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。16は口縁部が緩く短く外反するもので、内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。口縁部外面に指圧痕が明瞭に認められる。口径39.0cm。17は裾部を欠失する底部で、内外面風化が著しく、調整不明。

鉢 (18・19) 18は口縁端部に突起を貼付するもので、鉢または小型壺となるであろう。19は大きく開いた体部から、短く外反した口縁部へと至るもので、鉢または高坏となるであろう。内面ヘラミガキ、口縁端部は横ナデ、体部外面は縦ハケ調整を行う。口径18.0cm。

当土坑から出土した遺物は混入したと思われるものもあり、弥生時代前期末～中期前半までの幅がある。



第36图 10~21号土坑实测图 (1/40)

10号土坑（第36図）

調査区西寄りで検出した。2号竪穴と重複関係にあり、当土坑の方が新しい。平面プランは長軸1.3m、短軸1.2mの不整楕円形である。壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ水平である。確認面からの深さは北側で20cm、南側で20cmを測る。遺物は底面から若干浮いた状態で出土しており、土坑埋没過程で礫とともに投棄されたものであろう。

出土土器（図版24、第37図）

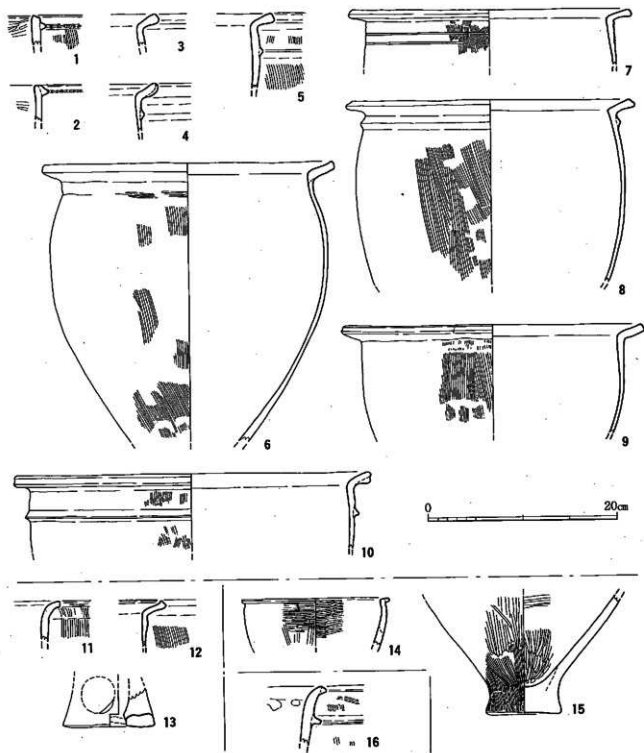
甕（1～10） 1は直立する口縁の端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付するもので、内面横へラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。2は口縁端部に接して刻目突帯を貼付するもので、内面横へラミガキ調整を行い、外面は調整不明。3は胴部から緩く屈折して、短く開く口縁部へと続くもので、屈曲部内面に不明瞭な稜をもつ。4はやや内傾する胴部から、緩く屈曲して、わずかに内湾する短い口縁部へと続くもので、屈曲部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼付する。5は直立する胴部上半から、内面に不明瞭な稜をもって屈曲し、短く開く口縁部へと続くもので、胴部上半に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。6は内湾しながら立ち上がる胴部から、内面に稜を持って屈曲し、大きく開く口縁部へと至る。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。器内は非常に薄い。口径31cm。7はわずかに内傾する胴部上半から、内面に稜をもって屈曲し、大きく開く口縁部へと続くもので、口縁部下方に2条の沈線を巡らす。口径30.0cm。8は内湾する胴部から、内面に稜を持ち強く屈曲して、大きく開く口縁部へと続くもので、屈曲部外面よりわずか下方に断面三角形突帯を貼付する。器内は非常に薄い。口径29.2cm。9は直立気味に立ち上がる胴部から、内面に不明瞭な稜を持って屈曲し、大きく開く口縁部へと続くもので、端部をわずかに跳ね上げ気味にする。内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径15.6cm。10は直立する胴部から、内面に稜をもたず緩く屈曲し、短く開く口縁部へと至るもので、口縁部下端をわずかにつまみ出した状態で仕上げる。胴部上半に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径38.0cm。

出土遺物には混入したと思われるものもある。遺構の時期は弥生時代中期前半～中葉に比定出来る。

11号土坑（第36図）

調査区西寄りで検出した。2号竪穴と重複関係にあり、当土坑の方が新しい。平面プランは長軸1.4m、短軸0.8mの不整楕円形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西から東へとわずかに傾斜している。確認面からの深さは、西側で10cm、東側で15cmを測る。

遺物は細片で図示し得ない。



第37図 10・12・14・15号土坑出土土器実測図 (1/4)

12号土坑 (図版15-2、第36図)

調査区南西端で検出した。東側が調査区外へと伸展するが、平面プランは径約1.5mの円形となるだろう。壁は北側は緩やかに、西側から南側にかけては急角度に立ち上がり、底面はほぼ水

平である。底面北側でピット1基を検出している。確認面から底面までの深さは、東側で15cm、西側で15cm、底面からピット内までの深さは15cmを測る。

出土土器 (図版24、第37図)

甕 (11・12) 1は緩く外反する如意形口縁となるもので、内面は風化しており調整不明、外面は縦ハケ調整を行い、口縁端部外面にわずかに横ヘラミガキが行われる。12は跳ね上げ口縁のもので、胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。器肉は非常に薄い。

台付鉢 (13) 3は台付鉢の脚部か。直線的に広がる裾部で、大きな円形透かし孔を3カ所に穿孔する。裾径7.2cm。

11・12は時期差のあるもので、当土坑の時期を判断するには出土遺物が乏しい。弥生時代前期後半～中期としておく。

13号土坑 (図版15-3、第36図)

調査区西寄りで検出した。平面プランは長軸1.2m、短軸0.9mのほぼ長方形となる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央がやや窪む。確認面から底面までの深さは東側で25cm、中央で30cm、西側で25cmを測る。

遺物は細片ばかりで、時期を判断し得るものは無かった。

14号土坑 (図版16-1、第36図)

調査区西寄りで検出した。平面プランは一辺約1.0mの不整正方形である。壁はやや急な角度で立ち上がる。底面はほぼ水平で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。

出土土器 (図版24、第37図)

甕 (14・15) 14は直立する口縁部の端部外側に丸い突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、口縁部外面および胴部上半横ヘラミガキ、胴部下半縦ハケ調整を行う。口径13.6cm。15はやや裾が開く厚い底部から、すぼまり、直線的に広がる胴下半部へと続くもので、内面ヘラミガキ、外面底部付近は縦ハケ、胴部外面は縦ヘラミガキ調整を行う。底径8.0cm。

出土した遺物は少ないが、当土坑出土物の時期は弥生時代前期末～中期初頭に比定出来る。

15号土坑 (図版16-2、第36図)

調査区西寄りで検出した。平面プランは不整正方形で、長軸1.8m、短軸1.4mを測る。壁は西側がほぼ垂直に近く、それ以外はやや急な角度で立ち上がる。底面は西側がテラス状に高くなる。底面は中央に向かってわずかに傾斜する。確認面からの深さは、テラス部で5cm、中央で15cm、東側で10cmを測る。

出土土器 (図版24、第37図)

甕 (16) 16はやや外反する口縁部で、端部下端をわずかにつまみ出した状態に仕上げる。ま

た口縁部下方に断面三角形に近い、やや垂れ下がった突帯を貼付する。内面はナデ、外面は縦ハケ後横ナア調整を行い、口縁部内面には指圧痕が認められる。

図示し得る遺物は1点しかないが、弥生時代前期後半～中期初頭に比定できる。

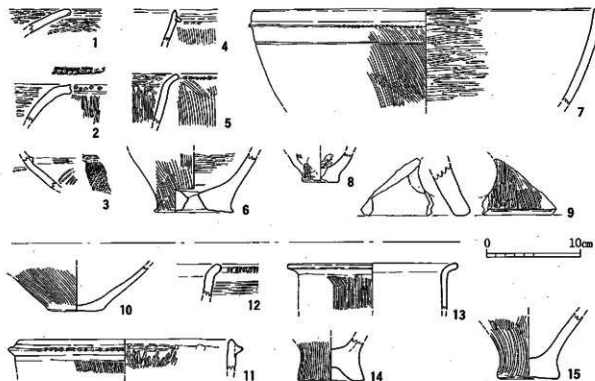
16号土坑 (図版16-3、第36図)

調査区西寄りで検出した。平面プランは長軸1.8m、短軸1.1mの不整長方形である。壁は南側が垂直に近く、それ以外は緩やかな立ち上がりとなる。底面は南側がテラス状に高くなり、また南西隅にピットを検出している。底面はほぼ水平である。確認面からの深さは、テラス部で5cm、ピット内で35cm、底面で25cmを測る。

出土遺物は、時期を判断できるものは無かった。

17号土坑 (第36図)

調査区西端で検出した。南側が他の遺構と重複し、消失するが、短軸1.2mの楕円形プランになるだろう。壁はやや急な角度で傾斜し、底面は東から西へわずかに下降する。確認面からの深さは、東側で20cm、西側が最も深く、35cmを測る。



第36図 17・18号土坑出土土器実測図 (1/4)

出土土器 (図版24、第38図)

壺 (1~3) 1は大きく開き、直線的に長く伸びる壺の口縁部で、内外面ともに横ヘラミガキ調整を行う。2は大きく開き、外反気味に長く伸びる壺の口縁部で、端部に竹管文を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ後、縦ヘラミガキ調整を行う。3は頸胴境に断面三角形の突帯を貼付するもので、肩部にヘラ描き沈線文を施す。

甕 (4~6) 4は直口縁の端部からやや下がった位置に断面三角形突帯を貼付するもので、突帯の剝離が著しく、刻目の有無は不明。5は外反角度のゆるい如意形口縁の甕で、下端に刻目をいれる。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。6は裾部がわずかに外に張り出し、底面に円孔を穿孔する。内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。

鉢 (7~9) 7は口縁部が直立し、端部を丸くおさめる。端部からやや下がった位置に断面三角形の細い刻目突帯を1条貼付する。また、突帯下部に1条の沈線を経る。調整は、内面が横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、沈線以下は縦ハケを行う。口径36.8cm。8は小型の鉢で、底部がやや厚い。内面は指ナデ、外面は縦ハケ後指ナデ調整を行う。9は台付鉢のような類の脚部である。器肉はかなり厚く、大きな円孔を3方向に穿孔するものと思われる。内面は指ナデ、外面は縦ヘラミガキ調整を行う。

当土坑出土遺物は弥生時代前期末~中期初頭に比定出来る。

18号土坑 (第36図)

調査区西端で検出した。北西側が調査区外へと伸展しており、平面プランは不明。西側の調査区境界壁面で1.2mを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは12cmを測る。

出土土器 (図版24、第38図)

壺 (10) 平坦で薄い底部から、直線的に開く胴部へとつながる。内面はナデ、外面はハケ調整を行う。底径6.2cm。

甕 (11~15) 11は直立する口縁の端部を丸くおさめ、やや下がった位置に断面三角形の刻目突帯を貼付する。刻目は小さく、まばらである。調整は、内面口縁部付近は横ヘラミガキ、以下は縦ヘラミガキ、外面突帯付近は横ナデ、突帯以下は縦ハケを行う。12は角度の緩い如意形口縁の甕で、端部下端に刻目を施す。口縁部下に5条のヘラ描き沈線が確認できる。13は直立する胴部からやや強く外反する如意形口縁の甕で、口縁部内外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。口径18.0cm。14は裾がやや開く上げ底の底部で、内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径7.0cm。15は裾がやや外側に張り出す平底の底部で、内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径6.6cm。

当土坑出土遺物は弥生時代前期末~中期初頭に比定出来る。

19号土坑 (第36図)

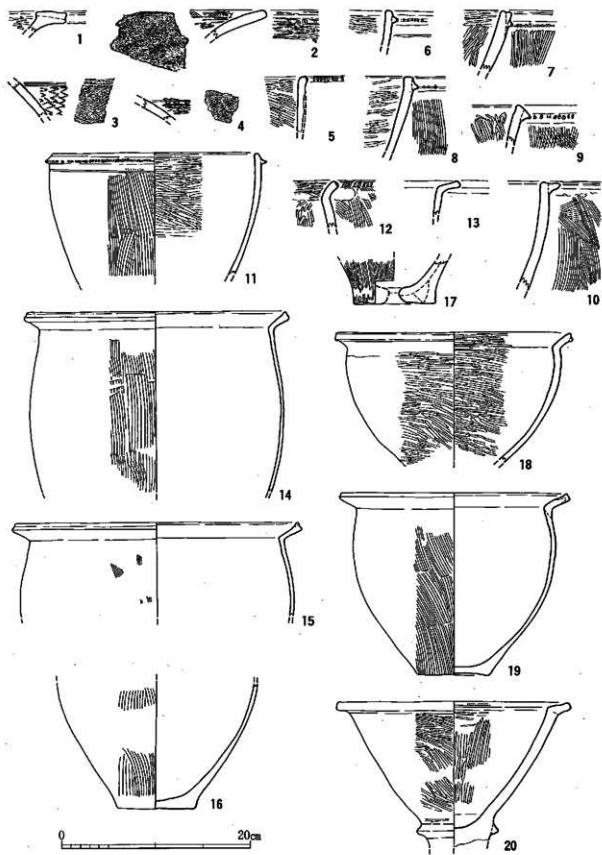
調査区の西側、18号土坑の東側に隣接して検出した。西側が調査区外へと伸展し、平面プランは不明。西側の調査区境界壁面で1.0mを測る。壁は緩やかな立ち上がりで、底面は東側から西側へと緩やかに下降する。確認面からの深さは東側で25cm、西側で40cmを測る。底面からやや浮いた状態で土器等とまっけて出土している。埋没中一括廃棄したものであろう。

出土土器 (図版24、第39図)

壺 (1~4) 1は口縁端部上面に粘土帯を貼付し、肥厚させるもので、胴部は短く、やや外傾する。2は大きく開く素口縁のもので、内面に貝殻による山形文・沈線文を巡らす。3・4は肩部片で、3はヘラ描き沈線とヘラ描き無軸羽状文、4はヘラ描き沈線と山形文、無軸羽状文を配置する。

甕 (5~17) 5は直立する口縁の端部外面に刻目を施すもので、内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は器表が剝離しており調整不明。6は直口縁の端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付するもので、突帯のやや下方に1条のヘラ描き沈線を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面はナデか。7は外傾する口縁の端部外面に2条の突帯を貼付するもので、刻目は下方の突帯にのみ施される。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。8は外傾する口縁で、端部上面を平坦に仕上げる。口縁端部よりわずかに下がった位置に刻目突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。9は口縁端部外面に断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、口縁部内外面は横ナデ、胴部内面は縦ヘラミガキ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。突帯よりやや下方に、刻目を施した際の工具痕が列点状に残る。10は内湾気味に直立する口縁の端部外面に断面三角形の突帯を貼付するもので、口縁部内外面は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は斜・縦ハケ調整を行う。11は内湾気味に直立する口縁の端部外面に細い刻目突帯を貼付するもので、突帯のやや下方に1条の沈線を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。口径23.0cm。12は如意形口縁の端部に刻目を施すもので、内面はヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。口縁部外面に指圧痕が明瞭に認められる。13は屈曲する口縁で、内面に不明瞭な稜をもつ。端部はわずかに跳ね上げ気味に仕上げる。14は内湾する胴部から、屈曲して開く口縁部へといたるもので、屈曲部内面に稜をもつ。器内は非常に薄い。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径28.0cm。15は内傾する胴部上半から、屈曲して開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面に明瞭な稜をもち、口縁端部は跳ね上げ口縁となる。器内は非常に薄い。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面はかすかに縦ハケ調整が観察出来る。16は平坦で薄い底部から、わずかにくびれて、緩く内湾する胴部へと続くもので、内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径8.0cm。17は平坦な底部から、直立して胴部下半へと続くもので、底部を穿孔する。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径8.6cm。

鉢 (18・19) 18は内湾する胴部から、屈曲して開く口縁部へと至るもので、内面に弱い稜を



第39图 19号土坑出土土器实测图 (1/4)

持つ。また、口縁端部は面取り成形を行う。内外面横ヘラミガキ調整を行う。口径25.0cm。19はわずかに上げ底気味の薄い底部から直線的に開き、内傾する胴部上半から、屈曲して開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面は稜をもつ。口縁端部は跳ね上げ気味に仕上げる。口径24.2cm、底径7.6cm、器高19.2cm。

高環 (20) 20は直線的に開く坏部から、内傾する短い口縁部へと続くもので、坏脚接合部に断面三角形の突帯を貼付する。坏部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、坏部外面は横・斜ヘラミガキ調整を行う。口径24.7cm。

出土遺物は混入したと思われる遺物が少なくないが、大半は弥生時代中期前半のものである。

21号土坑 (第36図)

調査区の北西端で検出した。北西側が調査区外へと伸展している。平面プランは楕円形に近い不整形。南壁で1.2m、西側の調査区境界壁で0.9mを測る。壁はやや急な角度の立ち上がりとなる。底面東側では円礫3個を検出した。底面西側ではさらに土坑状の掘り込みを検出した。確認面からの深さは、東側で20cm、西側で35cmを測る。

出土土器 (図版24図、第41図)

壺 (1) 1は長頸壺の口縁部で、外反気味に直立する口縁部の端部からやや下がった位置に突帯を貼付するものである。内面はナデ、口縁部外面は横ナデ、頸部外面は縦ハケ調整を行う。口径10.0cm。

蓋 (2) 2は裾部大きく広がる甕用蓋で、内面ナデ、外面縦ハケ、口縁部内外面は横ナデ調整を行う。裾径30.0cm。

当土坑は、弥生時代中期中葉前後に比定出来る。

22号土坑 (第40図)

調査区南西寄りで検出した。長軸1.9m、短軸1.8mの不整形プランである。壁はやや急な角度で立ち上がる。底面は周辺から中央に向かって若干窪んでいる。確認面からの深さは東側で30cm、西側で18cm、中央で35cmを測る。

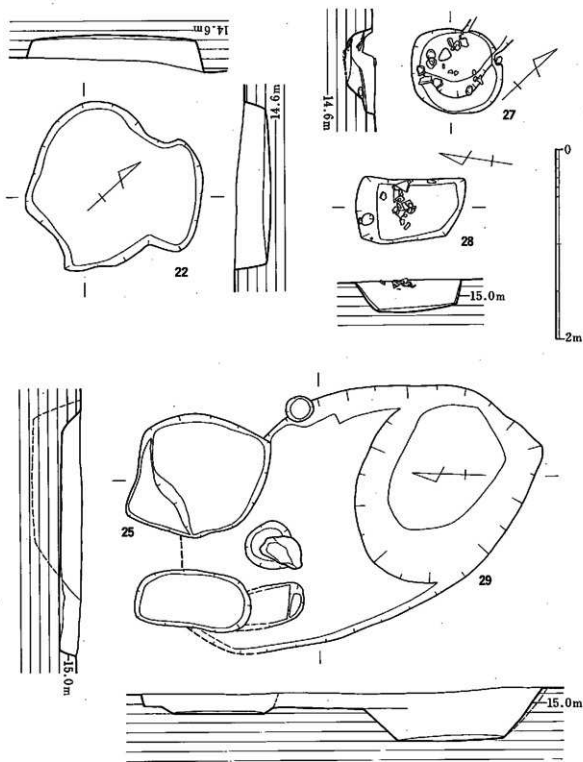
出土土器 (図版24、第41図)

壺 (3) 3は鋤先形口縁となるもので、外傾した鋤部の上端部を跳ね上げ気味に仕上げる。内面および上面は横ナデ、外面は縦ヘラミガキ後横ヘラミガキ調整を行う。

当土坑出土遺物で時期を判断できるものは1点しかなく、弥生時代中期後半前後のものである。

25号土坑 (図版17-1、第40図)

調査区中央で検出した。29号土坑と重複し、当土坑の方が新しい。平面プランは西壁で1.2m、北壁で1.0mの不整形である。壁は急角度に立ち上がる。北西隅がテラス状に浅くなる。確認

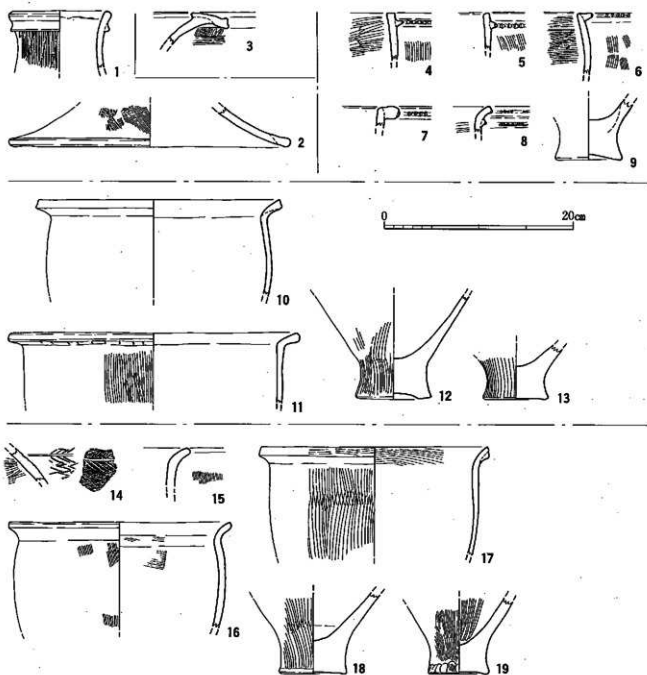


第40圖 22-29号土坑実測図 (1/40)

面からの深さは、テラス部で12cm、中央で20cm、南側で20cmを測る。

出土土器 (図版24、第41図)

甕 (4~9) 4・5は直立気味に立ち上がる口縁部の、端部からやや下がった位置に断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、4は内面横ヘラミガキ、5は内面ナデ調整を行う。6は内傾



第41図 21・22・25・27・28号土坑出土土器実測図 (1/4)

する口縁部の端部に接して断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、内面は丁寧な横ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。7は口縁端部外面に接する位置に、断面「コ」字形に近い刻目突帯を貼付するもの。8は強く短く外反する口縁部の下端部に刻目を施し、また屈曲部外側に小さな刻目突帯を貼付するもの。9は、わずかに上げ底で裾が開く厚い底部から、ややくびれて胴部下半へと続くものである。底径7.2cm。

当土坑は弥生時代前期末～中期初頭に比定出来る。

27号土坑 (第40図)

調査区南寄りで検出した。径1.0mの円形プランである。東側がテラス状に浅くなる。また底面は周囲から中央に向かって緩やかに傾斜する。壁は北および南側はほぼ垂直に、それ以外はやや緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは、テラス部で10cm、中央で30cm、西側で25cmを測る。
出土土器 (図版24、第41図)

甕 (10~13) 10はやや内傾する胴部上半から、緩く屈曲して、上方へと伸びる口縁部へと至るもので、内面はナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面は風化が著しく調整不明。口径26.4cm。11は直立する胴部から、内面に稜をもって屈曲し、短く外反する口縁部へと至るもので、内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口縁部下にハケ調整の際の工具痕が明瞭に残る。口径31.0cm。12は輪状の高まりをもって上げ底となる厚い底部のもので、ややすはまり、直線的に開く胴部下半へと続く。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。底径8.0cm。13は平坦で裾の開いた底部から、ややすはまり、大きく開く胴部下半へと緩やかに移行するもので、内面ナデ、外面粗い縦ハケ調整を行う。底径7.0cm。

当土坑は弥生時代中期初頭前後に比定出来る。

28号土坑 (図版17-2、第40図)

調査区中央付近で検出した。平面プランは長方形で、長軸1.1m、短軸0.65mを測る。壁は北側が緩やかな、それ以外はやや急角度な立ち上がりとなる。底面は南から北に向かって緩やかに下降する。遺構確認面から底面までの深さは、南側で25cm、中央で30cm、北側で35cmを測る。底面から25cm程浮いた状態で比較的まとまって遺物が出土しているが、土坑埋没途中で廃棄されたものだろう。

出土土器 (図版24、第41図)

壺 (14) 14は壺の肩部片で、ヘラ描き横沈線および貝殻描き無軸羽状文からなる文様帯を巡らす。

甕 (15~19) 15は如意形口縁の甕。16はやや内傾する胴部から、緩やかに外反する口縁部へと至るもので、胴部内面横ハケ後ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径23.6cm。17は直立する胴部から、短く外反する口縁部へと至るもので、口縁端部を面取り成形し、下端がやや垂れた状態にする。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ハケ後横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径24.0cm。18は直立する高い底部から、胴部下半へと緩やかに移行するもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.2cm。19はわずかに裾が開く高い底部から、胴部下半へとなだらかに移行するもので、内面縦ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。底径6.4cm。

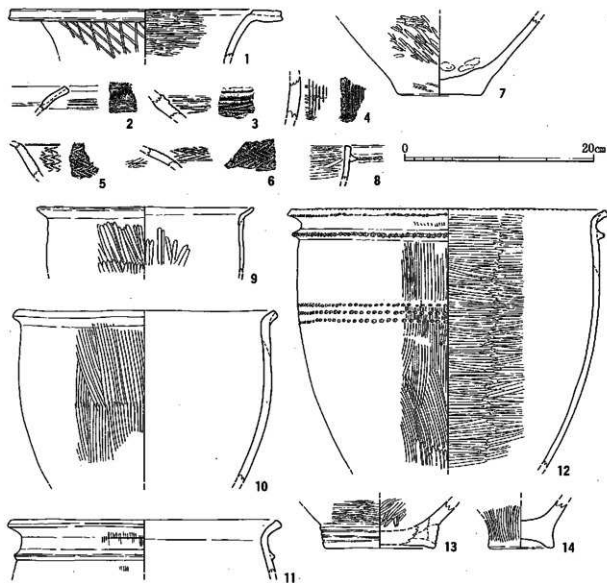
当土坑は弥生時代中期初頭に比定出来る。

29号土坑 (図版17-3、第40図)

調査区中央付近で検出した。25号土坑と重複するが、当土坑の方が古い。北側を一部消失するが、平面プランは長軸4.0m、短軸2.5mの不整楕円形となる。壁は緩やかに立ち上がる。南側は長軸2.0m、短軸1.7mの大きさで土坑状に深くなっている。遺構確認面からの深さは、この土坑内で50cm、中央で15cmを測る。中央付近の底面直上からは比較的まとまった状態で遺物が出土している。

出土土器 (図版24、第42図)

壺 (1~7) 1は外反しながら伸びる頸部から、内面に粘土帯を貼付して肥厚させ、水平に伸びる口縁部へと続く鋤先形口縁の壺で、頸部外面に暗文を施す。口径は内法で22.6cm。2は口縁部内面に粘土帯を貼付して肥厚させ、上外方へと伸びる壺の口縁部で、外面に4条のへら描き沈線が確認できる。3は頸部接合部に断面「M」字に近い突帯を貼付する壺で、突帯下に貝殻による無軸羽状文を配置する。4は壺の胴部片で、貝殻による6条の並行縦沈線をいれるが、どの



第42図 29号土坑出土土器実測図 (1/4)

ような文様になるかは不明。5は1条の沈線下に無軸羽状文を施す。6は1条の沈線の上に貝殻による無軸羽状文を施す。7は平坦な底部から、直線的に胴部へとつながる壺の胴部下半である。底径9.0cm。

壺(8~14) 8は直立する口縁部からやや下がった位置に断面三角形の刻目突帯を貼付する口縁部片で、調整は、内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、突帯以下は風化しており不明。9は直立する胴部から、屈曲して直線的に伸びる口縁部へと続く、「く」字形口縁に近い如意形口縁の甕である。器内が非常に薄い。口縁部内外面は横ナデ、胴部内外面は粗い縦ヘラミガキ。口径23.0cm。10はやや膨らんだ胴部から直立する胴部上半へと続き、口縁部は短く外反する。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。口径28.0cm。11は緩く「く」字形に屈曲する口縁部で、口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼付する。全体的に風化が著しいが、外面に縦ハケが確認できる。口径29.0cm。12は西部瀬戸内の要素の濃いもので、やや内湾気味に直立する胴部から、強く短く外反する口縁部へと続く。口縁端部を強くナデで面取り成形し、上下端に刻目を施す。口縁部に近い位置に断面三角形の刻目突帯を1条巡らす。また胴部最大径にあたる部分に3条の列点文を巡らす。調整は、内面は横ヘラミガキ、外面は、口縁部付近が横ナデ、胴部が縦ハケ、底部付近が縦ヘラミガキを行っている。口径34.0cm。13はわずかに上げ底となる甕の底部で、外面に4条のヘラ描き沈線を巡らす。壺か甕か判断に苦しむが、類例から壺の底部となる可能性が高い。内外面ヘラミガキ調整を行う。底径11.6cm。14はわずかに裾が開く上げ底の甕底部である。底径7.0cm。

当地出土遺物はやや時期差があり、弥生時代前期末~中期前半のものである。

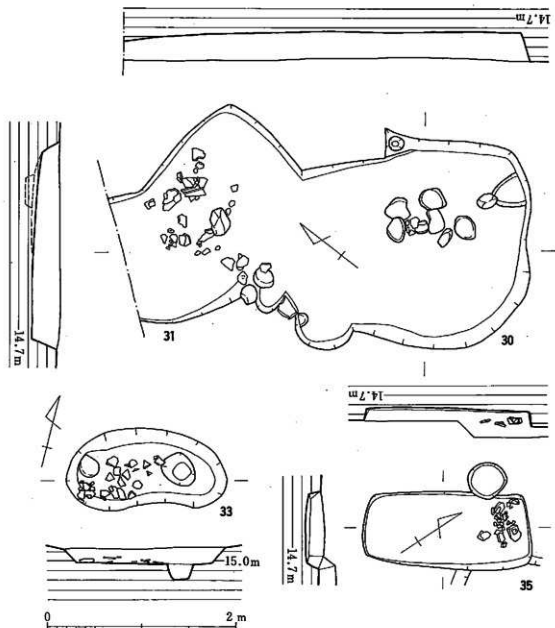
30号土坑(第43図)

調査区中央で検出した。31号土坑と重複するが、先後関係を確認することは出来なかった。長軸3.0m、短軸2.2mの不整長方形プランとなる。壁は東側は急角度に、それ以外はやや緩やかに傾斜する。底面は平坦だが北から南に若干下降し、また東隅でピットを検出している。確認面からの深さは南側で30cm、中央で25cm、北側で20cm、ピット内で40cmを測る。

出土土器(図版25、第44図)

壺(1) 1は肩部に貝殻描き横沈線・無軸羽状文・山形文から成る文様帯を配置するものである。

壺(2~5) 2は内傾する胴部上半から屈曲して短く開く口縁部へと続くもので、口縁端部を跳ね上げ状に仕上げる。屈曲部からわずかに下がった位置に断面三角形突帯を貼付する。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。3は内傾する胴部上半から屈曲して開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面に稜をもつ。屈曲部からやや下がった位置に断面三角形突帯を貼付する。4は胴部上半に3条の沈線を施し、その下に竹管文を巡らす。5は裾の開く厚い底部から、強くくびれ、直線的に開く胴部下半へと続くもので、内面はヘラ状工具に



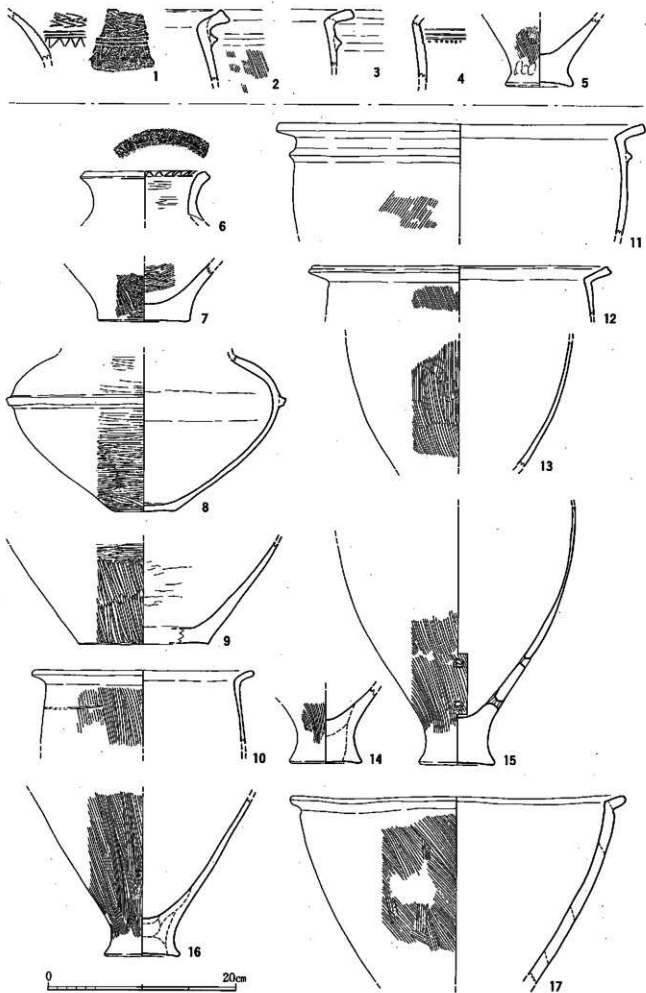
第43図 30・31・33・35号土坑実測図 (1/40)

よるナデ、胴部外面は縦ハケ、底部外面は横ナデ調整を行う。くびれた部分には指痕が明瞭に残る。底径7.3cm。

出土遺物にはかなり時期幅があり、弥生時代前期末～中期のものである。

31号土坑 (第43図)

調査区北西端で検出した。西側が調査区外へと伸展する。30号土坑と重複するが、先後関係を確認し得なかった。平面プランは長軸2.5m、短軸1.5m程度の不整長方形となろう。壁は急角度に傾斜する。底面はほぼ平坦で西から東へ向かってやや下降し、確認面からの深さは西側で20cm、中央で25cm、東側で30cmを測る。中央付近で遺物が集中して出土したが、いずれも底面から10cm程度浮いている。



第44图 30·31号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (図版25、第44図)

壺 (6~9) 6はあまり開かずに関外反するもので、口縁端部内面にヘラ描き横沈線・山形文からなる文様帯を配置する。口径12.8cm。7は平坦でやや厚い底部から、直立気味に立ち上がり、緩く外反して胴部下半へと移行するもので、内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ後ヘラミガキ調整を行う。底径9.6cm。8は小さく不安定な底部から直線的に大きく開き、強く内湾して内傾する肩部へと続くもので、胴部最大径にあたる部分に断面台形突帯を貼付する。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ調整を行う。底径6.8cm、胴径31.2cm。9は底部から屈曲せず直線的に伸びる胴部下半へと続くもので、内面はナデ、外面底部付近は縦ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキ調整を行う。内面には爪痕が多数残る。かなり爪が伸びていたであろう。底径14.0cm。

甕 (10~16) 10は内傾する胴部から、屈曲して開く口縁部へと至るもので、胴部上半にヘラ描き沈線を1条巡らすのが全周しない。器内は非常に薄い。口径23.0cm。11はやや内傾する胴部上半から屈曲して大きく開く口縁部へと至るもので、屈曲部のやや下方に断面三角形突帯を貼付する。内面および口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径38.5cm。12・13は同一個体だが接合しない。12は内傾する胴部から屈曲して大きく開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面には不明瞭な稜をもつ。口径32.0cm。13はやや内湾しながら立ち上がる胴部で、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。器内は非常に薄い。14は裾がかなり開き、厚い底部となるもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.7cm。15は14とほぼ同様の底部をもち、直線的に伸びる胴部下半から、直立する胴部上半へと続く。胴部下半に円孔を2つ穿孔する。調整は、胴部内面はナデ、外面下半は縦ハケを行っており、胴部上半は器表が風化していて調整不明。16は裾部がかなり開く厚い底部から大きくくびれ、直線的に開く胴部下半へと続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径8.0cm。

鉢 (17) 17は直線的に開く胴部から、端部に断面「コ」字形に近い突帯を貼付する口縁部へと至るもので、内面ナデ、外面斜ハケ調整を行う。口径35.0cm。

出土遺物には混入があるようである。弥生時代中期初頭~前半に比定出来る。

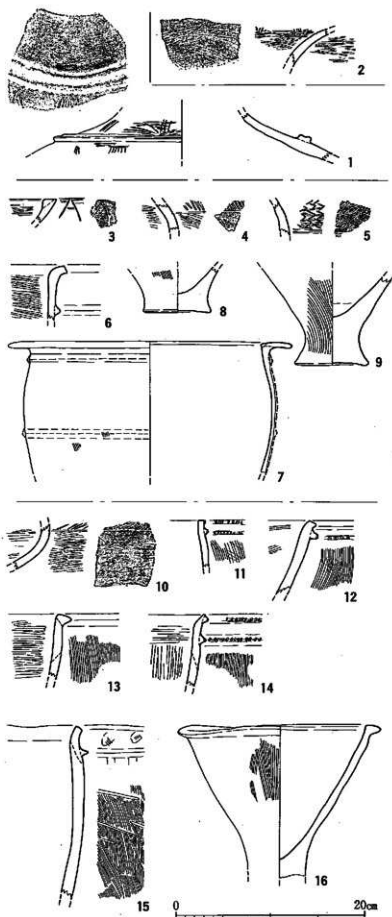
33号土坑 (図版18-1、第43図)

調査区中央北寄りで見出した。長軸1.7m、短軸0.8mの不整楕円形プランで、壁は緩やかに立ち上がる。底面は西から東に向けて若干下降し、また底面東側でピットを1基検出している。確認面からの深さは、西側で15cm、中央で18cm、東側で20cm、ピット内で25cmを測る。

出土土器 (図版25、第45図)

壺 (1) 1は強く内傾する肩部で、断面「M」字形の突帯の上方に貝殻描き木葉文、下方に貝殻描き重弧文を配置する。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ調整を行う。

時期を判断できる遺物が非常に少ないが、当土坑の時期は弥生時代前期末に比定出来るよう。



第45図 33・35・36・38号土坑出土土器実測図 (1/4)

35号土坑 (図版18-2、第43図)

調査区中央で検出した。4号住居と重複するが、当土坑のほうが古い。長軸1.8m、短軸0.8mの長方形プランで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南へ向かって緩やかに下降する。確認面からの深さは、南側で20cm、中央で25cm、北側で30cmを測る。北端で遺物がややまとまって出土しているが、底面から10cm程度浮いた状態での出土である。

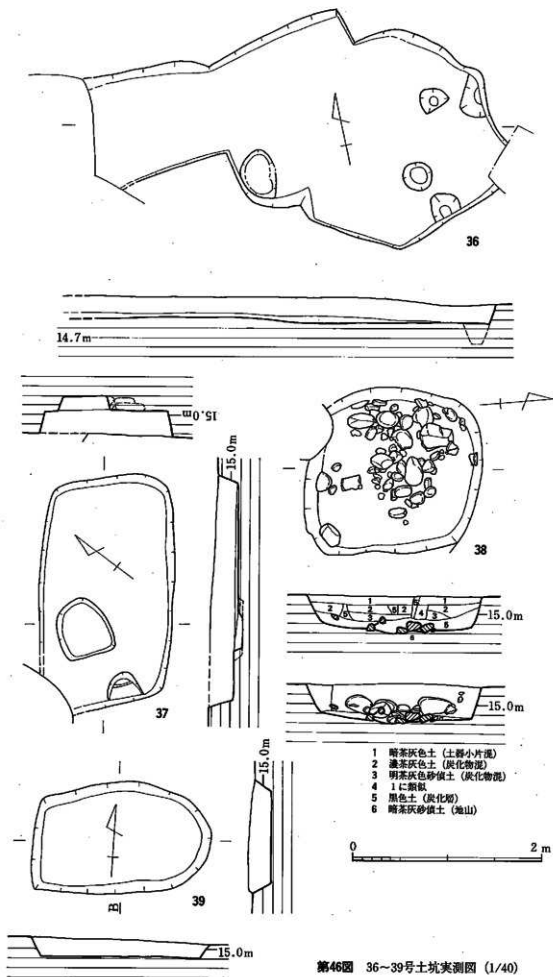
出土土器 (図版25、第45図)

壺(2) 2は口縁部内面に、貝殻描きの沈線・山形文から成る文様帯を配置するもので、内外面横へラミガキ調整を行う。

当土坑は弥生時代前期末に比定出来る。

36号土坑 (第46図)

調査区中央で検出した。2つの遺構の重複かとも考え精査したが、その関係を把握するには至らなかったもので、1遺構として報告する。4号住居・31号土坑と重複するが、この中では当土坑がもっとも古い。西側を消失するが、長軸4.3m、東側短軸2.3m、西側短軸1.1mを測る不整形である。壁は南側は垂直に近く、北側はやや緩やかに立ち上がる。底面は周辺から中央



第46図 36~39号土坑実測図 (1/40)

へとなだらかに下降している。底面中央南側で1基、東側で4基のピットを検出しているが、当土坑に伴うものかは不明。確認面からの深さは、西側で25cm、中央付近で30cm、東側で20cm、中央南側のピット内で30cm、東側端のピット内で40cmを測る。

出土土器 (図版25、第45図)

壺(3~5) 3は上端部に平坦面を形成する口縁部で、外面に貝殻描き山形文を施す。4は肩部に1状のヘラ描き沈線を巡らせ、その上方に平行斜線を配置するもの。5は平行横沈線の上方にヘラ描き無軸羽状文を配置するものである。

甕(6~9) 6は直立する胴部上半から、短く外反する口縁部へと続くもので、端部下端をつまみ出した状態に仕上げる。胴部上半に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内面は横ヘラミガキ、口縁部内外面および胴部外面は横ナデ調整を行う。7は外傾する鋤先形口縁のもので、胴部上半は内傾する。胴部最大径に当たる部分および口縁部直下に断面三角形の低い突帯を貼付するが、剝離している。口縁部内外面は横ナデ、胴部は器表が剝離しており調整不明。口径23.4cm。8は平坦な底部から、ややすぼまり、緩やかに胴部下半へと移行するもので、底径7.2cm。9はかなり裾が開いた底部から、すぼまり、直線的に開く胴部下半へと緩やかに移行するもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.8cm。

出土遺物にはやや時期幅があり、弥生時代前期末~中期中葉のものが出土している。

37号土坑 (第46図)

調査区北東で検出した。長軸2.4m、短軸1.4mの長方形プランで、壁はやや急傾斜の立ち上がりとなる。床面は西から東へと若干下降しており、また中央東寄りで1基、南側隅で1基のピットを検出している。検出面からの深さは、北側で20cm、中央で30cm、南側で25cm、中央ピット内で40cm、南端ピット内で40cmを測る。

遺物は図示できるものは出土しなかった。

38号土坑 (第46図)

調査区北東で検出した。一辺1.8mの正方形プランの土坑で、壁はやや急傾斜に立ち上がる。底面は南から北へ向かって緩やかに下降しており、確認面からの深さは南側で30cm、中央で40cm、北側で35cmを測る。底面中央から西側にかけて、土器・円礫を多く検出している。

出土土器 (図版25、第45図)

壺(10) 10は胴部最大径に当たる位置に貝殻による沈線を1条巡らせ、その上方に羽状文または平行斜線を配置する。沈線内にわずかに朱が認められる。

甕(11~15) 11は直口縁の口縁外端部に刻目を施し、そのやや下方に小さな刻目突帯を貼付する。12は外傾する直口縁の口縁外端部をわずかにつまみ出し、その直下に刻目突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、口縁部外面ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。13は直立する口縁部

外端面に接して断面三角形の突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。14は如意形に外反する口縁部の外端部に接する位置、およびそのやや下方に、断面三角形の刻目突帯を貼付するもので、胴部内面縦ヘラミガキ、口縁部内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。15は直立する胴部から、わずかに外反する口縁部へと続くもので、端部は面取り成形を行い、また端部よりやや下がった位置に小さな断面三角形突帯を貼付する。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。

高坏 (16) 16は高坏の坏部で、直線的に開き、口縁外端部に接して断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。口径18.4cm。

当土坑は弥生時代前期末～中期初頭に比定出来る。

39号土坑 (第46図)

調査区北東で検出した。長軸1.9m、短軸1.2mを測る不整長方形プランの土坑で、壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はほぼ水平に近く、西側で20cm、中央で20cm、東側で15cmを測る。

遺物は僅かしか出土せず、時期を判断出来るものは無い。

40号土坑 (第47図)

調査区東側で検出した。長軸3.7m、短軸1.5mの長方形プランとなる。壁は東側は急角度に、西側はやや緩やかに傾斜する。北側は長軸2.3m、短軸1.1mの楕円形の土坑状に深くなり、この部分の壁は緩やかな傾斜となる。確認面からの深さは東側で30cm、西側で10cm、北側で40cmを測る。

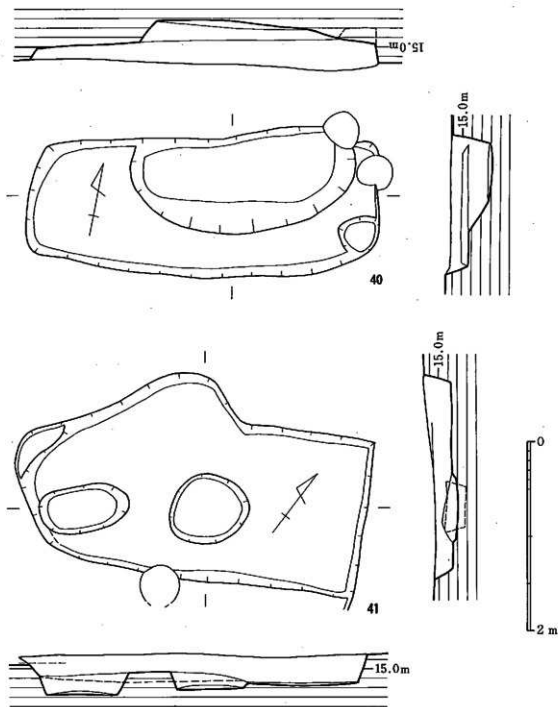
出土土器 (図版25、第48図)

壺 (1) 1は頸胴境に4条の太いヘラ描き沈線を巡らせ、その下に貝殻による無軸羽状文を配置する。

甕 (2～5) 2は端部を丸くおさめた直口縁の端部からやや下がった所に、刻目のない断面三角突帯を貼付する。内面口縁部付近は横ヘラミガキ、それ以下は縦ヘラミガキ、外面は横ナデ調整を行う。3は外反の弱い如意形口縁で、口縁端部下端に刻目を施す。また口縁部下に刻目突帯を貼付し、さらにその下に1条のヘラ描き沈線を巡らす。内面は横ヘラミガキ、外面の口縁から沈線付近までは横ナデ、それ以下は縦ハケ調整を行う。4は口縁が直線的に開く如意形口縁の甕で、口縁部外面には指で折り返した際の指痕が明瞭に残る。内面ナデ、外面口縁部付近は横ハケ、胴部は縦ハケ調整を行う。口径25.0cm。5は直立する胴部から短く外反する如意形口縁へと続く甕である。口縁端部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面に、折り返した際の指痕が明瞭に残る。内面はナデ、口縁部外面付近は横ハケ後横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径26.0cm。

当土坑は弥生時代前期後半～末に比定出来るよう。

41号土坑 (第47図)

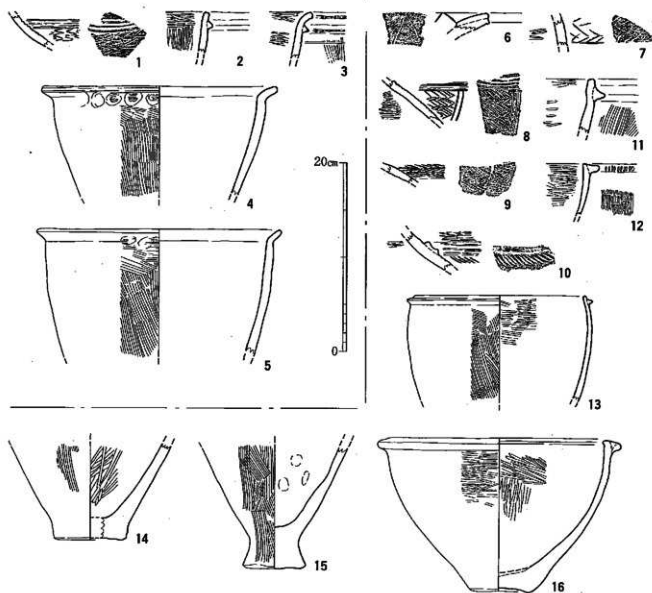


第47図 40・41号土坑実測図 (1/40)

調査区北側で検出した。平面プランは長軸3.7m、短軸2.0mを測る不整形である。底面はほぼ水平だが、中央および南側で浅いピットを検出している。確認面からの深さは東側で35cm、西側で20cm、中央のピット内で40cm、南側のピット内で45cmを測る。

出土土器 (図版25、第48図)

壺 (6~10) 6は端部内面に粘土帯を貼付して肥厚させる壺の口縁部で、内面の肥厚面にヘラ描き山形文を施す。7は貝殻による無軸羽状文を施文した壺の胴部片である。8は胴部にヘラ



第48図 40・41号土坑出土土器実測図 (1/4)

による無軸羽状文・並行縦沈線・並行横沈線から成る文様帯を巡らす壺である。9はヘラによる有軸羽状文を巡らす。10は頸胴境に断面「M」字形に近い突帯を貼付し、その下に無軸羽状文を配置する壺である。

甕 (11-15) 11は直口縁の端部からやや下がった位置に刻目のない三角突帯を貼付するもので、内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、突帯以下は縦ハケ調整を行う。12は直立する口縁部外端部に接して、刻目突帯を貼付する甕で、内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。13は内湾する口縁端部からやや下がった位置に、刻目のない小さな三角突帯を貼付するもので、内面口縁部付近は横ヘラミガキ、胴部は不明、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。14は裾が開かず直立し、厚く平坦な底部から、直線的に開

く胴部へと続くもので、内面は縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。底径9.6cm。15は裾が大きく広がり、高く平坦な底部から、直線的に大きく広がる胴部へと続く。底径6.6cm。

鉢 (16) 16はやや上げ底の底部から大きく開き、湾曲して直立する口縁部へと至る鉢で、口縁端部に接して突帯を貼付する。口縁端部内面をナデて、突帯状につまみ出している。器表の調整は、口縁部内外面は横ナデ、内面胴部上半は横ヘラミガキ、下半は縦ヘラミガキ、外面胴部上半は横ヘラミガキ、下半は器表が風化しており調整不明である。内法口径21.8cm、底径6.0cm、器高16.3cm。

当土坑は弥生時代前期末～中期初頭に比定出来る。

42号土坑 (図版19-1、第49図)

調査区中央東寄りで見出した。43号土坑と重複しており、当土坑の方が新しい。平面プランは不整形で、長軸1.5m、短軸1.0mを測る。本来2基の遺構が重複していた可能性もあるが、調査時に確認出来なかったため、同一の遺構として扱っている。壁は東側はやや急角度で、西側は東側よりもやや緩やかに傾斜している。底面はほぼ水平で、確認面からの深さは20cmを測る。遺物は細片で、図示できるものはない。

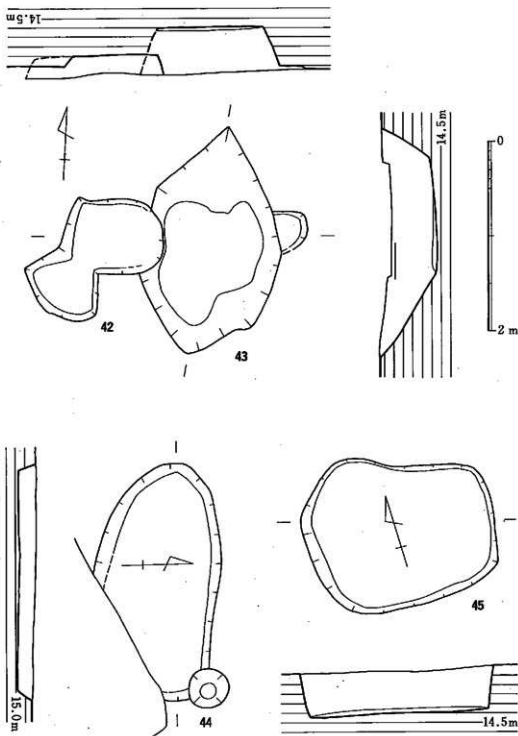
43号土坑 (図版19-1、第49図)

調査区中央東寄りで見出した。東側を42号土坑で消失するが、平面プランは長軸2.4m、短軸1.5mを測り、楕円形に近い不整形である。壁は南側が他と比較して若干緩やかな傾斜となる。底面は周囲から中央に向かって緩やかに傾斜する。確認面からの深さは中央付近が最も深く55cm、北側で50cm、南側で45cmを測る。底面から20cm程浮いた状態で、遺物が比較的まとまって出土している。

出土土器 (図版25、第50図)

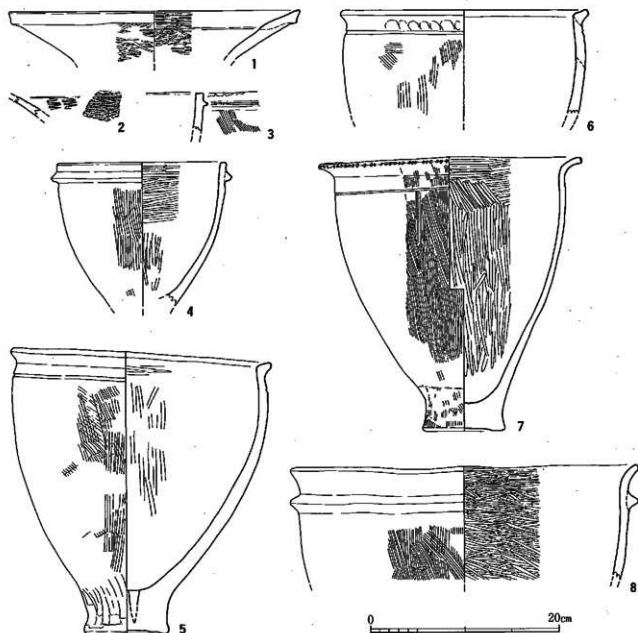
壺 (1・2) 1は大きく直線的に開く口縁部で、内面に段を巡らす。口縁端部を面取り成形する。口縁端部外面は横ナデ、それ以外は横ヘラミガキ調整を行う。口径30.6cm。2は1条沈線下にヘラによる無軸羽状文を配置する壺の肩部である。

甕 (3～8) 3は直口縁の口縁端部よりやや下がった位置に断面三角形の刻目突帯を貼り付けるもので、内面および外面口縁部は横ナデ、外面突帯部下は縦ハケ調整を行う。4は直立する口縁の端部よりやや下がった位置に断面三角形の無刻目突帯を貼付するもので、内面胴部下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径18.0cm。5はやや裾が広がる厚い底部から、ゆるやかに湾曲し、直立する口縁部へと続く。口縁端部に接して断面三角形の突帯をやや上向きに貼付する。口縁部下に1条の太い沈線を巡らす。底部の穿孔は貫通しない。穿孔途中で割れたのだろう。底径9.0cm、口径24.0cm、器高29.8cm。6は内湾する口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼付するもので、口縁部下に1条の太い沈線



第49図 42~45号土坑実測図 (1/40)

を巡らす。内面はナア、口縁部は横ナア、胴部はハケ調整を行う。口径26.2cm。7はやや裾が広がる厚い底部から直線的に伸びる胴下半部、わずかに内傾する胴部上半へと続き、長く湾曲する口縁部へと至る。口縁部下端に刻目を施し、口縁部下には1条の沈線を巡らす。内面胴部下半は縦ヘラミガキ、胴部上半は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナア、胴部外面は縦ハケ調整を行う。底径8.5cm、口径24.9cm、器高29.0cm。8は内湾気味にわずかに開く胴部から緩やかに外反する



第50図 43号土坑出土土器実測図 (1/40)

如意形口縁へと続くもので、鉢の可能性もある。口縁部下に三角突帯を貼り付ける。内面は横ヘラミガキ、口縁部から突帯付近までは横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。口径36.6cm。

出土遺物は弥生時代中期初頭のものである。

44号土坑 (第49図)

調査区中央南側で検出した。3号住居と重複し、南西側を消失する。平面プランは長軸2.5m、短軸1.3mの楕円形となる。壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ水平である。確認面からの深さは西側で20cm、東側で15cmを測る。

出土遺物は非常に少なく、細片ばかりで図示出来るものはない。

45号土坑 (図版19-2、第51図)

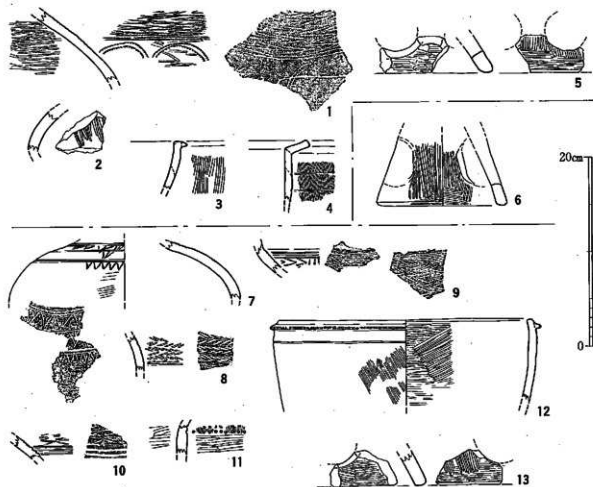
調査区東側で検出した。5号住居のはほぼ中央に位置し、この住居の中央土坑とも考えたが、断定し得なかったため、あえて別個の遺構として報告する。平面プランは長軸2.0m、短軸1.5mの不整長方形である。壁はかなり急な角度で傾斜する。底面は東から西へと緩やかに下降し、確認面からの深さは東側で45cm、西側で45cmを測る。

出土土器 (図版26、第51図)

壺(1・2) 1は貝殻による無軸羽状文・2条沈線・重弧文からなる文様帯を肩部に巡らすもの。2は反転して大きく開く壺の頸部に、黒色の彩文を描くもの。文様の内容は不明。

甕(3・4) 3は開きながら立ち上がる口縁端部外側に接して、小さな断面三角形突帯を貼り付けるもの。調整は、内面はナデ、口縁部は横ナデ、外面は縦ハケを行う。4は直立する胴部から、屈曲して直線的に伸びる口縁部に至るもので、屈曲部内面に稜をもち、口縁部下に2条の細く鋭い沈線を巡らす。内面はナデ、口縁部付近は横ナデ、外面は縦ハケ調整を行う。

台付鉢(5) 細片だが台付鉢の脚部であろう。3方に大きな円孔を穿孔する。脚は直線的に伸び、端部は丸く仕上げる。調整は内外面ヘラミガキを行う。



第51図 45~47号土坑出土土器実測図 (1/4)

当土坑出土遺物は弥生時代前期末～中期初頭のものである。

46号土坑（図版19-3、第52図）

調査区東側で検出した。5号住居、45号住居と重複しており、当土坑が最も古い。平面プランは長軸3.5m、短軸2.2mの不整楕円形である。西側がテラス状に浅くなる。また東側は他と比べてやや緩やかに傾斜している。底面は周囲から中央に向かって緩やかに下降する。確認面からの深さは、西側で30cm、中央付近で70cmを測る。

出土土器（図版26、第51図）

台付鉢（6） 裾が直線的に広がる脚部で、端部は平坦面をもつ。3方向に不整形の円孔を穿孔する。内外面ヘラミガキ調整を行う。

時期を比定し難い遺物しか出土していないので、判断しかねるが、弥生時代中期初頭のものか。

47号土坑（図版19-3、第52図）

調査区東側で検出した。5号住居、45号土坑と重複しており、当土坑が最も古い。平面プランは長軸2.2m、短軸2.0mで、不整形となる。壁はかなり急角度で傾斜している。底面は東側はほぼ水平だが、西側は若干中央に向かって傾斜している。確認面からの深さは、西側で40cm、東側で70cmを測る。

出土土器（図版26、第51図）

壺（7～10） 7～10は肩部に文様帯をもつものである。7は沈線間に山形文を配置する。8は1条沈線の上にヘラ描き無軸羽状文を配置する。9は3条沈線の下部に無軸羽状文を配し、3条の並行縦沈線で仕切る。10は幅広の沈線の上に貝殻による無軸羽状文を配置する。

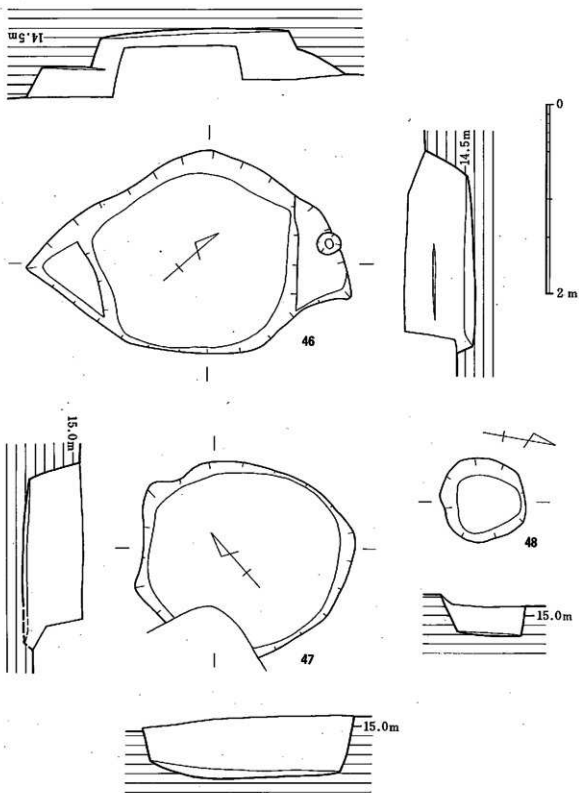
甕（11・12） 11は口縁部を欠くが、外面口縁部下に2条の竹管文を巡らすものである。内外面縦ハケ後に横ヘラミガキ調整を行う。12はやや内湾して直立する直口縁の甕で、端部外面からやや下がったところに刻目の小さな突帯を貼り付ける。また突帯のやや下方に1条の沈線を巡らす。調整は内面が横ヘラミガキ、外面口縁部から沈線付近までは横ナデ、胴部は縦ヘラミガキを行う。口径26.6cm。

台付鉢（13） 13は台付鉢の脚部で、3方に大きな円孔を穿孔するものであろう。脚は直線的に伸び、端部はやや丸い。内外面ヘラミガキ調整を行う。

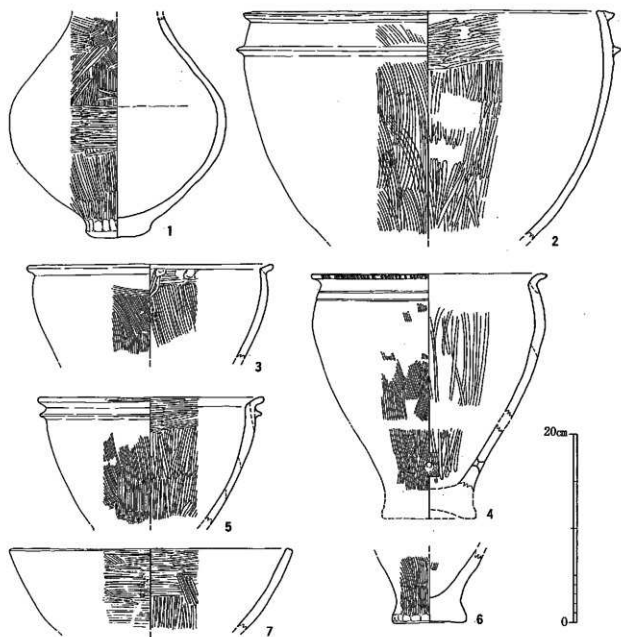
当土坑は弥生時代前期末に比定できる。

48号土坑（図版20、第52図）

調査区中央東寄りで検出した。5号住居と重複するが、当土坑の方が古い。平面プランは直径0.9mの不整形円形となる。壁は北側は急な角度で、南側はこれよりもやや緩やかに傾斜する。底



第52图 46-48号土坑实测图 (1/40)



第53図 48号土坑出土土器実測図 (1/4)

面は南側から北側へと緩やかに傾斜する。確認面からの深さは南側で25cm、北側で30cmを測る。
出土土器 (図版26、第53図)

壺 (1) 縦にやや長い球形胴の壺で、口縁部を欠く。小さく不安定な底部から、すばまり気味にたちあがり、胴部へと続く。肩部は直線的にすばまる。調整は、内面がナデ、外面底部付近が強い指ナデ、胴部下半が縦ヘラミガキ、胴部中央が横ヘラミガキ、肩部は縦ハケ後、粗い斜または横ヘラミガキを行う。底径6.9cm、胴径23.0cm。

甕 (2～6) 2は胴部が膨らみ、口縁部がやや内傾するもので、鉢に近い形となる。口縁端部に接した所およびやや下がった所に断面三角形の突帯を貼り付ける。調整は、胴部内面が縦ヘラミガキ、口縁部付近が横ヘラミガキ、外面が縦ハケ、突帯部が横ナデを行う。口径39.2cm。3

はやや開いた胴部から内湾する口縁部へと至るもので、口縁端部外面に接して断面「コ」字形に近い突帯を貼り付けるものである。胴部内面は縦ヘラミガキ、口縁部付近は横ヘラミガキ、胴部外面は縦ヘラミガキ、口縁部付近は横ハケ後横ナデ調整を行う。口径26.0cm。4はすはまった底部からやや開き、内湾して強く短く外反する口縁部へと至るもので、口縁端部に刻目、口縁部下に2条のヘラ描き沈線を巡らす。底部に近い胴部に円孔を1カ所穿孔する。胴部内面は粗い縦ヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径24.8cm。5は口縁部屈曲部に断面三角形の突帯を貼付するもので、内面ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。口径23.8cm。6は裾の開く厚い底部で、内面底部付近はナデ、胴部は縦ヘラミガキ、外面は指オサエ・縦ハケ調整を行う。底径7.6cm。

鉢(7) やや内湾しながら開く直口縁の鉢で、内面下半は縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキ、外面はハケ後横ヘラミガキ調整を行う。口径30.0cm。

当土坑は弥生時代前期末に比定出来る。

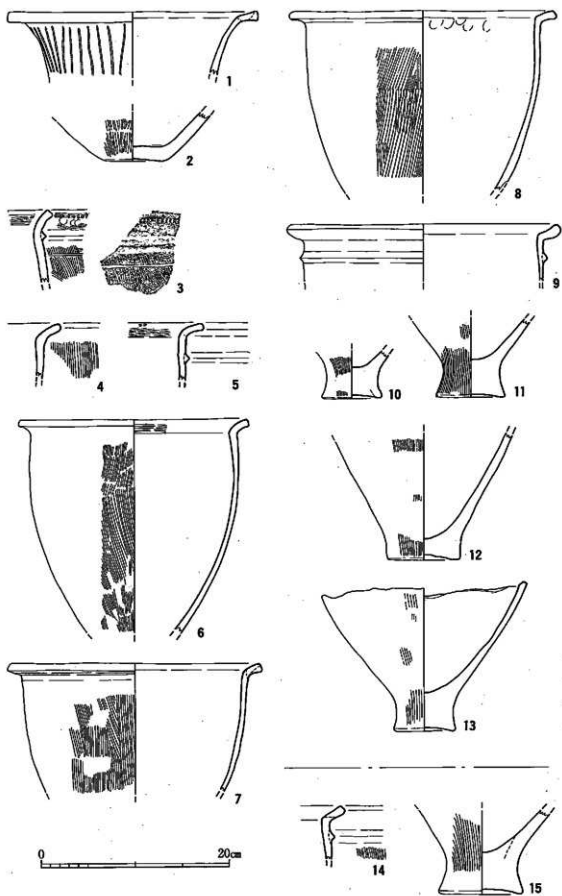
49号土坑(図版20・2・3、第54図)

調査区中央で検出した。平面プランは南北に長い長方形で、長軸3.8m、短軸1.7mを測る。壁はやや急な立ち上がりとなる。底面は南側はほぼ水平に、北側は中央に向かって緩やかに傾斜する。覆土は底面から約40cmまで炭化物を多量に含む。下層に黒色、上層に暗茶褐色の微砂が水平堆積する。遺物は主に中層、下層から出土している。いずれも投棄・破砕した状態で出土している。遺構確認面からの深さは、北側で35cm、南側で60cmを測る。

出土土器(図版26、第55図)

壺(1・2) 1は大きく外反する素口縁の壺で、端部を上方にわずかにつまみ上げる。頸部外面に縦線からなる暗文を入れる。口径26.6cm。2はわずかに上げ底となる小さな底部から直線的に開く胴部へと続く。底径6.9cm。

甕(3~13) 3は口縁部下端に刻目をいれる如意形口縁の甕で、湾曲部外面に三角形突帯を貼付し、その下に1条の沈線を巡らす。内面横ヘラミガキ、外面口縁部および突帯付近は横ナデ、それ以外はハケ調整を行う。4は如意形口縁の甕で、端部を丸くおさめる。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ調整を行う。5は直立する胴部から緩く屈曲する口縁部へと続くもので、屈曲部からやや下がった位置に断面三角突帯を貼付する。口縁部内面は横ハケ調整を行う。6は胴部上半がやや内傾するもので、屈曲部内面に稜をもつ。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケ、外面は横ナデ調整を行う。口径24.6cm。7はやや開き気味の胴部から外反する口縁部へと続くもので、端部は面取り成形を行う。内面はナデ、口縁部付近は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径27.0cm。8は直立する胴部上半から、水平に近く外反する口縁部へと至るもので、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径28.2cm。9は直立する胴部上半から、内面に稜をもって屈曲し、やや内湾気味に伸びる口縁部へと至る。



第55图 49·50号土坑出土土器实测图 (1/4)

屈曲部よりやや下に断面三角形突帯を貼付する。口径14.0cm。10・11は若干裾が広がり、わずかに上げ底となる厚い底部で、10は底径6.4cm、11は底径7.2cm。12はやや上げ底で裾の開かない底部から、直線的に伸びる胴部下半へと続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.6cm。13は裾の開く厚い底部から、内湾気味に伸びる胴部下半へと続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径6.4cm。

出土遺物は混入品と思われるものもあるが、おおよそ弥生時代中期前半に比定出来る。

50号土坑（第54図）

調査区中央で検出した。平面プランは、南北に長くやや不整な長方形で、長軸4.5m、短軸1.3mを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。底面北側はテラス状に高くなり、また中央では浅い落ち込みを検出している。遺物は底面直上または底面近くから出土しており、どれも投棄された状態である。遺構確認面からの深さは、北側のテラス部で40cm、中央の落ち込みで60cm、南側で50cmを測る。

出土土器（第55図）

甕（14・15） 14は内面に稜をもって屈曲し、口縁部が短く伸びるもので、屈曲部下に断面三角突帯を貼り付ける。15は裾が開く厚い底部で、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径9.0cm。

当土坑は弥生時代中期前半前後に比定出来る。

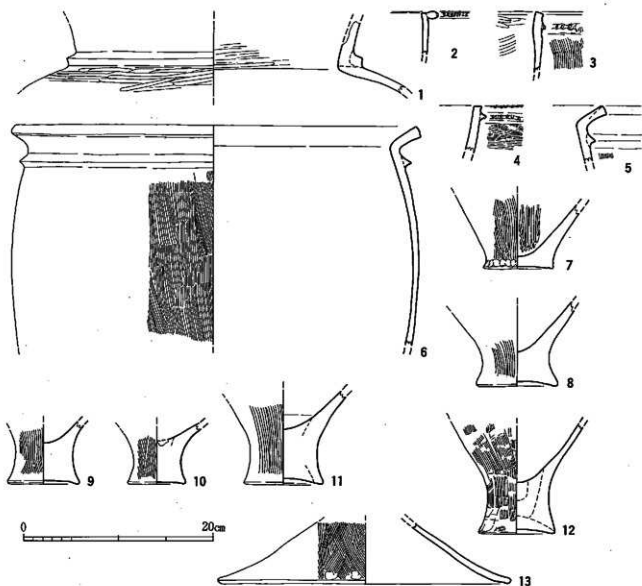
51号土坑（図版21、第54図）

調査区北端で検出した。北側は調査区外へと伸展する。平面プランは南北に長くやや不整な長方形で、長軸4.1m、短軸1.7mを測る。壁は急角度に傾斜する。底面はほぼ水平で、遺物は底面直上から10cm程上層までの間から出土しているが、どれも投棄された状態である。遺構確認面からの深さは50cmを測る。

出土土器（図版27、第56図）

壺（1） 肩が大きく張り、屈曲して、開く頸部へと続く大型のもので、屈曲部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面横ヘラミガキ調整を行う。

甕（2～12） 2は直立する口縁部の端部外面に接して刻目突帯を貼付する。3は直口縁の口縁端部からやや下がった位置に小さな刻目突帯を貼付する。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。4は直口縁の口縁外端部に小さな刻目を施し、そのやや下方に小さな刻目突帯を貼付するもので、内面ナデ、口縁部付近横ナデ、胴部外面横ハケ調整を行う。5は内傾する胴部上半から内面に稜をもって屈曲し、短く直線的に伸びる口縁部へと至るもので、屈曲部のやや下に断面三角形の突帯を貼付する。6は5とほぼ同形の口縁部となるもので、胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径43.2cm。7は指でつまみ出した裾部をもつもので、内面縦ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.6cm。8はやや上げ底



第56図 51号土坑出土土器実測図 (1/4)

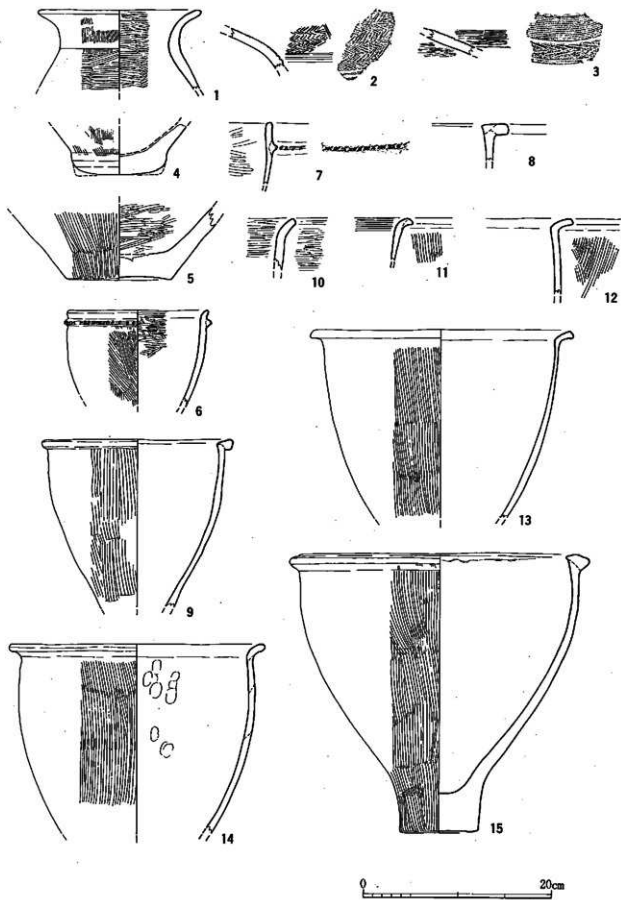
となる裾の開いた厚い底部から、緩やかに胴部下半へと移行する。底径8.7cm。9はやや上げ底となる裾の開いた高い底部のもので、底径7.8cm。10は裾の開く高い底部のもので、底径6.2cm。11はやや上げ底で裾がやや開く高い底部のもので、内面ナア、外面粗い縦ハケ調整を行う。底径8.2cm。12はやや上げ底で裾が開く高い底部のもので、底径8.0cm。

蓋 (13) 13は大きく裾が開く低平な甕用蓋で、内面はナア調整、外面はハケ目調整を斜格子状に行う。裾部外面に指痕が残る。裾径30.1cm。

出土遺物は混入品も認められるが、弥生時代中期前半～中葉のものである。

52号土坑 (図版21-3、第54図)

調査区南側で検出した。平面プランは東西に長い長方形で、長軸4.2m、短軸1.8mを測る。壁の立ち上がりは東側は垂直に近く、西側はそれよりもやや緩やかに傾斜する。遺物は割とまとまっ



第57图 52号土坑出土土器实测图 (1/4)

ているものの、底面からかなり浮いた状態での出土である。土坑埋没中に投棄されたものである。底面はほぼ水平に掘削され、遺構確認面からの深さは60cmを測る。

出土土器（図版27、第57回）

壺（1～5） 1は内傾する肩部から直立する頸部へと続き、口縁部が大きく外反するもので、頸部接合部外面に段をもつ。段はヘラ状工具で誇張されるものの、不明瞭である。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は縦ハケ後横ナデ、胴部外面は横ヘラミガキ調整を行う。口径17.2cm。2・3は壺の肩部片である。2は太い横沈線の上にヘラ描き無軸羽状文・並行縦沈線による仕切線を配置する。3は多条貝殻沈線の下部に、同じく貝殻による無軸羽状文を巡らす。4は壺の底部だが、磨石として転用したらしく、底端部がすり減っている。5はやや上げ底の底部端から直線的に開く胴部へと続くもので、内面横ヘラミガキ、外面縦ヘラミガキを行う。底径11.0cm。

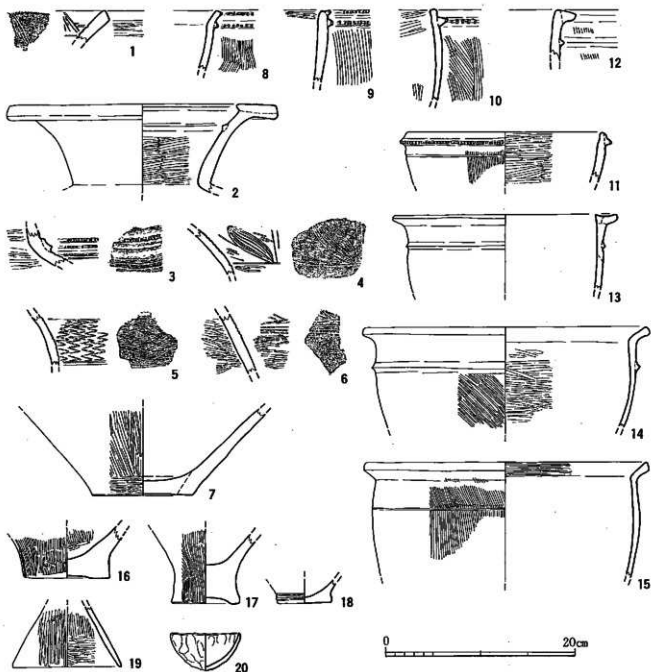
甕（6～15） 6は胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する小型の甕で、口縁部よりやや下がったところに刻目突帯を貼付する。刻目はハケ状工具でややまばらに施される。内面胴部下半はナデ、胴部上半は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦・斜ハケ調整を行う。突帯よりやや下方に、刻目を施した際の工具痕が列点状に残る。口径14.6cm。7は直立する口縁の端部を丸くおさめるもので、口縁部端部からかなり下がった位置に刻目突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、口縁部外面は横ナデ、胴部外面はナデ調整を行う。8は口縁部部に断面「コ」字形突帯を貼付するもの。9は直線的に立ち上がる胴部下半から直立する胴部上半へと続くもので、口縁部部に丸い粘土紐を貼付する。内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、外面は縦ハケ調整を行う。口径20.2cm。10は口縁部をわずかに外反させるもので、内外面横ヘラミガキ。11は口縁部を緩く短く外反させるもので、端部は面取り成形を行う。口縁部内面は横ハケ調整を行う。12は直立する胴部から、強く短く外反するもので、口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。13は直立気味の胴部上半から、強く短く外反する口縁部へと続くもので、端部を強くナデで面取り調整を行う。胴部内面ナデ、外面縦ハケ、口縁部横ナデ調整を行う。口径27.8cm。14はほぼ直立する胴部上半から、強く短く外反する口縁部へと至るもので、胴部内面はナデ、外面は縦ハケ、口縁部は横ナデ調整を行う。胴部内面に指圧痕が多く認められる。断面観察では、粘土帯は内傾に接合する。口径27cm。

15は円筒形の厚い底部から、大きく開き、直立気味に立ち上がる口縁部へと至るもので、鉢に近い器形となる。口縁部外面に断面三角突帯を貼付する。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ、口縁部内外面は横ナデ調整を行う。口径33.2cm、底径8.2cm、器高29.5cm。

当土坑の時期は弥生時代中期初頭に比定出来よう。

ビット出土土器（図版27、第58回）

壺（1～7） 1は口縁部内面に貝殻描き横沈線・複線山形文を巡らすもの。2は鋤先形口縁のもので、上面はほぼ水平に伸びる。口縁部内面に断面三角形の突帯を貼付する。頸部内面は横



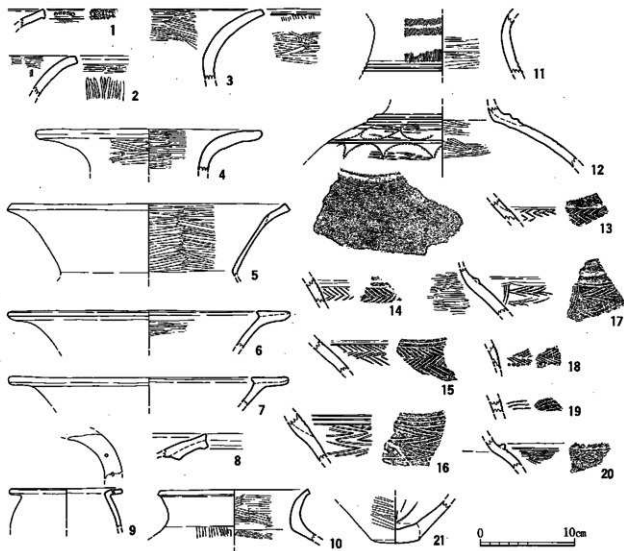
第58図 B地区ビット出土土器実測図 (1/4)

ヘラミガキ、口縁部は横ナデ調整を行う。頸部外面は器表が風化しており調整不明。内法口径20.0cm。3は肩頸境に断面「M」字形の刻目突帯を貼付し、その下に貝殻描き沈線を巡らすもの。4は肩部に貝殻描き無軸木葉文を施文するもの。5はヘラ描き無軸羽状文を巡らすもの。6は貝殻描き横沈線・無軸羽状文を巡らすもの。7は平坦な底部から、直線的に開いて胴部下半へと移行するもので、内面ナデ、胴部外面縦ヘラミガキ、底部外面横ヘラミガキ調整を行う。底径10.6cm。

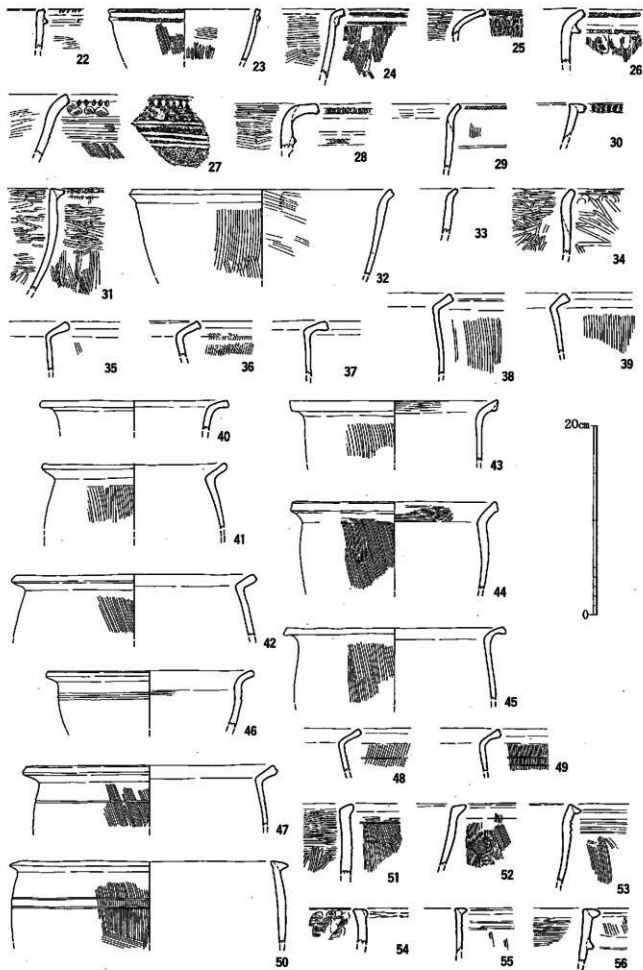
甕(8~18) 8はやや外反する口縁部の外端部に刻目を施し、その下に刻目突帯を貼付するもの。9は口縁外端部およびその下に刻目突帯を貼付するもの。10は直口縁の端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付するもの。同部内面は縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、口縁

部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。11は口縁端部に接して刻目突帯を貼付し、その下に沈線を巡らす。刻目は小さく密に施される。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部縦ハケ調整を行う。口径22cm。12は口縁端部に接して断面三角形の大きな突帯を貼付し、そのやや下に小さな三角突帯を貼付するもの。13は直立する胴部から、鑷先形に近い口縁部へと続くもので、口縁部下に断面三角形の突帯を貼付する。14は内面に不明瞭な稜をもって屈曲し、短く伸びる口縁部へと至るもの。胴部上半に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内面横ヘラミガキ、口縁部横ナデ、胴部外面斜ヘラミガキ調整を行う。口径30.2cm。15は口縁端部をナデで下端を拡張気味に仕上げたもので、胴部上半に1条のヘラ描き沈線を巡らす。胴部内面ナデ、口縁部内面横ハケ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径29.4cm。16はわずかに上げ底となる底部で、直立気味に立ち上がり、胴部へと緩やかに続く。内面ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。底径9.0cm。17は裾が開き、やや上げ底となる高い底部で、底径7.2cm。18は底部外面に3条の沈線を巡らすもので、壺の可能性もある。底径5.6cm。

高坏 (19) 19は高坏の脚部か。内外面ヘラミガキ調整を行う。裾径11.4cm。



第59図 B地区包含層出土土器実測図① (1/4)



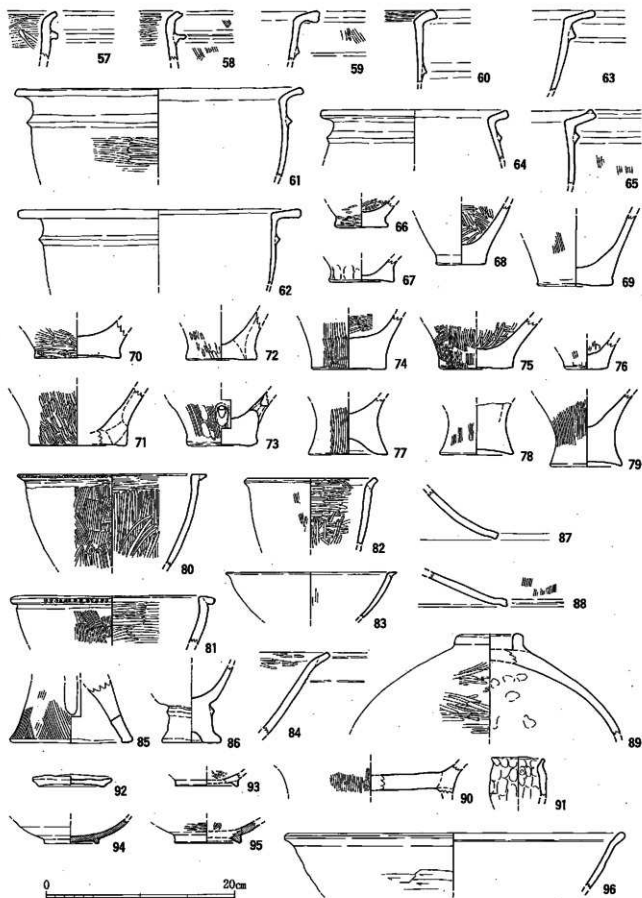
第60图 B地区包含层出土土器实测图② (1/4)

ミニチュア椀 (20) 20はミニチュア椀で、指ナデ・指オサエで成形する。口径7.4cm。

包含層出土土器 (図版27、第59～61図)

壺 (1～21) 1は大きく開く口縁部の端部に竹管文を巡らす。2～4は外反しながら大きく開くもので、4は口径23.8cm。5はやや外反しながら開くもので、端部を強くナデで面取り成形する。内面横ヘラミガキ、外面横ナデ調整を行う。口径29.0cm。6・7はほぼ水平に伸びる鋤先形口縁のもの。8は外端部に粘土を貼付して肥厚させるもの。9は内傾する胴部から、強く屈曲して水平に伸びる口縁部へと続くもので、口縁部上面に2個1対となる円孔を穿孔するものであろう。10は外反しながら上に伸びる口縁部となるもので、口縁部内面横ハケ、外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径15.6cm。11は直立気味に立ち上がる頸部で、肩頸境に数条の沈線を巡らすもの。12は肩頸境に2条の断面三角形突帯を貼付し、肩部にヘラ描き沈線・貝殻綫押捺による円弧文から成る文様帯を巡らすもの。13～16は沈線・無軸羽状文で構成される文様帯を肩部に巡らすもので、13・14は貝殻描きである。17は肩頸境に断面三角形の突帯を貼付し、その下に貝殻描き無軸羽状文・平行縦沈線から成る文様帯を巡らすもの。18は無軸羽状文の下に竹管文を巡らす。19は貝殻描き木葉文か。20は肩頸境に断面三角形突帯を貼付し、その下に重弧文を組み合わせた文様帯を巡らす。21は尖底に近い不安定な底部となるもの。

甕 (22～79) 22は直口縁の外端部に刻目を施し、その下に突帯を貼付するもの。23は直口縁の外端部に刻目を施し、その下に刻目突帯を貼付する。24は如意形の口縁部下端に刻目を施し、その直下に刻目突帯を貼付するもの。25は大きく外反する口縁部の下端に刻目を施すもので、或いは壺の口縁部の可能性もある。26は如意形口縁の下端に刻目を施し、その下に断面三角形の刻目突帯を貼付する。27は緩く外反する口縁部の下端にハケ状工具による刻目を施し、その下に5条の太い沈線を巡らす。28は水平近く外反するもので、口縁部下端に刻目を施し、口縁部下に刻目突帯を貼付する。29は緩く外反する口縁部の外端部に小さな刻目を施し、口縁部のやや下方に1条の沈線を巡らす。30は口縁端部に接して断面「コ」字形の刻目突帯を貼付する。刻目はハケ状工具で施文される。31は直立する口縁部の外端部に断面三角形の刻目突帯を貼付するもの。32～34は緩く外反する口縁部のもので、34は内外面ヘラミガキ調整を行う。35～42はやや内傾する胴部から、緩やかに屈曲して、短く開く口縁部へと至るもの。胴部内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。43～45は口縁部下端を強くナデで引き出した状態にするもので、43・44は口縁部内面横ハケ調整を行う。46は強く外反する如意形口縁のもので、胴部上半に2条の沈線を巡らす。47～49は内傾する胴部から、内面に不明瞭な稜をもって屈曲し、上方外へと直線的に伸びるもので、胴部上半に1条または2条の沈線を巡らす。50～56は口縁部外端面に接して断面三角形の突帯を貼付するもので、口縁部下に沈線や突帯を巡らすものもある。57・58は如意形口縁の下方に断面三角形に近い突帯を貼付するもの。59～65は胴部から内面に稜をもって屈曲し、大きく開く口縁部へと至るもので、胴部上半に突帯を貼付する。65は跳ね上げ口縁とする。66～76



第61图 B地区包含层出土土器实测图③ (1/4)

はあまり裾の開かないもの。73は胴部下半に穿孔を行う。77～79は裾が開く高い底部のもので、やや上げ底となる。

鉢 (80・84) 80・81は口縁端部に接して断面三角形の刻目突帯を貼付するもの。82は如意形口縁のもので、小型甕の可能性もある。83は体部が大きく開き、口縁端部に接して断面三角形の小さな突帯を貼付するもの。84は大きく長く開くもので、口縁部下に1条の沈線を巡らす。

台付鉢 (85・86) 85は直線的に開く裾部に楕円形に近い透かし孔を4カ所に穿孔するもので、外面は斜格子文状にハケ調整を行う。裾部接地面は平坦に仕上げる。86は柱状の柱部から、短く開く裾部へと続く。坯脚接合部に断面三角形の突帯を貼付する。

蓋 (87～89) 87・88は大きく開く甕用蓋。89は類例を知らず器形は不明だが、一応蓋としておく。

不明製品 (90) どのような器形となるのか不明。何かの底部か。

ミニチュア製品 (91) 形態は甕に近い。全面指オサエ調整。

土師器皿 (92) 底径7.0cm。

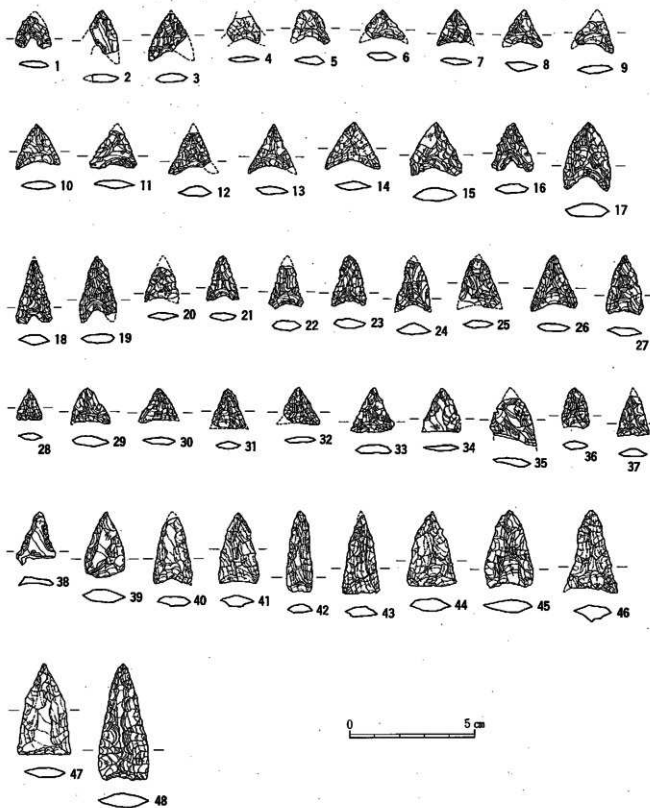
土師器椀 (93) 底部に低い高台を貼り付ける。高台径6.6cm。

瓦器椀 (94・95) 低い高台部から、大きく開く体部へと続く。95は内面に炭素を吸着させ、黒色に仕上げる。

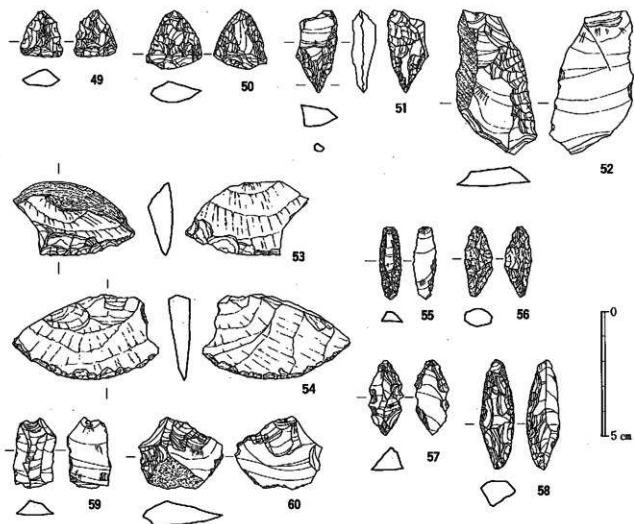
土師質土鍋 (96) 直線的に開くもの。内面ナデ、口縁部横ナデ、外面横ヘラケズリ調整を行う。口径46.0cm。

B地区出土石器 (図版28～31、第62～66図)

打製石鏃 (1～48) 1～3は凹基式のもので、正三角形に近い。2は主刺離面を残す。いずれも姫島産黒曜石製。4～9は小型のもので、正三角形に近く、基部の挟りが浅い。4～6・9はサヌカイト製、7・8は姫島産黒曜石製である。いずれも粗い剥離で、特に5は先端が丸く、或いは未製品かもしれない。6はやや横長である。10～15は中型のもので、正三角形に近い凹基式のものだが、基部の挟りは浅い。10・14はサヌカイト製、11は腰岳産黒曜石製、それ以外は姫島産黒曜石製である。11は主刺離面を残す。16～19はやや縦に長い凹基式三角形鏃である。17は腰岳産黒曜石製、他は姫島産黒曜石製である。いずれも他と比較して、丁寧な剥離調整を行う。20～27はやや縦長の三角形鏃で、基部の挟りは浅い。20はサヌカイト製、他は姫島産黒曜石製である。21～24は、大きさ、形状とも非常に似ている。28は非常に小型のもので、正三角形に近い平基式三角鏃である。姫島産黒曜石製。29～35は正三角形に近い平基式三角鏃である。33・35は腰岳産黒曜石製、他は姫島産黒曜石製である。いずれも粗い剥離調整を行っており、特に34・35は主刺離面を大きく残す。36～38はやや縦長の平基式三角形鏃で、姫島産黒曜石製である。38は未製品の可能性もある。39は円基式三角鏃で、縦にやや長い。主刺離面を残す。40～48はやや大型のもので、45・48は姫島産黒曜石製、他はサヌカイト製である。他の石鏃に使用される石材と比較して、



第62图 B地区出土石器实测图①(2/3)



第63図 B地区出土石器実測図②(2/3)

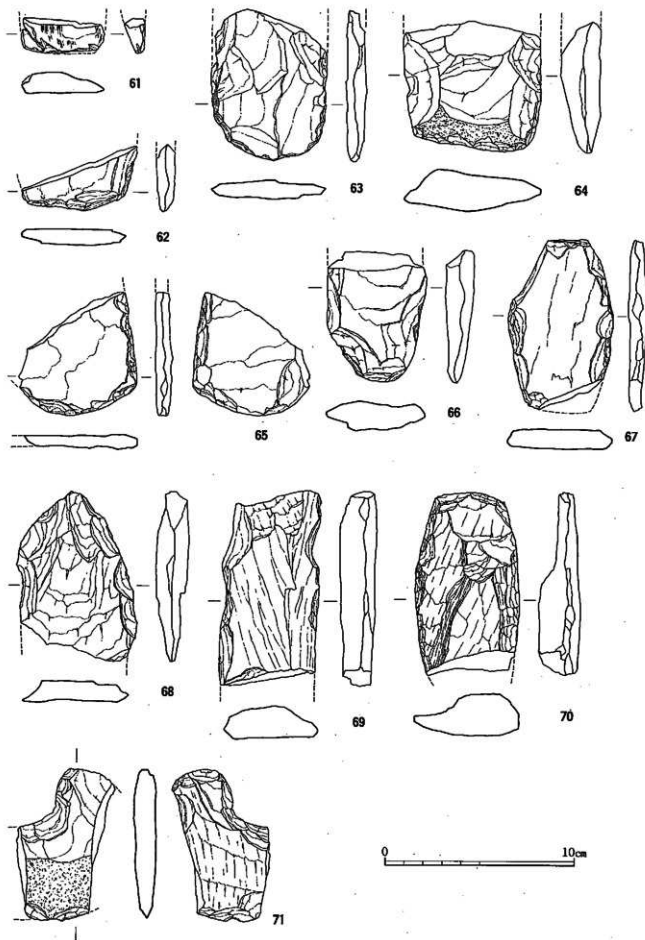
大型に属する石鏃のサヌカイト使用頻度の高さは特徴的である。いずれも縦長の三角形で、特に42は細長である。47は五角形に近い。48は当遺跡中最大で、長さ4.6cm。

尖頭器状石器 (49・50) 石鏃とは形態的に差があることから、一応分離している。どちらも非常に身の厚いものである。49は正三角形に近く、端部は鈍く調整される。50も49とはほぼ同形だが、基部がやや異なる。49・50とも姫島産黒曜石製。

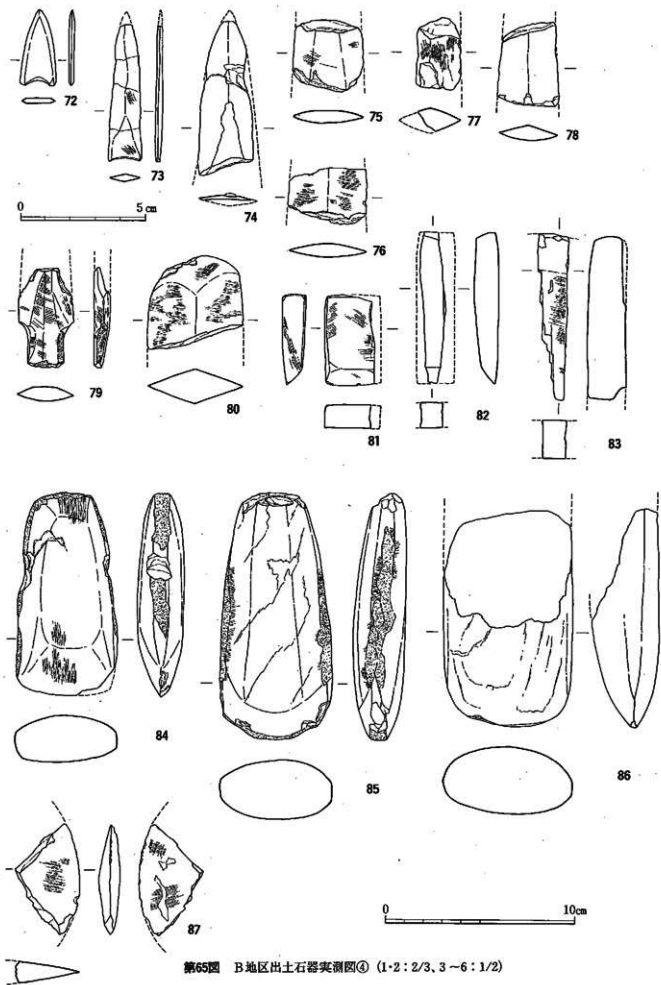
石鏃 (51) 厚みのある縦長剥片の両側縁に調整を加えている。姫島産黒曜石製。

スクレイパー (52-54) 52は縦長剥片の片側縁に剝離調整を加えたもので、姫島産黒曜石製。53は横長剥片の下辺部のみ調整を加えたもので、片岩質頁岩製。54は横長剥片の下辺部を両面剝離調整し、バルブカットを行う。変岩質頁岩製。

用途不明石製品 (55-58) 55は縦長剥片の表面両側縁に調整を施したもので、姫島産黒曜石製。56・57は石鏃の可能性もある。56はサヌカイト製。先端は鈍い。57は側縁のみ調整を加えたもので、先端は鈍い。姫島産黒曜石製。58は一見ナイフ型石器だが、両側縁に階段状剝離を行う。一部に風化した剝離面が見られ、2次加工品の可能性もある。姫島産黒曜石製。



第64图 B地区出土石器实测图③ (1/2)



第65图 B地区出土石器实测图④ (1-2:2/3, 3-6:1/2)

使用痕ある剥片(59・60) 59は縦長剥片の両側縁に使用痕が認められる。姫烏産黒曜石製。60は横長剥片の下辺部に使用痕が認められる。姫烏産黒曜石製。

打製石斧(61~71) 61は刃部が磨耗しており、また表面に擦痕が著しい。粘板岩製。62は縁辺に粗い調整を行ったもので、片岩製。63は薄く粗割りした後側縁に剝離調整を加えたもので、刃部がやや磨耗する。片岩製。64は折損後再加工したもので、刃部は全体的に磨耗する。安山岩製。65は扁平な自然石の側縁を加工したもので、刃部はやや磨耗する。片岩製。66は側縁を粗く調整したもので、やや厚みがある。片岩製。67は刃部より基部の幅を狭くする。安山岩製。68は側縁に粗い調整を行ったもので、基部が尖る。片岩製。69は肉厚の石材の側縁に粗い調整を加えたもので、基部の両端が磨耗する。黒色千枚岩製。70は側縁を丁寧に加工したもので、片岩製。71は旧形状を推測し難いものだが、基部を深く抉り、刃部加工を行っている。広く自然面を残す。安山岩質。

磨製石鏃(72・73) 72は側縁のみを鋭く研磨し、基部を丸く抉ったもので、非常に丁寧に作る。緑泥片岩製。73は断面が扁平な菱形のもので、基部はわずかに湾曲する程度のもので、非常に雑な作りで、全体的に歪つてである。研磨時の擦痕が残る。頁岩製。

磨製石剣(74~79) 74は非常に風化が進んでおり、節理に沿って剝離する。頁岩質。75は縞の不明瞭なもので、研磨時の擦痕がわずかに認められる。頁岩製。76はやや不明瞭な縞がある。刃部は鋭く研ぎ出され、表面に研磨時の擦痕が明瞭である。頁岩製。77はかなり身の厚いもので、刃部は鋭く研ぎ出される。刃部には刃こぼれが認められる。頁岩製。78は風化が著しいもので、片面のみ縞が認められる。頁岩製。79は折損後、再加工したもので、左右非対称である。表面に研磨痕が明瞭に残る。粘板岩製。

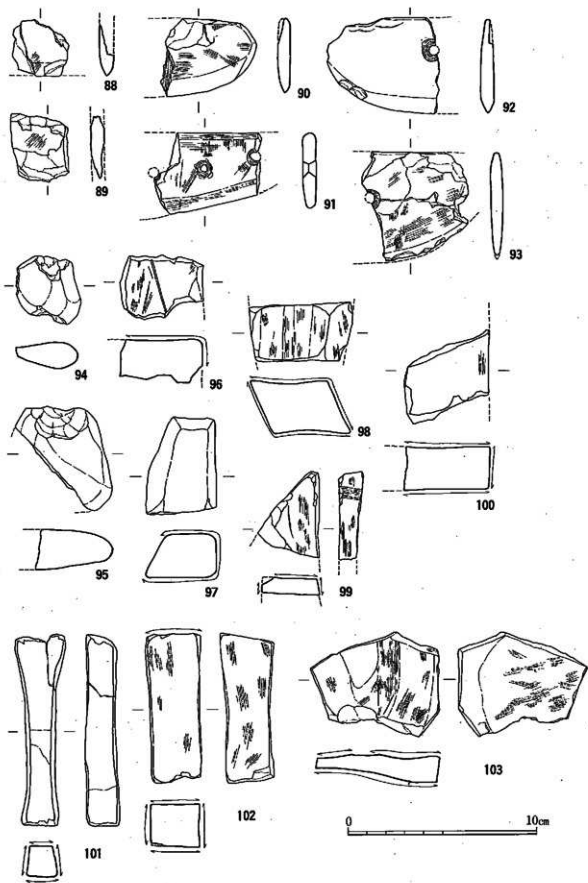
磨製石戈(80) 折損後研ぎ直したもので、先端は丸くなる。刃部は鋭く研磨され、研磨痕が明瞭に認められる。一応石戈として図示したが、石剣の可能性もある。頁岩製。

扁平片刃石斧(81) 刃部は鋭く研がれるが、一部刃こぼれが認められる。表面に研磨時の擦痕が多く認められる。粘板岩製。

柱状片刃石斧(82・83) 82は刃部を鋭く研ぎ出している。節理に沿って剝離するため、幅は不明。粘板岩製。83は風化・剝離が著しく、全体の形状は不明。粘板岩製。

磨製石斧(84~86) 84は刃部より基部が狭くなるもので、裏面をやや平坦にしており、両刃に近い片刃である。丁寧に研磨成形を行う。側面には細かい研磨を加えず、粗いままである。中央よりやや上に、緊縛のための抉りを両側面に施している。刃部は鋭く作られ、端部は片側のみ欠損する。表面に使用時の擦痕が明瞭に確認される。蛇文岩製。85は84同様基部が刃部よりも狭くなるもので、裏面を平坦にしており、両刃に近い片刃となる。丁寧に研磨成形しているが、両側縁は粗い研磨を施したのみで、研磨時の擦痕が明瞭に残る。刃部は著しくつぶれており、使用剝離も認められる。蛇文岩製。

86は大型のもので、断面楕円形だが、裏面はやや平坦であり、両刃に近い片刃である。全体的に



第66图 B地区出土石器实测图⑤(2/1)

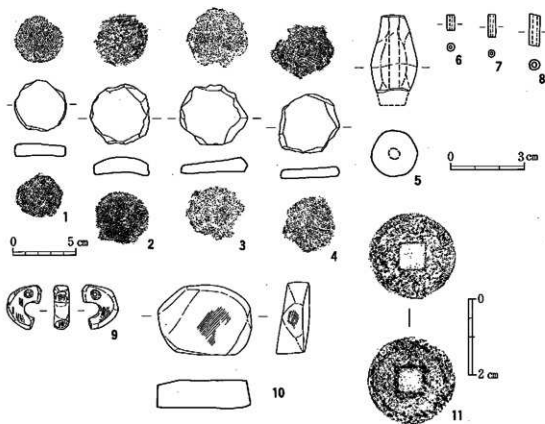
丁寧に研磨成形を行い、光沢を放つ。刃部はつぶれている。ハンレイ岩製。

環状石斧 (87) 細片なので断定は出来ないが、一応環状石斧として報告する。両面とも非常に丁寧に研磨され、刃部は鋭く作られるが、一部刃こぼれが認められる。表面に無数の擦痕が観察されるが、これは使用時のものであろう。復原径12.2cmで、頁岩製。

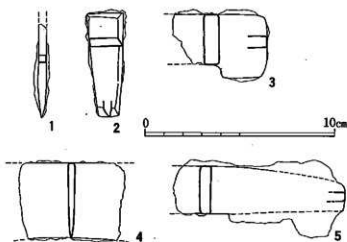
磨製石包丁 (88-93) 88は身がやや厚いもので、刃部は鋭い。凝灰岩製。89は細片のため詳細不明。90は刃部を鋭く研がれる。粘板岩製。91は折損後再加工したもので、3カ所に穿孔がある。中央の孔には紐擦れ痕が認められる。背部は丸く作られ、刃部は磨滅して丸くなっている。表面には無数の擦痕が残る。輝緑凝灰岩製。92は刃部側が背部側よりも厚く作られる。風化が著しく進んでいる。粘板岩製。93は背部を丸く作る。表面に擦痕が無数に認められる。粘板岩製。

石錘 (94・95) 94は3カ所に調整を加えたもの。95は欠損しており、全体の形状は不明。端部に打撃調整を加えたもの。

砥石 (96-103) 96はやや大きな擦痕が観察される。目の細かい凝灰岩質砂岩。97は頁岩質のもので、3面使用すが、あまり使い込んではいない。98は砂岩のもので、4面使用しているが、非常によく使い込まれている。99は粘板岩質のもので、3面使用しており、特に擦痕が目立つ。棒状のものを研磨した痕跡も見られる。100は凝灰岩質砂岩のもので、やや目が粗い。3面使用。101は片岩質のもので、4面使用。非常によく使用しているが、中央付近は手で持っていた部分らしく、やや膨らんでいる。102は砂岩のもので、5面使用している。擦痕が非常に多く認めら



第67図 B地区出土土製品・石製品・古銭実測図 (1~4: 1/3, 5~10: 2/3, 11: 1/1)



第68図 B地区出土鉄器実測図 (1/2)

坑出土。3は14号土坑出土。4は19号土坑出土。

土鏟 (5) 中央がかなり膨らむもので、一部欠失する。表面は指ナデを行う。44号土坑出土。

管玉 (6~8) いずれも碧玉製のもので、表面に稜が無く非常に丁寧に研磨される。6は52号土坑出土。7はピット出土。8は5号住居出土。

勾玉 (9) 滑石製のもので、やや雑な感じを受ける。孔は両側穿孔である。包含層出土。

不明石製品 (10) 表面を研磨して円盤状に仕上げる。包含層出土。

古銭 (11) 拓影からは観察できないが、寛永通宝の「寛」が肉眼でかすかに観察される。包含層上面出土。

B地区出土鉄器 (図版32、第68図)

鉄釘 (1) 上半が欠失するが、恐らく鉄釘であろう。断面正方形。残存部長4.9cm。包含層出土。

楔 (2) 逆台形のもので、先端を尖り気味にする。断面はやや歪つである。長さ5.7cm。包含層出土。

不明鉄製品 (3~5) 3は棍棒状のものものの柄部か。現存長5.0cm。3号堅穴出土。4はかなり薄いもので、刃部はわずかに内湾する。大型の鎌状のものか。現存長5.6cm、幅4.0cm。36号土坑からの出土だが、錆着の様子等から判断すると、混入品の可能性が高い。5は刀状のものものの柄部かとも考えたが、身がかなり厚い。現存長9.1cm、幅2.5cm。ピット出土。

3 C地区の遺構と遺物

当遺跡の東端に位置する。県道拡幅部を調査対象地とした。調査面積

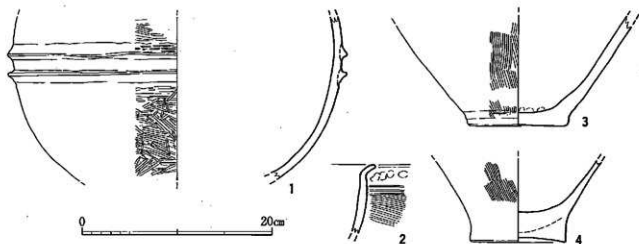
れる。103は粘板岩質のもので、99と石質が近似しており、同一個体の可能性もある。2面使用しており、非常によく使用している。

B地区出土土製品・石製品・古銭 (図版32、第67図)

土器片円盤 (1~4) 1は側縁を打ち欠いた後、研磨している。52号土坑出土。2~4は側縁を打ち欠いて円盤状にしたもの。2は5号土



第69図 C地区遺構配置図 (1/100)



第70図 C地区出土土器実測図 (1/4)

は約24㎡である。標高は南が14.5m、南側が14.5mで、ほぼ平坦である。調査区中央から北側にかけて、黒灰色微砂層の浅い落ち込みが確認されたが、遺物は認められなかった。また、北端で焼土・炭の混じった土坑状の落ち込みを検出したが、性格等は不明。これら以外には何も検出されなかった。

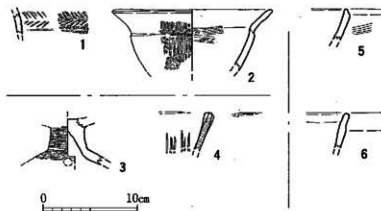
遺物は北端の落ち込みから若干出土している。

出土土器 (図版33-2、第70図)

壺(1) 1は球形に近い胴部のもので、最大径に当たる位置に断面三角形の突帯を2条貼付する。外面は横ヘラミガキ調整を行う。内面は磨滅が著しく調整不明。

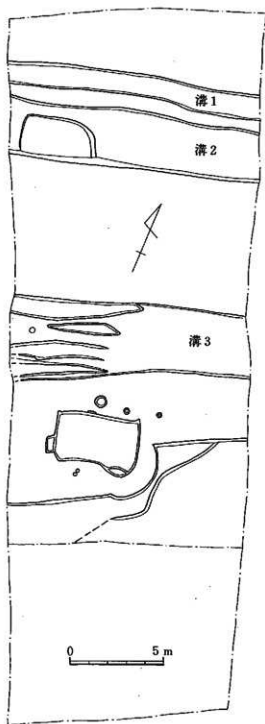
甕(2-4) 2は短く外反する如意形口縁のもので、口縁部下に3条の沈線を巡らす。内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部横ハケ調整を行う。3は薄く平坦な底部から、やや湾曲して、直線的に開く胴部へと緩やかに続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径10.5cm。4はわずかに上げ底となる厚い底部から、直立気味に立ち上がり、胴部へと緩やかに続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径10.0cm。

4 E地区の遺構と遺物



第71図 E地区出土土器実測図 (1/4)

当遺跡の北側に位置する。県道と村道との接続拡張部を調査対象地とした。調査面積は約124㎡。標高は北側で14.4m、南側で14.0m前後で、北から南へわずかに傾斜している。東西に伸びる溝状遺構・ピットを検出している。



第72図 E地区遺構配置図 (1/200)

1号溝状遺構 (図版33-3)

調査区北側で検出した。東西調査区外へと続くものである。幅は東側で0.65m、中央で0.6m、西側で0.6mを測り、ほぼ同幅となる。確認面からの深さは、東側で10cm、中央で13cm、西側で9cmを測り、中央がやや低くなる。

遺物は全く出土していない。

2号溝状遺構 (図版33-3)

調査区北側で検出した。東西調査区外へと続くものである。西側に土坑状の窪みがある。幅は東側で1.3m、中央で1.55m、西側で1.5mを測り、東側がやや狭くなる。確認面からの深さは、東側で15cm、中央で9cm、西側で15cm、窪み内で49cmを測り、中央がやや高くなる。

遺物はわずかに出土している。

出土土器 (第71図)

壺(1) 肩部に文様帯をもつもので、1条の沈線の上にヘラ描き無軸羽状文を配置する。

高坏(2) 内湾する深い坏部から、屈曲して上方へと直線的に伸びる口縁部へとつづく。坏部内面横ハケ後ナデ、口縁部内外面横ナデ、坏部外面縦ハケ調整を行う。口径16.4cm。

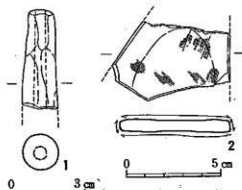
3号溝状遺構 (図版33-3)

調査区中央で検出した。東西調査区外へと続くものである。西側底面で、幅0.4~0.5mのさらに小さな溝状遺構を検出した。幅は東側で1.65m、中央で1.85m、西側で2.3mを測り、西側から東側へと狭くなる。確認面からの深さは、東側で11cm、中央で10cm、西側で16cm、西側の小溝内で25cmを測り、ほぼ水平である。

出土土器 (第71図)

高環 (3) 短い柱状の柱部から、大きく外反する裾部へと続くもので、裾部に円形透かし孔を穿孔する。細片であり、透かし孔の配置は不明。内面ナデ、外面横ヘラミガキ調整を行う。

瓦質擦り鉢 (4) 直線的に外傾するもので、内面ナデ後縦溝目をほどこす。



第73図 B地区出土土製品・石器実測図
(1:2/3, 2:1/2)

砥石 (2) 泥岩製の非常に扁平なもので、大半を欠失する。4面使用しており、仕上げ砥として使用されたものである。2号溝状遺構出土。

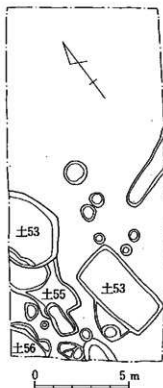
包含層出土土器 (第71図)

土師質土鍋 (5・6) 5は口縁端部を尖り気味に仕上げるもので、口縁部横ナデ、外面横ハケ調整を行う。6は端部を強くナデで丸くおさめるもので、内面および口縁部は横ナデ、外面はヘラケズリを行う。

E地区出土土製品・石製品 (図版33-4、第73図)

土鐘 (1) 1は管状土鐘で、全体の1/3程度欠失する。成形には指ナデを行っており、指圧痕が認められる。2号溝状遺構出土。

5 F地区の遺構と遺物



第74図 F地区遺構配置図 (1/200)

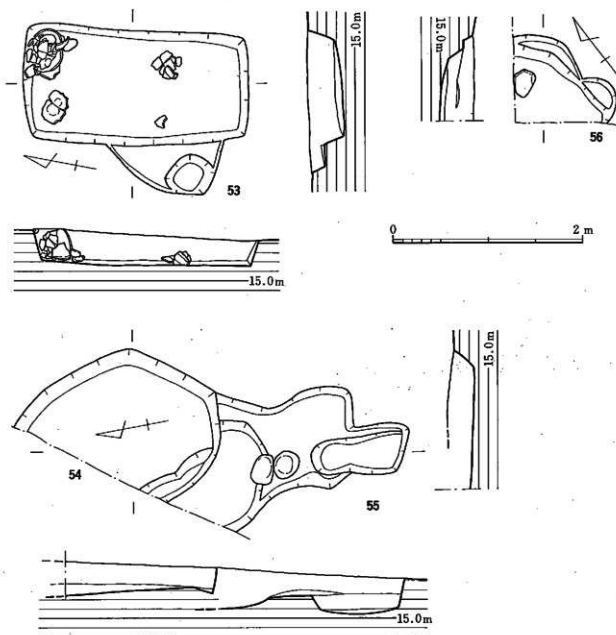
当遺跡の西側中央に位置する。現果道下において、ボックス設置により掘削を受ける範囲を調査対象地とした。調査面積は約38㎡。標高は北側で16.1m、南側で15.0mで、北から南に向けて若干傾斜している。調査区北側では遺構は確認されず、南側で土坑・ピットを検出している。

53号土坑 (図版35-1・2、第75図)

調査区南側で検出した。平面プランは長軸2.4m、短軸1.2mを測る、南北に長い長方形である。壁はやや急な角度で立ち上がり、底面は東から西へと緩やかに下降する。確認面から底面までの深さは、北側で32cm、中央で35cm、東側で30cm、西側で35cmを測る。遺物は北東隅および中央東寄りで比較的まとまって出土している。底面直上からの出土である。

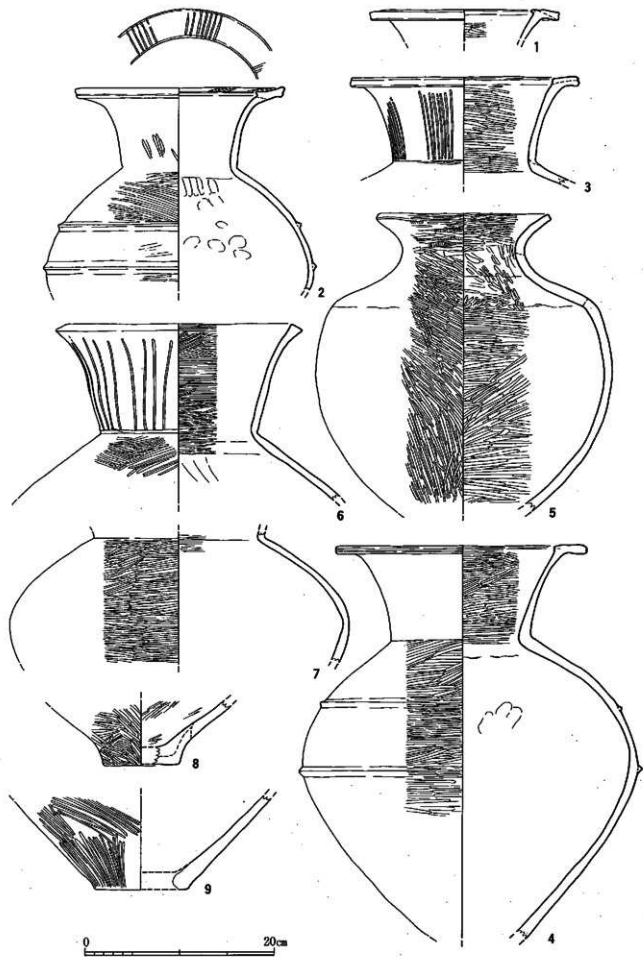
出土土器 (図版36、76・77図)

壺 (1-9) 1は外傾する鋤先形口縁のもので、内法口

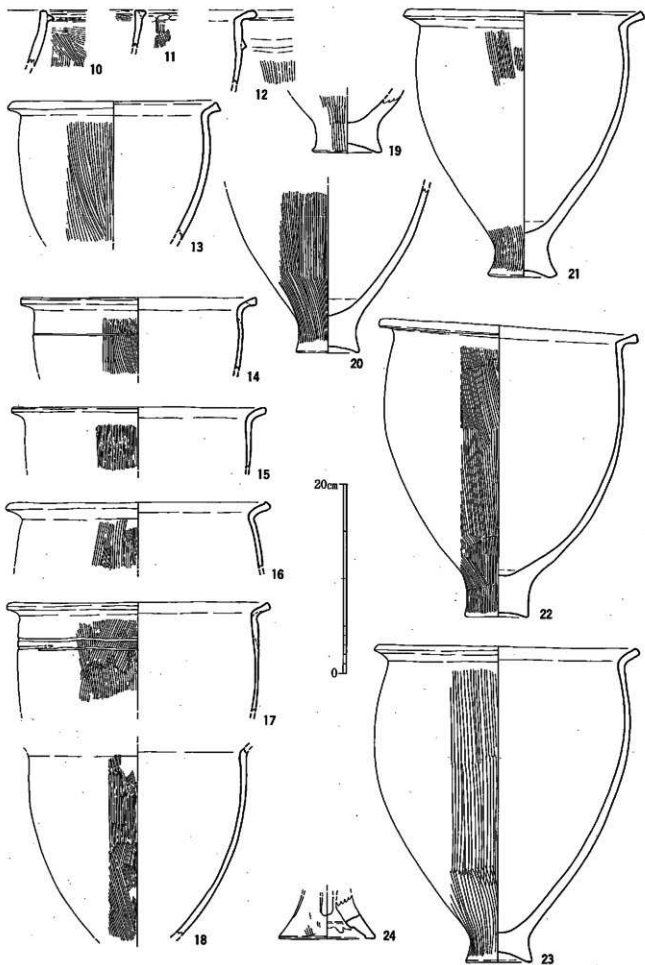


第75図 53~56号土坑実測図 (1/40)

径14.0cm。2は口縁部内面に粘土を幅広く貼付して肥厚させるもので、最大径が胴部中位にあり、頸部は強く締まり、外反して口縁部へと続く。肥厚部分は内傾し、上面にヘラ描き平行縦沈線を施す。胴部最大径に当たる位置および肩部に断面三角形の突帯を貼付する。胴部内面はナア、口縁部内外面は横ナア、頸部外面は縦ヘラミガキ、胴部は横ヘラミガキ調整を行う。頸部内面は風化が著しく調整不明。内法口径16.0cm。3は外反する頸部から、内面に粘土を貼付して肥厚させる口縁部へと続く。口縁端部はわずかに内傾する。頸部外面に8条を1単位とする縦方向の暗文を施す。内法口径18.6cm。4はやや外傾する鋤先形口縁となるもので、底部を欠失する。最大径は胴部中位にあり、強く締まり外反する頸部から口縁部へと至る。胴部最大径に当たる位置および肩部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は、胴部内面ナア、頸部内面横ヘラミガキ、口縁部



第76图 53号土坑出土土器实例四① (1/4)



第77图 53号土坑出土土器实例图② (1/4)

横ナデ、頸部外面ナデ、胴部横ヘラミガキを行う。口径18.8cm。5は球形に近く、肩の張った胴部から、強く外反する口縁部へと続くもので、内外面ヘラミガキ調整を行う。6は素口縁のもので、肩の張らない胴部から、屈曲して、直線的に開き口縁部へと至る。口縁端部を面取り成形し、外側につまみ出した状態に仕上げる。頸部に縦方向の暗文を施す。胴部内面はナデ、頸部内面は横ヘラミガキ、頸部外面はナデ、胴部外面は横・斜ヘラミガキ調整を行う。口径23.8cm。7は胴部片で、最大径が胴部中位になると思われる。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ調整を行う。8は直立気味に立ち上がる底部から、大きく開く胴部下半へと緩やかに移行するもので、内面一部横ヘラミガキ、外面ヘラミガキ調整を行う。底径8.0cm。9は底部から直線的に胴部へと移行するもので、内面ナデ、外面ヘラミガキ調整を行う。底径10.0cm。

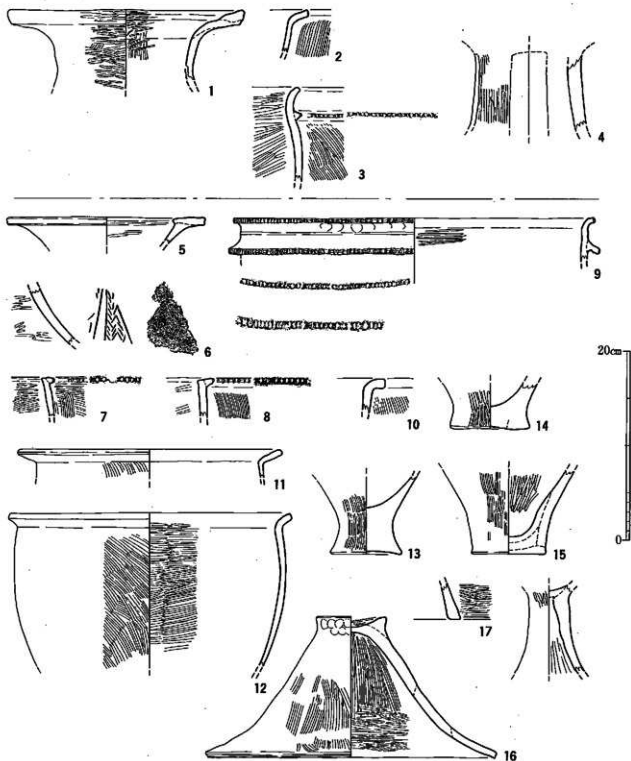
甕 (10~23) 10は直立する口縁部の端部からやや下がった位置に刻目突帯を貼付するもので、刻目は小さくまばらに施される。11は直立する口縁の端部に接して、断面三角形の突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。12は直立する胴部から短く伸びる口縁部へと続くもので、屈曲部内面に不明瞭な稜をもつ。口縁部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。13はやや内傾する胴部上半から短く伸びる口縁部へと続くもので、端部を跳ね上げ気味にする。胴部内面ナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径22.5cm。14は胴部上半に1条の沈線を巡らすもので、口縁端部を強くナデる。口径25.0cm。15は胴部から口縁部へと緩やかに屈曲するもので、口径27cm。16はやや内傾する胴部から短く開く口縁部へと続くもので、屈曲部内面に稜をもたず、また口縁端部を跳ね上げ気味にする。口径28.0cm。17は胴部上半に2条の沈線を巡らすもので、口縁部は短く開く。口径27.4cm。18は口縁部と胴部を欠く。胴部上半は直立する。内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。19はやや上げ底のもので、裾がわずかに開く。底径7.2cm。20は19とほぼ同形で、内湾しながら立ち上がる胴部へと緩やかに続く。底径6.6cm。21は引き締まった底部から、直線的に開く胴部下半、わずかに内傾する胴部上半から、内面に稜をもって屈曲し、直線的に上外方へと開く口縁部へと続く。底部はやや裾が開き、厚い上げ底となる。胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。底径7.6cm、口径24.6cm、器高28.1cm。22は直立するやや上げ底の底部から、やや下膨れの胴部下半、わずかに内傾する胴部上半へと続き、内面に稜をもって屈曲し、短く開く口縁部へと至る。口径29.0cm、底径6.8cm、器高31.5cm。23は上げ底でやや裾の開く底部から、やや締まって下膨れ気味となる胴部下半へと続き、やや内傾する胴部上半から強く外反して短く開く口縁部へと至る。口径28.0cm、底径6.6cm、器高33.5cm。

台付鉢 (24) 24は台付鉢の脚部か。緩やかに広がる裾部で、端部の接地面は平坦に仕上げる。楕円形になるとと思われる透かし孔を4方向に穿孔する。裾形10.0cm。

当土坑は弥生時代中期前半に比定出来る。

54号土坑 (図版35-3、第75図)

調査区西側で検出した。55号土坑と重複するが、当土坑の方が新しい。西側が調査区外へと伸展するが、平面プランは長軸2.5m、短軸1.7m程度の楕円形になるだろう。壁はやや急な角度で傾斜する。底面は南から北へと緩やかに下降し、また西側隅からは不整形のピットを検出した。



第78図 54・55号土坑出土土器実測図 (1/4)

確認面から底面までの深さは、南側で22cm、中央で30cm、北側で35cm、ピット内で40cmを測る。

出土土器（図版36、第78図）

壺（1） 1は口縁部が大きく開くもので、口縁端部内面に粘土を貼付して肥厚させる。肥厚部分は小さく、内傾する。頸部内面は縦ヘラミガキ、外面は縦ハケ後横ヘラミガキ、口縁部内外面は横ヘラミガキ調整を行う。口径25.0cm。

甕（2・3） 2は如意形口縁のもので、器内は薄い。口縁部内外面は横ナデ、胴部内面はナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。3は内傾する胴部から緩く外反する口縁部へと続くもので、口縁部下方に断面三角形の刻目突帯を貼付する。内面は横ヘラミガキ、外面口縁部付近は横ナデ、胴部は縦ヘラミガキ調整を行う。

台付鉢（4） 4は台付鉢の胴部であろう。4方向に長方形透かし孔を配置する。

当土坑は弥生時代前期末に比定出来る。

55号土坑（第75図）

調査区西側で検出した。北西側が調査区外へと伸展し、また54号土坑と重複しているため、規模・プラン等は不明である。調査した部分では、長軸2.6m、短軸1.5mの不整形である。壁はやや急角な立ち上がりとなる。平面はほぼ水平だが、南側に不整形のピットを、また北側に土坑状の窪みを検出した。確認面からの深さは、ピット内で40cm、中央で25cm、北側で42cmを測る。

出土土器（図版36、第78図）

壺（5・6） 5は鋤先形となる口縁部で、上面は水平に伸びる。内法口径21.0cm。6は壺の頸部片で、ヘラ描き縦線紋、縦方向の貝殻描き無軸羽状文から成る文様を施す。

甕（7～15） 7・8はやや内傾する口縁端部外面に刻目突帯を貼付するもので、内面横ヘラミガキ、外面口縁部付近横ハケ、胴部縦ハケ調整を行う。9は直立する胴部から、短く強く外反する口縁部へと至るもので、口縁端部に刻目を施し、また口縁部下方に長く垂下した刻目突帯を貼付する。胴部内面は横ヘラミガキ、外面は横ナデ調整を行う。口径38.0cm。10は口縁部を水平に近く短く外反させるもので、胴部内面はナデ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。11はやや内傾する胴部から、屈曲して大きく開く口縁部へと至るもので、屈曲部内面に弱い稜をもつ。器内は非常に薄い。胴部内面はナデ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。口径28cm。12は内湾しながら直立する胴部から、短く外反する口縁部へと至るもので、屈曲部内面に弱い稜をもつ。胴部内面は横ヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は斜ハケ調整を行う。口径31.6cm。13は裾の広がる高い底部で、内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.4cm。14はやや裾の広がる厚い底部で、内面はナデ、外面底部付近は縦ハケ、底部上方は縦ヘラミガキ調整を行う。底径8.3cm。15は直立気味に立ち上がる底部で、内面ナデ後縦ヘラミガキ、外面縦ハケ調整を行う。底径7.8cm。

蓋（16） 16は頂部が窪むつまみ部から大きく開く裾部へと続く甕用蓋で、器高が高い。内面

上半は縦ヘラミガキ、下半は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ調整を行う。つまみ部には指痕が明瞭に観察出来る。口径30.0cm、つまみ径7.2cm、器高14.8cm。

台付鉢 (17) 細片のため断定し得ないが、台付鉢の脚部片と考えている。裾部はやや開き、端部を平坦に仕上げる。内面横ナデ、外面横ヘラミガキ調整を行う。

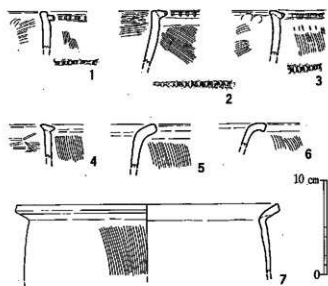
高坏 (18) 18は高坏の脚柱部で、内面ナデ、外面縦ヘラミガキ調整を行う。

出土遺物にはやや時期幅があると思われる。前期末～中期前半のものである。

56号土坑 (第75図)

調査区西隅で検出した。大半が調査区外へと伸展しており、プラン・規模等は不明。東側壁に沿って、テラス状の高まりがある。壁はやや急な角度で立ち上がる。底面は東から西へと若干傾斜している。確認面からの深さは、テラス部で10～20cm、西側で40cmを測る。

出土遺物は細片が多く、図示し得なかった。

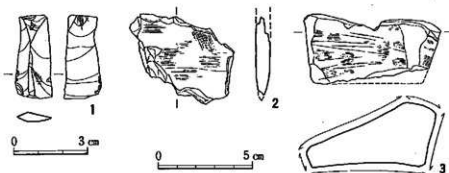


第79図 F地区ビット出土土器実測図 (1/4)

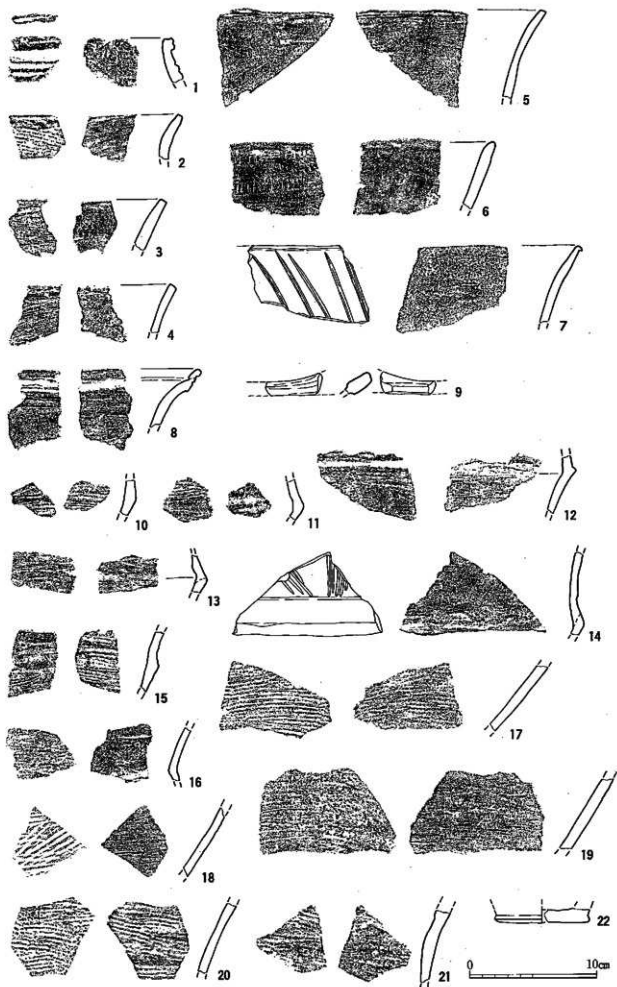
ビット出土土器 (図版36、第79図)

甕 (1～7) 1は直口縁のもので、口縁端部からやや下がった位置に刻目

突帯を貼付するもので、刻目は小さくまばらに施される。内面横ヘラミガキ、口縁部外面横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。2は口縁外端部に接して刻目突帯を貼付するもので、上端は水平になる。3は口縁端部を覆う様に、外傾する刻目突帯を貼付する。4は3とほぼ同形だが刻目は施



第80図 F地区出土土器実測図 (1:2/3、2・3:1/2)



第81图 下所原宫园遗址出土绳文土器实例图① (1/3)

されない。5は如意形口縁のもので、内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。6は口縁部が水平近くまで外反する。7は内傾する胴部から、内面に不明瞭な稜をもって屈曲し、短く直線的に開くもの。内面ナデ、口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケ調整を行う。口径28.0cm。

F地区出土石器（図版36、第80図）

使用痕ある剥片（1） 姫島産黒曜石製のもの。縦長剥片の両側縁を使用したもので、使用の際の刃こぼれが認められる。53号土坑出土。

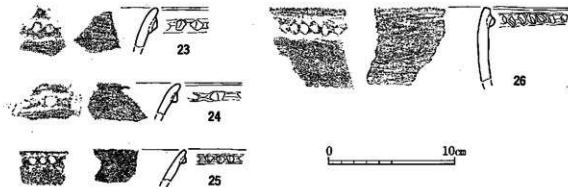
磨製石包丁（2） 頁岩質のもので、大半を欠失する。53号土坑出土。

砥石（3） 砂岩製のもので、非常によく使用している。表面に幅1mm程の幅広の擦痕が観察される。刃部を研いだ際のものか。53号土坑出土。

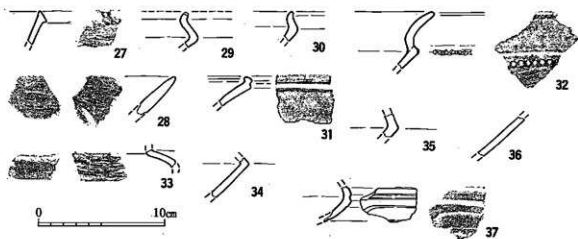
6 縄文土器（図版37・38、第81～83図）

下唐原宮園遺跡では、縄文時代に属する土器が若干量出土している。これらは遺構に伴うものではなく、包含層や弥生時代の遺構に混入した状態での出土である。従って、ここでは当遺跡出土の縄文時代土器として一括し、説明を行う。

深鉢（1～22） 1は内傾する口縁部で、口縁部上端および外面に沈線を巡らす。磨減が著しい。2は外反する口縁部で、内面横条痕のちナデ、外面横条痕調整。3は外傾するもので、内外面横条痕後ナデ。4も外傾するもので、内面横条痕後ナデ、外面横条痕調整。5はやや外反する口縁部で、内外面横条痕後ナデ調整を行う。6は口縁端部を丸くするもので、内外面を丁寧にナデ調整した後、胴部外面に沈線状の刻目を巡らす。7は内面横条痕後ナデ、外面横条痕後斜線文を施す。8は外反する胴部から、屈曲して、非常に短い口縁部へと続くもので、内外面に不明瞭な沈線を巡らす。9はリボン状突起で、どのような器形に付されたのかは不明。10は屈曲部内面に稜をもたない。内外面横条痕調整。11は口縁部がやや内傾しながら立ち上がるもので、内外面横条痕調



第82図 下唐原宮園遺跡出土縄文土器実測図② (1/3)



第83図 下唐原宮園遺跡出土縄文土器実測図③ (1/3)

整を行う。12は屈曲部外面を突帯状に仕上げる。内外面横条痕後ナデ調整を行う。13は内外面横条痕調整。14は屈曲部上方に沈線状の段を巡らせ、さらにその上方に斜または縦方向の平行沈線による文様を配置する。内外面横条痕後ナデ調整を行うが、文様部分は横条痕後施文し、ナデは行っていない。15は屈曲部からさらに外反して上方へ伸びるもので、内外面横条痕調整。16は屈曲部から開くもので、内面横条痕後ナデ、外面横条痕調整を行う。17~21はいずれも横条痕調整を行うもの。22は裾部がやや張り出す底部で、底径7.4cm。

刻目突帯文土器 (23~26) 23は浅く大きな刻目を施すもので、内面横条痕調整を行う。外面は風化が著しく調整不明。24は大きく深い刻目を疎らに施すもので、内面横条痕、外面ナデ調整を行う。25はやや小さな刻目のもので、内外面ナデ調整を行う。26は棒状工具による大きく深い刻目を密に施すもので、内外面横条痕調整を行う。

浅鉢 (27~37) 27は口縁端部外側を突帯状にするもので、上端部は尖る。内外面横条痕調整。28は大きく開く口縁部のもので、内外面横条痕調整。29は逆「く」字形に強く屈曲するもので、さらに口縁端部は屈曲して短く外反する。30は29よりも屈曲が弱い。31は口縁端部が短く直立し、内外面に浅く不明瞭な沈線を巡らす。32は鋭く屈曲して、さらに大きく外反して長く伸びる口縁部へと至るもので、屈曲部外側に刻目を巡らす。口縁部外側には一部に朱が認められる。33は強く内傾するもので、内面横条痕、外面ヨコナデ調整を行う。34は直線的に伸びる体部から、強く「く」字形に屈曲するもので、内外面ヘラミガキ調整を行う。35は内外面ヘラミガキ調整。36は内外面横ヘラミガキ調整を丁寧に行う。37は外面に浮彫風の文様を施文する。

第4章 おわりに

1 遺跡について

今回、下唐原宮園遺跡の発掘調査で発見された遺構・遺物を概観してみると、大半が弥生時代に比定されるものであるが、その他の時期に該当する遺構・遺物も若干発見されている。以下では各時代毎に遺跡の性格をまとめてみたい。

縄文時代

当遺跡で発見された中で最も時期的に遡る遺物は、第81図-1の鐘崎系の土器である。判別し得たのはわずか1点であり、器表もかなり磨滅している事から、2次堆積の可能性が高い。当遺跡周辺では、大平村上唐原遺跡、三光村佐知遺跡、阿佐知久保遺跡で該期の集落遺跡が発見されており、縄文時代後期前半にはこの山国川流域の各所で集落が形成されたことを物語る。

当遺跡でこれに続く時期のものとして、縄文時代晩期に属する遺物が挙げられる。これらは遺構に伴うものではないが、量的にややまとまったものであり、この時期に当地域にも集落が形成されたことを示すものである。類似資料として、北九州市貫川遺跡出土の資料があり、中でも貫川Ⅱ式と設定された資料とはほぼ同時期のものであろう。

この中で、第82図-7、14は瀬戸内系の影響が色濃く見られるものであり、また第83図-37は榎原式文様のものとして注目に値する。

弥生時代

弥生時代早期の遺物として、刻目突帯文土器が数点出土している。いずれも遺構に伴うものではなく、また点数も少なく詳細を窺い知ることは出来ない。第83図-32は当時期に属する可能性もあるが、それ以外は伴件遺物として判断出来るものはなかった。当該期の類似資料として、大分県狭間町下黒野遺跡出土土器がある。

弥生時代早期に後続する時期のものとして、前期前半・中葉の遺物は出土しておらず、前期後半に属する遺物が出土している。A地区1号堅穴およびA地区包含層出土遺物が該当するが、またこれは当遺跡で確認し得た中では最も時期が遡るものである。集落形成の第一段階はこの時期に求められ、以降中期中葉まで集落は存続する。同じ山国川流域にある新吉富村中桑野・牛頭天王遺跡も前期後半に集落形成を開始しており、同様の傾向として指摘される。

集落が盛行するのは前期後半からであり、それは出土した遺物の量からも容易に推察される。検出した遺構は、円形堅穴住居、堅穴、土坑がある。土坑の性格については、丘陵・台地上で検出される円形袋状貯蔵穴に対し、微高地・低地で検出される長方形土坑・掘立柱建物が貯蔵施設としての役目を果たすものと想定されており、当遺跡で検出された長方形土坑も貯蔵穴として機

能したものであろう。そうすると、基本的には1棟の竪穴住居と、それに付属する数基の貯蔵穴とで生活単位を構成している様子が窺え、当該期の集落の典型例と言える。これらの土坑から出土した遺物はいずれも底面から若干浮いており、また廃棄された状態なので、貯蔵穴としての役目を終えた後、廃棄場として再利用されたものであろう。

中期後半に属する遺物はほとんど見られず、この頃に集落は廃絶したようである。後期末末には1号竪穴住居が営まれるが、単発的なものであり、後続しない。

古墳時代

古墳時代の遺構は3号住居が1棟検出されているにすぎない。この住居は一辺4m前後の隅丸方形プランで4本の主柱穴を持ち、北西側壁にカマドを付設するといった、6世紀後半前後の一般的な住居形態を示すものである。通常1棟単独で検出されることはあまり無く、調査区外に当該期の集落が展開する可能性が高い。

古代～中世

3号竪穴、1～3号溝状遺構、包含層から若干遺物が出土しているにすぎず、詳細な時期及び集落形態を判断する事は出来ない。付近に当該期の遺構が存在する可能性があるとは指摘出来るのみである。

2 弥生土器について

今回の発掘調査では、主として弥生時代前期後半から中期中葉にかけての弥生土器の出土をみた。しかし、遺構同士の重複が著しい状態だった事もあり、必ずしも全てが良好な一括資料とは言えない状況にある。以下では比較的良好的一括資料と思われる遺物を中心に、当遺跡出土弥生土器の様相を概観する。

弥生時代前期後半に属する遺物としては、1号竪穴出土土器(第10図)が挙げられる。壺は胴部や頸部を区別する明瞭な段はもはや見られず、3のようなヘラ状工具の押しつけによる不明瞭な段または1のような沈線による区画を行う。口縁部は開き気味に長く伸び、粘土帯による肥厚はない。肩部の文様帯はヘラ描きによる横沈線、無軸羽状文で構成される1・3と、ヘラ描きによる重弧文とがある。貝殻施文のものは見られず、前期末のものに比べて精美な印象を受ける。壺は総じて薄く大きな平底である。口縁部は如意形口縁で、下端部に刻目を施す。6・7・12の様に胴部上半に沈線を巡らせるものが多い。7の様に胴部上半が丸く張るもの、また9・12の様に内面ヘラミガキ調整を行うものは、地域的傾向として指摘出来る。

前期末に属すると思われる遺物は各遺構・包含層中に散見されるものの、良好な一括出土資料と言えるものは無い。これに準ずる資料として3号土坑(第13図)、48号土坑(第53図)出土土器を挙げておく。壺は頸肩境に断面三角形の貼り付け突帯を巡らすものが多く、口縁部は大きく

開いて長く伸びる。第22図-2、第58図-1の様に口縁部内面にヘラまたは貝殻による文様を施すもの、また第24図-4の様に口縁部内面に断面三角形の突帯を貼付するものもこの時期であろう。肩部の文様帯は、ヘラまたは貝殻描きによる横沈線、無軸羽状文、山形文、木葉文等で構成されるが、前期後半のもの比べると非常に複雑なものである。甕は第50図-5・7の様に径の大きな厚い底部のものがあり、前期から中期への過渡的様相が窺える。口縁部は第13図-17~19、第50図-7・8の様な如意形口縁のもの他に、第50図-5・6、第53図-2の様に口縁端部に断面三角形の突帯を貼付する中期的な例も出現している様であり、やはり過渡期としての様相を示すものである。他に、下城式と呼称されるタイプの甕も少なからず存在する。

中期初頭に属すると思われる遺物も各遺構、包含層中にあるものの、やはり良好な一括資料は無い。これに準ずるものとして、52号土坑(第57図)出土土器を挙げておく。壺は1の様に前期的な特徴を残すものがある。その他のものとして、第78図-1の様に直立する頸部をもつもので、口縁部内面を幅広く肥厚させる例、第20図-2の様に直立する細い頸部をもち、肩部に文様帯を巡らす例を挙げておく。甕は11~14の様に如意形口縁をさらに強く外反させた形状のもの、または8・9・15の様に口縁端部に大きな突帯を貼付するものがある。底部は15の様に柱状の高いものか、あるいは第41図-12・13の様にやや裾が開く高いものとなる。全体的に前期末、中期前半との差はつきりせず、不明瞭感は拭えない。

中期前半に属する遺物として、比較的良好な出土状態の2号堅穴(第26・28図)、53号土坑(第76・77図)出土土器を挙げておく。壺は第26図-3、第76図-6の様に頸部から口縁部にかけて開く直口縁のもの、または第26図-1・6、第76図-1~4の様に口縁端部を短い鋤先形口縁にするものが主体的となる。いずれもやや細身の胴部で、最大径部分や肩部、頸部に突帯を巡らす。第76図-4が断面三角形突帯なのに対し、第26図のものは断面台形で、やや後出する要素をもつ。第76図-5の様に前期の形態を残すものも見られる。甕は裾がやや開く高い底部をもち、胴部上半がやや内傾するものが多い。屈曲部内面には不明瞭な稜をもつ。また、第77図-13・16の様に口縁端部を跳ね上げ気味にするものがある。第77図-12の様に、胴部上半に断面三角形の突帯を貼付するものもあるが、遺跡では意外に少ない。この他、2号堅穴からは脚柱部がやや長く伸び、坏脚接合部に突帯を巡らす高坏等も出土している。

中期中葉に属すると思われるものとして、10号土坑(第37図)、51号土坑(第56図)出土土器が挙げられる。また混入が多く認められるが、5号住居(第24図)出土土器を挙げておく。壺は第24図-6~9の様に口縁端部が水平に長く伸びた鋤先形口縁のものがある。第24図-10もこの時期のものであろう。甕は前段階と同様のものの他に、第37図-6の様に胴部上半がかなり内傾し、屈曲部内面に明瞭な稜をもつものがある。また、第37図-8、第56図-6の様に、突帯の位置が屈曲部近くまで接近するものもある。

地区名	旧番号	報告番号	地区名	旧番号	報告番号
A地区	1号竖穴住居	1号竖穴住居		26土壌	欠番
	土器群14~20	1号竖穴住居		27土壌	27号土坑
	2号竖穴住居	2号竖穴住居		28土壌	28号土坑
	土器群12・13	2号竖穴住居		29土壌	29号土坑
	竖穴1	1号竖穴		30土壌	30号土坑
	土器群3~9・11	1号竖穴		31土壌	31号土坑
	1号土壌	1号土坑		32土壌	32号土坑
	2号土壌	2号土坑		33土壌	欠番
	3号土壌	3号土坑		34土壌	欠番
	A地区包含層・遺構面	A地区包含層		35土壌	35号土坑
	土器群1・2・10	A地区包含層		36土壌	36号土坑
B地区	3号竖穴住居	3号竖穴住居		37土壌	37号土坑
	4号竖穴住居	4号竖穴住居		38土壌	38号土坑
	5号竖穴住居	5号竖穴住居		39土壌	39号土坑
	竖穴2	2号竖穴		40土壌	40号土坑
	土器群22	2号竖穴		41土壌	41号土坑
	竖穴3	3号竖穴		42土壌	42号土坑
	竖穴4	4号竖穴		43土壌	43号土坑
	4土壌	4号土坑		44土壌	44号土坑
	5土壌	5号土坑		住5内土壌45	45号土坑
	6土壌	6号土坑		46土壌	46号土坑
	7土壌	7号土坑		47土壌	47号土坑
	8土壌	8号土坑		48土壌	48号土坑
	9土壌	9号土坑		土壌墓1	49号土坑
	10土壌	10号土坑		土壌墓2	50号土坑
	11土壌	11号土坑		土壌墓3	51号土坑
	12土壌	12号土坑		土壌墓4	52号土坑
	13土壌	13号土坑		B地区包含層	B地区包含層
	14土壌	14号土坑		B地区遺構上面・遺構面	B地区包含層
	15土壌	15号土坑	C地区	C地区・C地区落ち込み	C地区
	16土壌	16号土坑	E地区	溝1	1号溝状遺構
	17土壌	17号土坑		溝2	2号溝状遺構
	18土壌	18号土坑		溝3	3号溝状遺構
	19土壌	19号土坑		E地区包含層	E地区包含層
	20土壌	欠番	F地区	土壌1	53号土坑
	21土壌	21号土坑		土壌2	54号土坑
	22土壌	22号土坑		土壌3	55号土坑
	23土壌	23号土坑		土壌4	56号土坑
	24土壌	欠番		F地区包含層	F地区包含層
	25土壌	25号土坑			

第1表 新旧番号対応表

器種	出土地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	押部番号	登録番号	備考
土鏝	包含層	土師黄	3.4	1.2	孔径0.45	3.8	17-1	844	先端欠損
土鏝	包含層	土師黄	5.3	2.0	孔径0.6	20.7	2	843	先端欠損
土鏝	2号土坑	総局産黒曜石	1.8	1.65	0.4	0.85	3	914	基部欠損
石鏝	包含層	サヌカイト	2.0	1.8	0.3	0.8	4	890	
石鏝	2号住居	サヌカイト	3.3	1.9	0.65	2.3	5	899	先端欠損
打製石斧	包含層	片岩質	2.6	4.65	0.75	14.4	6	903	先端のみ
石鏝	1号住居	粘板岩	3.5	3.1	0.6	6.5	7	818	
石鏝	ビット	片岩質	3.1	3.6	0.7	7.2	8	816	
石鏝	包含層	粘板岩	3.7	2.95	0.8	8.5	9	817	
石鏝	包含層	頁岩質	5.7	2.1	0.7	9.9	10	811	
石鏝	包含層	銅製					11	837	
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	1.3	1.4	0.25	0.35	62-1	874	先端欠損
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	1.7	1.2	0.4	0.45	2	872	基部欠損
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	1.85	1.5	0.35	0.6	3	856	基部欠損
石鏝	45号土坑	サヌカイト	1.1	1.4	0.2	0.3	4	893	欠損
石鏝	19号土坑	サヌカイト	1.3	1.5	0.35	0.5	5	891	基部欠損
石鏝	4号住居	サヌカイト	1.2	1.55	0.3	0.35	6	895	基部欠損
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	1.4	1.35	0.25	0.3	7	870	基部欠損
石鏝	19号土坑	総局産黒曜石	1.5	1.5	0.4	0.35	8	867	基部欠損
石鏝	包含層	サヌカイト	1.25	1.5	0.3	0.35	9	888	欠損
石鏝	5号住居	サヌカイト	1.8	1.7	0.3	0.55	10	892	
石鏝	46号土坑	総局産黒曜石	1.5	1.9	0.3	0.6	11	884	先端欠損
石鏝	B地区包含層	総局産黒曜石	1.6	1.65	0.4	0.65	12	864	先端・基部欠損
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	2.0	1.8	0.3	0.55	13	869	基部欠損
石鏝	5号住居	サヌカイト	1.8	2.15	0.35	0.8	14	889	
石鏝	19号土坑	総局産黒曜石	2.1	2.0	0.5	1.45	15	857	
石鏝	10号土坑	総局産黒曜石	1.9	1.65	0.4	0.75	16	854	
石鏝	19号土坑	総局産黒曜石	2.7	1.8	0.5	1.95	17	887	
石鏝	B地区ビット	総局産黒曜石	2.5	1.4	0.4	0.8	18	883	先端欠損
石鏝	5号住居	サヌカイト	2.6	1.5	0.35	1.1	19	861	基部欠損
石鏝	包含層	サヌカイト	1.3	1.3	0.3	0.35	20	894	欠損
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	1.75	1.25	0.3	0.45	21	859	
石鏝	B地区ビット	総局産黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.6	22	858	先端欠損
石鏝	51号土坑	総局産黒曜石	2.0	1.35	0.4	0.8	23	860	
石鏝	溝1	総局産黒曜石	2.0	1.4	0.45	0.9	24	875	先端・基部欠損
石鏝	B地区包含層	総局産黒曜石	2.0	1.6	0.3	0.9	25	855	先端・基部欠損
石鏝	B地区ビット	総局産黒曜石	2.2	1.8	0.3	0.7	26	881	先端・基部欠損
石鏝	2号形六	総局産黒曜石	2.35	1.45	0.35	0.75	27	880	
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	1.2	1.0	0.25	0.25	28	871	
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	1.4	1.55	0.4	0.55	29	873	
石鏝	30号土坑	総局産黒曜石	1.35	1.5	0.3	0.3	30	868	
石鏝	19号土坑	総局産黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.45	31	862	基部欠損
石鏝	51号土坑	総局産黒曜石	1.5	1.4	0.25	0.4	32	863	基部欠損
石鏝	36号土坑	総局産黒曜石	1.75	1.7	0.35	0.7	33	886	
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	1.7	1.55	0.25	0.6	34	878	
石鏝	45号土坑	総局産黒曜石	1.85	1.85	0.35	1.15	35	885	先端・基部欠損
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	1.6	1.05	0.35	0.45	36	866	基部欠損
石鏝	5号住居	総局産黒曜石	1.6	1.25	0.3	0.45	37	865	先端欠損
石鏝	19号土坑	総局産黒曜石	2.05	1.5	0.25	0.7	38	876	未製品
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	2.6	1.6	0.5	1.7	39	879	
石鏝	24号土坑	サヌカイト	2.65	1.5	0.35	1.3	40	892	先端欠損
石鏝	4号住居	サヌカイト	2.8	1.6	0.4	1.5	41	897	
石鏝	5号住居	サヌカイト	3.2	1.05	0.3	1.15	42	893	
石鏝	B地区ビット	サヌカイト	3.15	1.45	0.4	1.6	43	891	
石鏝	19号土坑	サヌカイト	2.8	1.9	0.5	2.45	44	898	
石鏝	34号土坑	総局産黒曜石	3.0	1.9	0.5	3.0	45	877	
石鏝	5号住居	サヌカイト	3.3	1.9	0.65	2.3	46	890	
石鏝	B地区ビット	サヌカイト	3.6	2.1	0.4	3.0	47	896	
石鏝	4号住居	総局産黒曜石	4.6	2.0	0.55	3.7	48	882	
尖頭器状石器	4号住居	総局産黒曜石	1.8	1.75	0.65	1.8	63-49	895	
尖頭器状石器	5号住居	総局産黒曜石	2.3	2.2	0.8	3.0	50	894	
ドリル	38号土坑	総局産黒曜石	3.25	1.6	0.8	3.6	51	897	
スタレイパー	B地区包含層	総局産黒曜石	5.65	3.3	0.75	12.2	52	898	
スタレイパー	25号土坑	粘板岩質	2.9	4.8	0.9	11.9	53	907	
スタレイパー	20号土坑	粘板岩質	3.3	5.8	0.8	15.3	54	906	
不明石製品	32号土坑	総局産黒曜石	2.85	0.9	0.4	1.05	55	896	
不明石製品	33号土坑	サヌカイト	2.8	1.1	0.7	1.6	56	901	
不明石製品	3号形六	総局産黒曜石	2.95	1.3	0.9	2.6	57	913	
不明石製品	4号形六	総局産黒曜石	4.3	1.3	1.0	4.2	58	900	
不明石製品	51号土坑	総局産黒曜石	2.8	1.7	0.55	2.9	59	912	

第2表 石製品・土製品・鉄器観察表

品名	出工地点	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	押印番号	登録番号	備考
使用痕ある割片	35号土坑	姫島産黒曜石	2.8	3.35	0.95	6.05	60	915	
打製石斧	4号住居	粘板岩	1.8	4.35	1.1	8.5	64-61	833	刃部のみ
打製石斧	5号住居	粘板岩	3.4	6.0	0.8	16.8	62	853	刃部のみ
打製石斧	B地区包合層	粘板岩	8.0	6.0	1.0	65.8	63	842	基部欠損
打製石斧	B地区包合層	安山岩	6.9	7.25	2.15	125.0	64	899	刃部のみ
打製石斧	B地区包合層	粘板岩	6.5	6.1	1.0	41.7	65	834	刃部のみ
打製石斧	B地区包合層	粘板岩	6.9	5.2	1.5	66.0	66	848	刃部のみ
打製石斧	B地区包合層	安山岩	9.1	5.4	1.0	65.0	67	847	刃部欠損
打製石斧	B地区包合層	粘板岩	9.0	6.3	1.7	99.0	68	909	刃部欠損
打製石斧	18号土坑	粘板岩	10.3	5.3	1.75	159.0	69	902	刃部欠損
打製石斧	B地区包合層	片岩	9.7	5.5	2.2	149.5	70	908	刃部欠損
不明石製品	36号土坑	安山岩	8.0	5.1	1.2	58.0	71	910	一部のみ
磨製石鏡	36号土坑	緑泥片岩	3.0	1.45	0.2	1.4	65-72	851	
磨製石鏡	19号土坑	頁岩	5.4	1.35	0.3	2.3	73	852	
磨製石鏡	9号土坑	頁岩	8.1	3.0	0.25	10.6	74	826	先端部のみ
磨製石鏡	19号土坑	頁岩	3.75	3.7	0.7	12.9	75	828	一部のみ
磨製石鏡	19号土坑	頁岩	3.0	4.1	0.75	10.8	76	827	一部のみ
磨製石鏡	51号土坑	頁岩	3.8	2.35	1.2	10.6	77	829	一部のみ
磨製石鏡	2号溝	頁岩	4.4	3.25	0.8	15.6	78	825	一部のみ
磨製石鏡	B地区ピット	粘板岩	5.3	3.0	0.85	12.9	79	830	基部のみ
磨製石鏡	B地区包合層	頁岩	5.0	5.1	1.8	38.4	80	831	先端部のみ
扁平片状石斧	B地区ピット	粘板岩	4.8	2.6	1.25	33.6	81	822	欠損
柱状片状石斧	B地区包合層	粘板岩	8.0	1.2	1.3	21.9	82	823	一部欠損
柱状片状石斧	51号土坑	粘板岩	89	1.6	2.0	43.0	83	824	欠損
磨製石斧	B地区包合層	粘板岩	10.8	5.3	2.5	244.5	84	841	
磨製石斧	2号溝	粘板岩	13.1	5.8	2.8	375.5	85	836	
磨製石斧	31号土坑	粘板岩	11.5	6.8	3.5	417.5	86	835	刃部のみ
環状石斧	25号土坑	粘板岩	直径12.2		1.1	16.7	87	832	欠損
磨製石包丁	B地区包合層	凝灰岩	2.9	3.0	0.7	4.8	66-88	819	一部のみ
磨製石包丁	19号土坑	粘板岩	3.0	3.6	0.7	10.6	89	821	一部のみ
磨製石包丁	51号土坑	凝灰岩	5.0	4.1	6.0	12.6	90	813	一部のみ
磨製石包丁	51号土坑	凝灰岩	5.7	4.3	0.7	25.3	91	810	一部のみ
磨製石包丁	51号土坑	粘板岩	5.9	5.1	0.7	21.6	92	814	一部のみ
磨製石包丁	44号土坑	粘板岩	5.6	5.7	0.7	27.0	93	815	一部のみ
石鏃	30号土坑	砂岩	3.6	3.4	1.35	16.5	94	905	
石鏃	B地区ピット	砂岩	5.4	5.1	2.1	46.2	95	904	一部欠損
磨石	43号土坑	凝灰岩	3.4	4.4	3.4	48.9	96	805	一部のみ
磨石	4号住居	頁岩	5.2	3.7	2.3	72.6	97	807	一部のみ
磨石	46号土坑	砂岩	3.1	5.4	2.8	75.2	98	802	一部のみ
磨石	24号土坑	粘板岩	4.5	3.2	1.3	16.6	99	803	一部のみ
磨石	5号住居	凝灰岩	5.0	4.5	2.35	68.8	100	806	一部のみ
磨石	51号土坑	砂岩	10.2	2.65	1.7	59.9	101	809	
磨石	5号住居	砂岩	7.9	2.9	2.8	119.0	102	801	
磨石	19号土坑	粘板岩	5.5	6.8	1.4	55.8	103	804	
土器片	52号土坑					16.5	67-1		
土器片	5号土坑					36.3	2		
土器片	14号土坑					24.3	3		
土器片	19号土坑					19.0	4		
土器片	44号土坑	土師製	3.05	孔径0.4	1.8	8.2	5	846	一部欠損
土器片	52号土坑	土師製	0.65	孔径0.1	0.3	0.1	6	840	
土器片	B地区ピット	土師製	0.9	孔径0.1	0.3	0.2	7	839	
土器片	5号住居	土師製	1.3	孔径0.15	0.4	0.45	8	838	
土器片	包合層	滑石製	1.75	1.4	0.6	2.05	9	850	孔径0.15
不明石製品	包合層	安山岩	2.75	3.7	1.2	14.4	10	849	
古鏡	包合層		2.3			2.5	11		寛永通宝
鉄釘	包合層		4.9	0.4	0.4	2.8	68-1		
不明鉄製品	包合層		5.7	2.0	0.6	21.6	2		
不明鉄製品	3号溝		5.55	3.4	0.8	35.6	3		
不明鉄製品	36号土坑		5.7	4.0	0.4	48.2	4		
不明鉄製品	39号土坑		9.1	2.55	0.6	69.9	5		
土鏃	2号溝	土師製	3.9	孔径0.55	1.2	6.9	72-1	845	欠損
磨石	2号溝	泥岩	4.2	6.25	0.7	21.3	2	812	欠損
使用痕のある割片	53号土坑	姫島産黒曜石	3.5	1.45	0.4	2.3	79-1	911	
石包丁	F地区土坑	頁岩	5.6	4.7	0.8	20.7	2	820	一部のみ
磨石	53号土坑	砂岩	3.7	5.3	3.4	97.1	3	808	欠損

第2表 石製品・土製品・鉄器観察表

图 版

1 A地区全景
(東から)



2 A地区東半部
(西から)



3 A地区東半部
(東から)





1 1-2号住居
〔南から〕



2 1号住居
〔東から〕



3 1号住居遺物出土状態
〔東から〕

1 1号住居遺物出土状態
(南から)



2 1号住居遺物出土状態
(西から)



3 1号住居遺物出土状態
(西から)





1 1号壁穴
(南から)



2 1号壁穴遺物出土状態
(西から)



3 1号壁穴遺物出土状態
(西から)



1 1号土坑
(西から)



2 2号土坑
(西から)



3 3号土坑
(西から)



6-4



6-17



10-6



6-8



10-1



10-7



6-9



10-2



10-9



6-14



10-3



10-11



6-16



10-4



10-12



12-4



13-11



14-7



13-2



13-11



14-11



13-3



13-12



14-12



13-4



13-19



15-20



13-5



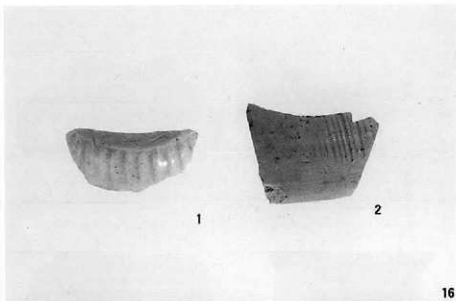
14-3



15-48



15-62



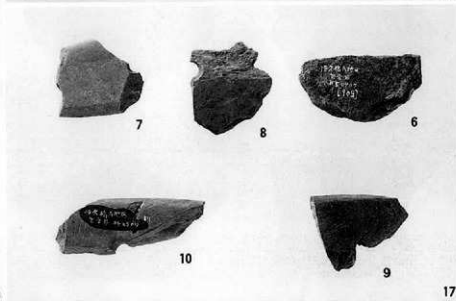
1

2

16



15-63



7

8

6

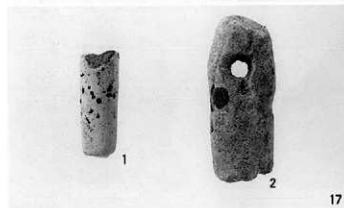
10

9

17



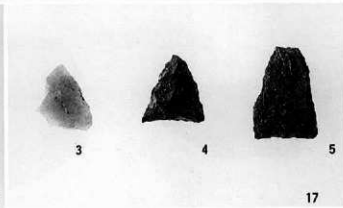
15-69



1

2

17



3

4

5

17



11

17



1 B地区から山国川を望む(南から)



2 B地区全景(東から)



1 B地区西半部



2 B地区4·5号住居付近

1 3号住居
(東から)



2 4号住居周辺
(東から)



3 4号住居
(東から)





1 5号住居周辺
(東から)

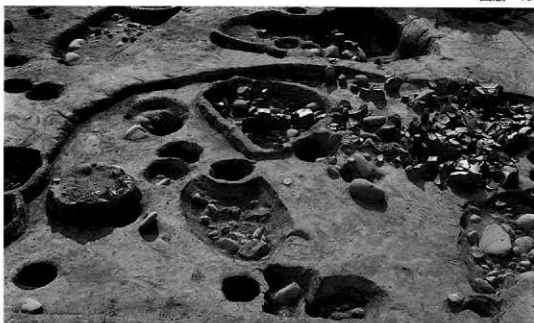


2 5号住居
(西から)



3 5号住居・45号土坑
(西から)

1 2号竪穴
(北から)

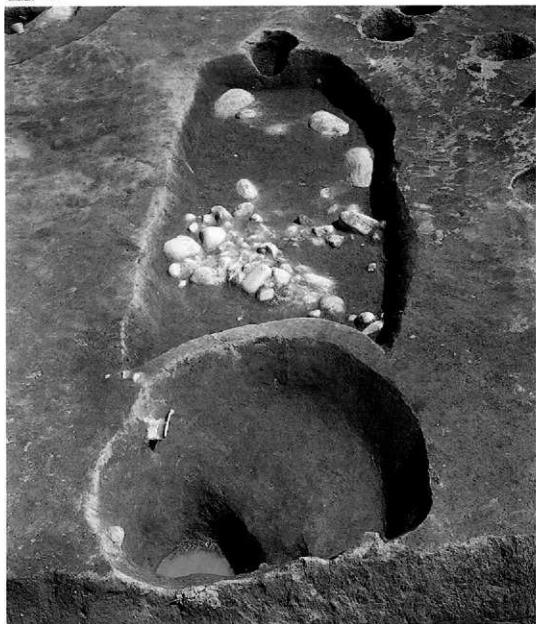


2 2号竪穴遺物出土状態
(北から)



3 3号竪穴
(北から)





1 5・6号土坑
(西から)



2 7・8号土坑
(西から)

1 9号土坑
(西から)



2 12号土坑
(東から)



3 13号土坑
(北から)





1 14号土坑
(西から)



2 15号土坑
(西から)



3 16号土坑
(北から)

1 25号土坑
(東から)



2 28号土坑
(西から)



3 29号土坑
(南から)





1 33土坑
(北から)



2 35号土坑
(北から)

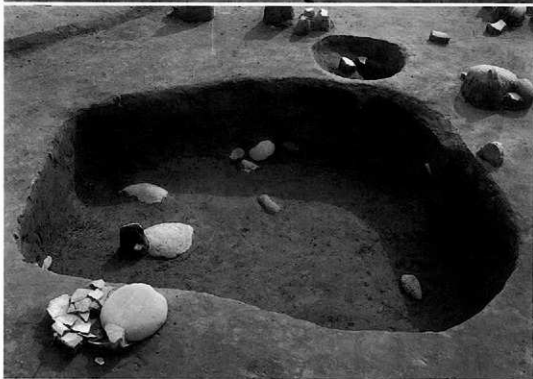


3 38号土坑
(東から)

1 42・43号土坑
(東から)

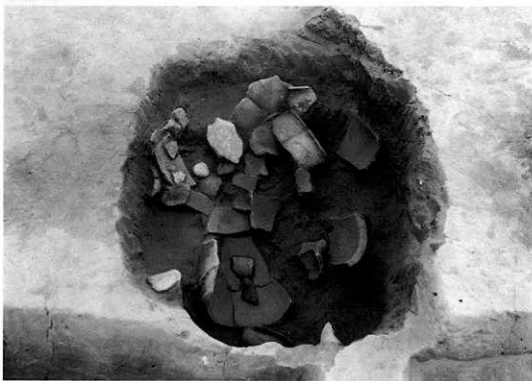


2 45号土坑
(北から)



3 45～47号土坑
(北から)





1 48号土坑
(南から)



2 49号土坑
(南から)



3 49号土坑遺物出土状態
(南から)

1 51号土坑
(西から)



2 51号土坑遺物出土状態
(南から)



3 52号土坑
(南から)





20-2



22-26



26-7



22-2



24-8



27-1



22-11



24-21



22-21



24-23



28-13



22-22



26-1



28-21



22-23



28-25



28-28



30-5



32-13



28-29



30-6



33-14



28-30



30-7



34-24



30-2



32-3



35-10



30-4



32-4



35-11



32-6



35-15



37-6



39-11



39-20



37-8



39-14



41-12



39-15



41-16



37-13



39-16



42-10



38-9



39-19



42-12



44-8



44-15



48-15



44-8



44-16



48-16



44-9



45-16



50-4



44-12



44-13



48-4



50-5



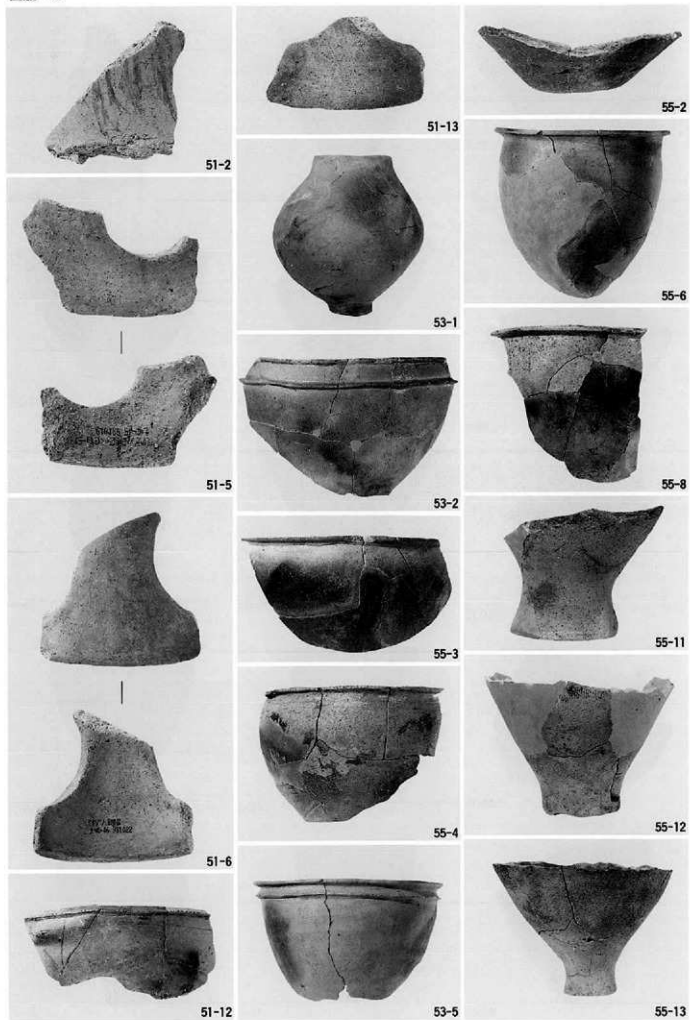
44-13



48-5



50-7





56-6



58-14



61-62



56-12



58-20



60-41



61-85



57-6



60-43



61-86



57-9



60-50



61-88



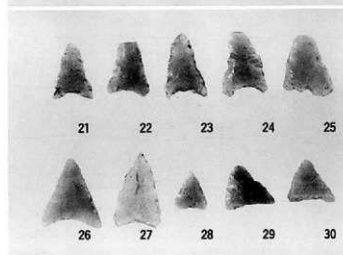
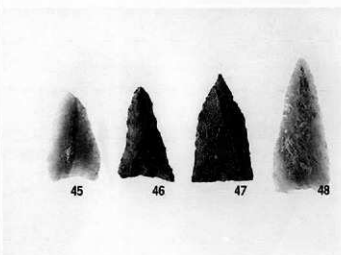
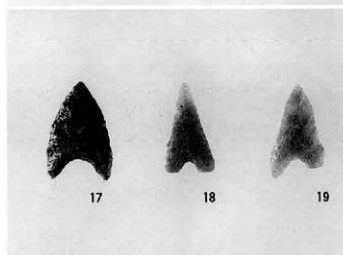
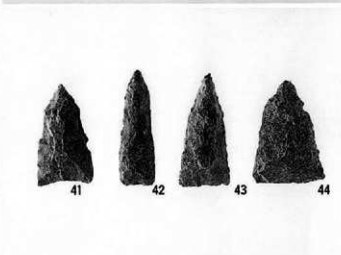
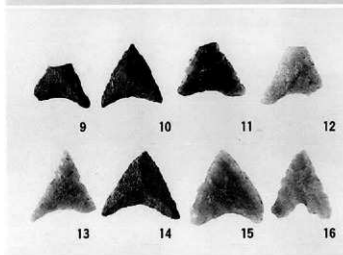
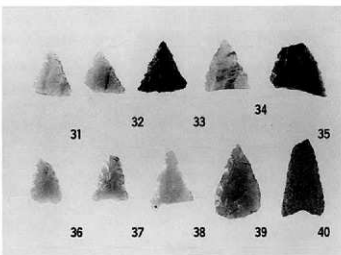
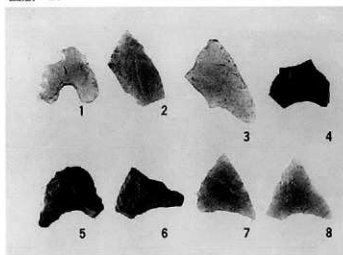
57-15

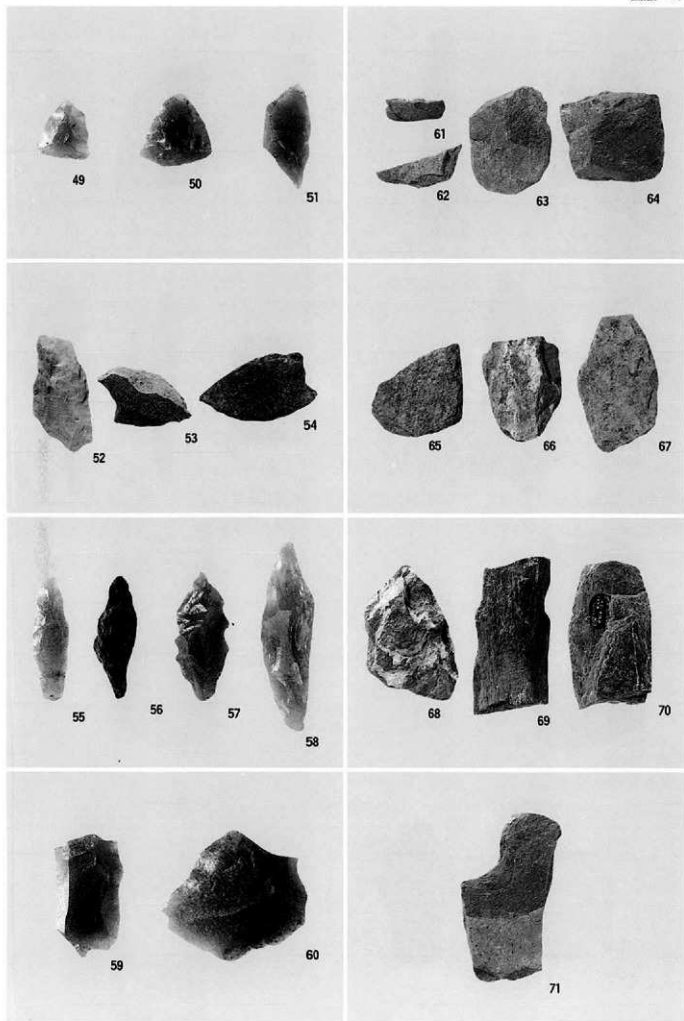


61-61



61-91

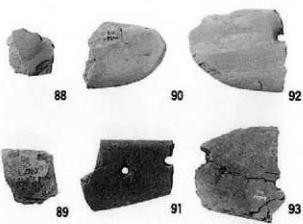








85



88

90

92

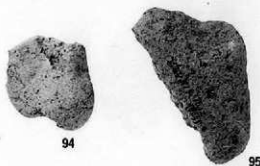
89

91

93

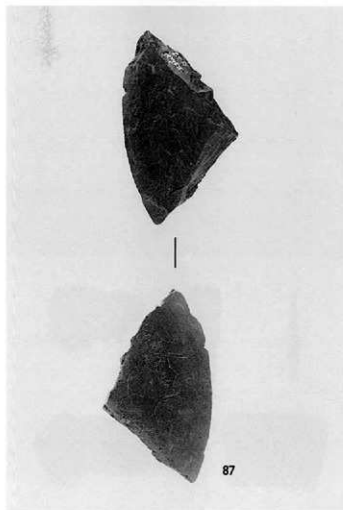


86

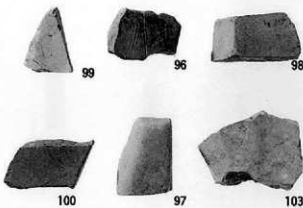


94

95



87



99

96

98

100

97

103



101

102



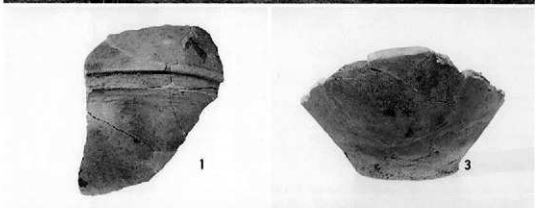
11



1 C地区全景
(西から)



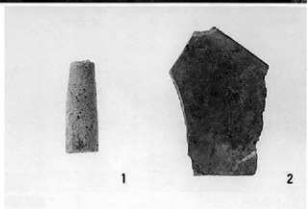
2 C地区出土土器



3 E地区全景
(北から)



4 E地区出土土製品・石器





1 F地区全景 (西から)



2 F地区調査風景 (東から)

1 53号土坑
(西から)



2 53号土坑
(北から)



3 54号土坑
(東から)





75-2



75-7



76-21



75-2



76-13



76-22



75-3



76-17



76-23



75-4



76-18



77-24



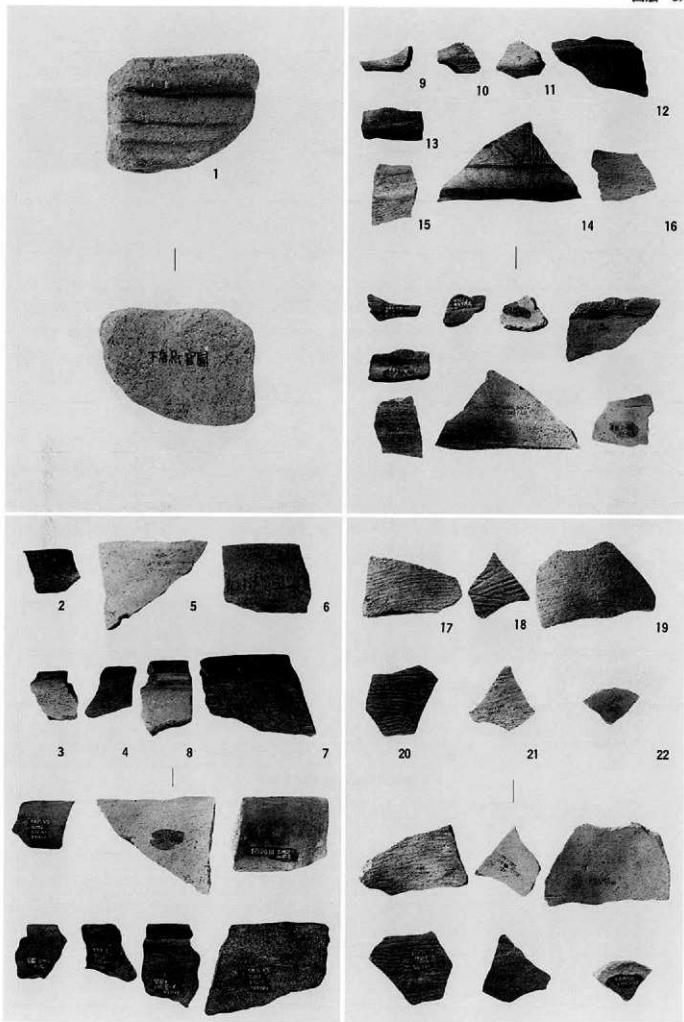
75-5



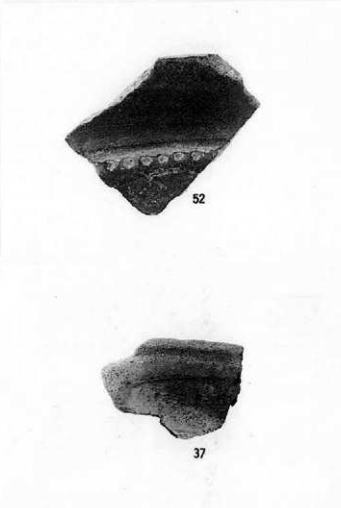
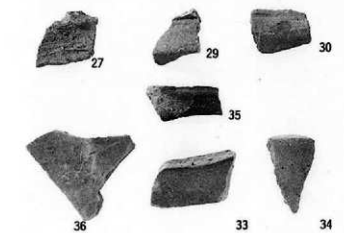
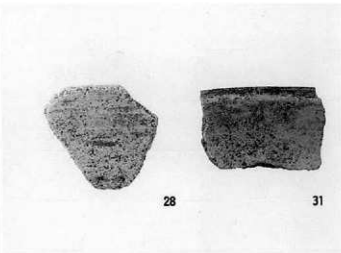
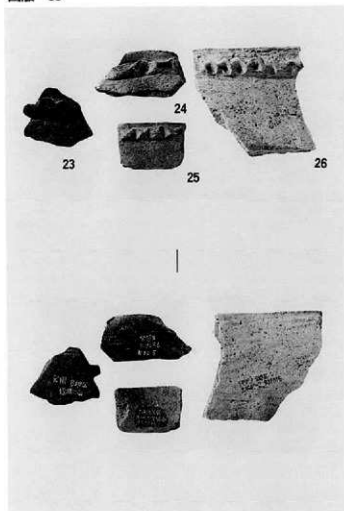
76-20



77-16



下唐原宮園遺跡出土縄文土器①



下唐原宮園遺跡出土縄文土器②

報告書抄録

ふりがな	しもとうばるみやぞのいせき							
書名	下唐原宮園遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2							
編著者名	吉田東明							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-0045 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下唐原宮園遺跡	福岡県築上郡 大平村大字下唐原 字宮園 他	40645		33° 33' 56"	131° 11' 26"	19930716) 1993122	3300	恒久橋 架設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下唐原宮園遺跡		弥生時代	住居、竪穴、土坑		弥生土器、石器			

Shimotoubaru-Miyazono Site

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 9	登録番号 19

一級河川山国川築堤改修関係埋蔵文化財調査報告

第 2 集

下唐原宮園遺跡

平成10年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 関西廣濟堂
豊中市箕池西町2丁目2-1